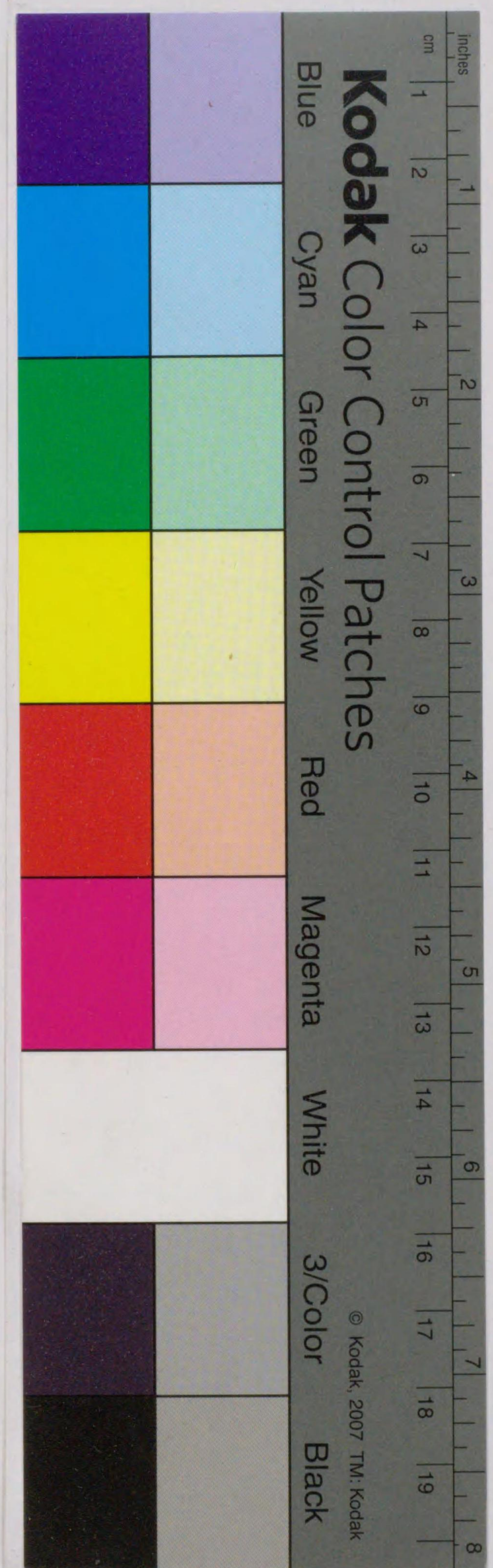


202
424

202-424
1200800035046

Handwritten text on a piece of paper taped to the book cover, including the number 123.



碁圍
上手位かせ

全

202
124

五段 關源吉著

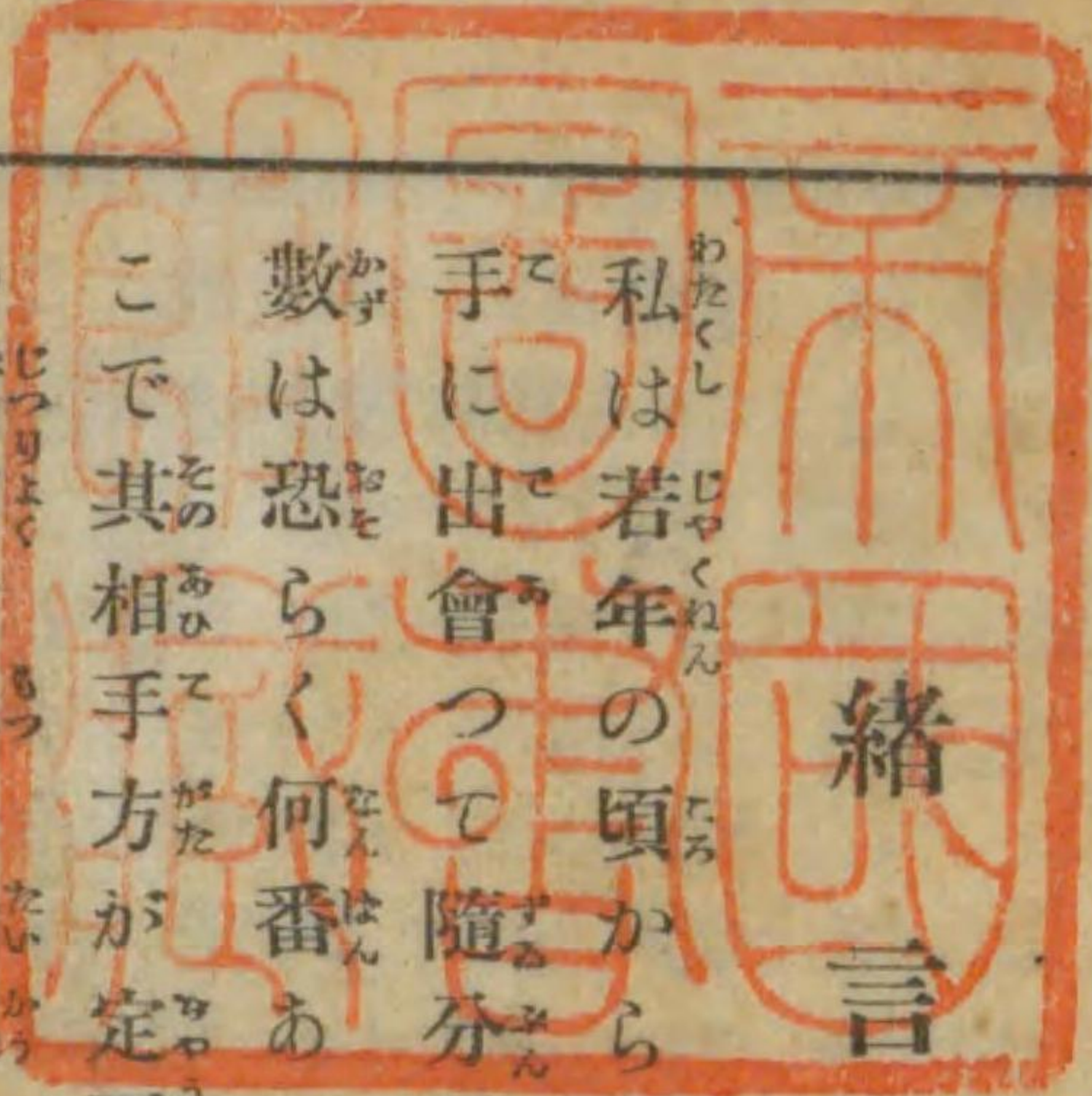
圍碁 上手泣かせ

東京 星文館發行

圍碁 上手泣かせ

五段 關源吉著

緒言



私は若年の頃から四方に遊歴を致し様々の下手に出會つて随分苦勞しました其打つた番數は恐らく何番あつたか數へ盡せまします。ここで其相手方が定石をかまはず所謂自己本能の實力を以て對抗してくるものには甚だ弱らせられた事がしばしばであつたが却つてなまなか定石を打つてくるものは存外與みし易く例へばそういふ手合にはこちらから定石外づれにやろうものなら直にあしらひ兼て迷惑してしまふと云つたようなわけでは是に於て今更

ながら「定石を知り定石を忘れよ」との格言を心から感じ且つ信ずるようになった。これは定石を十分能く會得して置て時には定石に拘束せられずと思ふ存分自己の力量を揮つて打べきことも善い。只無茶苦茶に力でさい打てば構はぬといふ意味ではない。だから豫め誤解のないやうに斷つておく。そこでいよ／＼本書は前編を井目から七目編迄後編を六目五目四目までの置碁に據つた打方を示す事となつたわけである。然し一寸見ると普通の石立のようだが其一手々々には私の年來嘗めた苦辛の精神が悉く籠つてをるのであるから漫然看過せられては甚だ残念至極である。何にしる所説が突飛で定軌に外れてをる點があるから普通の碁打先生などから見たら異様に感じて種々の批評が

5. 4. 11
内交

出であらうと思ふ一寸横道にはいるが全體在
來の圍碁教授法で私は十分とは思はぬなぜな
らば徒らに定石を教へたり手直しをしても論
より證據其教へられてをる人が餘り稽古をし
ない同輩の人と打つて割合に勝てぬことゝ
くそうはいわぬが大抵は御多分に洩れぬなる
ほど定石を學んだり手直しをするのも善いに
は違ひないがこればかりではほんの形式に流
れ易く眞に未だ其碁力を發揮すべき肝心な要
訣を覺らしめ得ぬ缺點があると考へる然し是
れは碁師の罪ばかりではなく習ふ方も心得が
違つてゐるからで先例を擧げていへば無暗置
石をへらしたがつたり其外行儀作法等しい
ざんまいのまねをして少しも眞摯に研究の體
度がないゆゑであるそこで私は此弊を救はん
がため左に列記したやうな簡單な對局の心得

對局の心得

一局に對する時は行儀を正しくして碁器は膝
の前に置き濱石は碁器の蓋の中に入れて置く
一局に對し一度打たる石は打直すまじき事能
能く考へ合して手を下すべし
盤又は石を弄する勿れ
助言を許さず
待ツタする者は上達せず
對局者に石を置くことを嫌ふ可からず
負くる事を嫌ふ可からず
負と見なば接戦の方略を取れ
勝碁は益堅實に打著せよ
對局した碁は下手上手に拘らず師より必ず
調を受くべし
但し負局は特に得失を聞く可し
駄目を詰めて後作らざるは法にあらず
定石を知り定石を忘れよ

五段關源吉識

圍碁上手泣かせ 對局の心得 圍碁に用ふる普通の術語

を定めた此の心得を堅く守つておいて此新案
打方について反覆練習玩味したならば上達は
必ず疑ひなからうと思ふ因て是を名づけて一
名上手泣かせと命じたのである

圍碁に用ふる普通の術語

- 立 ○行(伸と書く、出る) ○斜走(俗に桂馬)
- 尖 ○粘 ○綽(勿とも) ○約(處により捺)
- 單關(俗に一間) ○飛 ○幹 ○勒(處に)
- 刺とも) ○冲 ○覷(視くと) ○捉(取とも)
- 門(俗にアシ) ○斷(截切とも) ○打 ○赶(俗に)
- く書) ○點 ○征 ○聚 ○劫 ○撲(俗に打)
- く書) ○夾 ○詰 ○攻 ○盤 ○開(折とも)
- 眼做 ○生(活とも) ○死 ○殺 ○持
- 侵分 ○項 ○附(此項附は上、下)

(注意)此術語は本文説明中に屢々現はるゝものなれば宜しく参照すべし

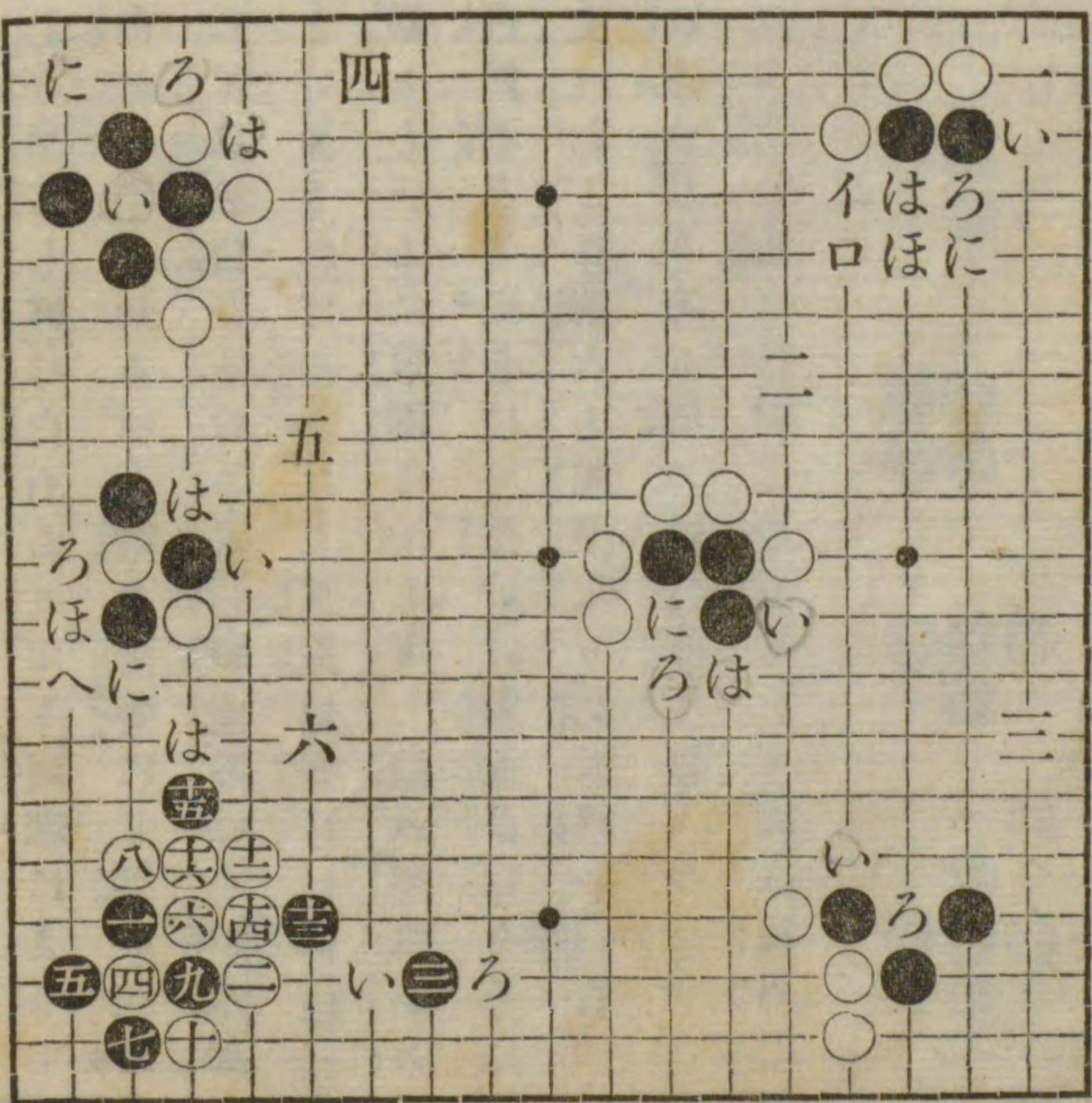
姿形の説明

第一三角圖の如き型出來白より(イ)へ綽ねられ
 たる時黒(ろ)又は(は)に打たば是れ即ち三角の悪
 形を自から作ることゝなるなり白(イ)へ綽し時
 黒(に)若くば(ほ)に單關すべし然る時は姿形善く
 なるなり然し最初より白(イ)に在りしとし而し
 て白(イ)の時黒形のみに腐心し(に)に飛ば白(ろ)
 に割込まれ黒の二石は逃ぐる能はずして白に
 取らるべし此場合には(ほ)の方に飛ぶべし白(イ)
 にある時は飛方に注意せざるべからず又白(イ)
 にあるのみならず(ロ)にも今一つ在るとせば如
 何此場合には(ほ)に飛ぶも白(に)に項けられて
 遁るゝ能はず因つて(ろ)に曲る外なし斯る形勢
 の生ぜし時は白より(イ)に綽ねられぬ様黒(イ)に
 伸ぶるを肝要とす第二四ツ目圖の如き形出來

ツソレタヨカワヲルスリチト〜ホニハロイ

第二圖

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九



白(イ)に押したる時黒(ろ)にコスメば白(は)にア
 テられ黒(に)に粘ば即ち四ツ目の型となるこれ
 黒(ろ)のコスミ悪しきがゆへなり(は)に伸びざる
 べからずと知るべし第三松葉圖の如き型出來
 の時白(イ)と綽ねられ黒(ろ)と粘げば即ち松葉
 の型となる故に示型にては今一つ黒(イ)にあれ
 ば本型なるを以て黒の手番なる時は是非とも
 (イ)に伸ぶべし第四梅鉢圖の如き型出來たる時
 黒(イ)へ粘ば即ち梅鉢となる故に黒(イ)に粘手に
 て(ろ)へ綽白(イ)に捉りし時黒(は)にアテ白二目粘
 黒(に)とカケツゲば黒の姿形善となり白は却つ
 て梅鉢となる良手と悪手とは斯くも相違する
 ものなり然し茲に最注意すべきは此梅鉢にな
 りても差支なき型ある事是なり即ち第五の如
 き型にて白(イ)に綽ね黒(ろ)へ捉り白(は)にアテ黒
 劫形を粘き梅鉢となる而して此形とは黒差支

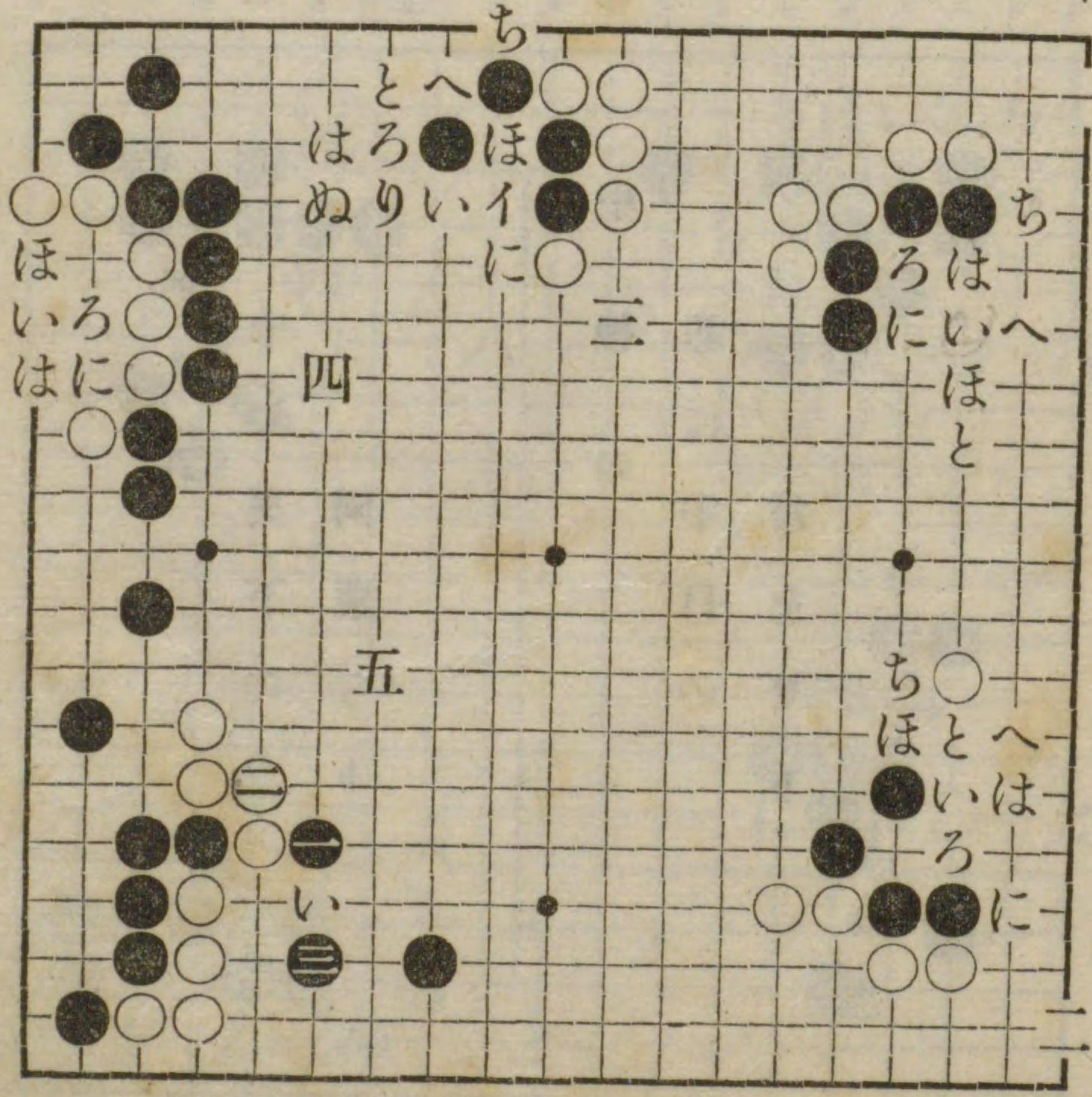
なきなり何となれば白(イ)ノ十の一子は白にと
 りて大切なる一子なり之を白(イ)へ綽ねむむ
 ざ敵に與へるは白悪しきなり數の上よりいへ
 ば此の一子は一目なれ共一石を一手に捉るは
 (一目なれ共こゝでは一目とはいはず一手と云
 ふ)莫大の價値あり實戰中吾が一石を何の代價
 もなく敵に與ふるといふことは不覺此上もな
 し故に黒たるもの敵石を捉り上げたる跡を粘
 ぐは差支なし若し強ひて形の梅鉢になるを嫌
 ひ白(イ)の時黒(は)に粘き白(に)黒(ほ)白(へ)黒(ろ)とな
 る黒一子を得るため多くの手數を費し白却つ
 て姿良くなり黒何の得る處なし因りて此原型
 にては黒十中に八九迄は(ろ)に一子を捉りて置
 く事と知るべし總べて碁法には黒白を問はず
 一目にて石を捨つるものにあらず
 例へば原型の時白(イ)に綽ねずして(ろ)へ行び二

目にして捨つる様に打つべし然し第六の如き
 四ツ目の型にては(ハ)と縛ね一子を捨て、却つ
 て利なりこれ互先の打碁に起る定石なり此定
 石を説明するは未早計ならんも序なれば下に
 述べし黒(三)は(イ)へ一間夾み白の(二)ノ石に對し
 ていふか(三)二間夾みか(ろ)へ(三)間夾に夾むこと
 あり黒(七)の手は先づ以て悪き手と知るべし然
 し時の場合によりては打つこともあり多くは
 白にて打手なり此手にて(八)へ引き白(七)は又
 は(九)第五圖の(九)の處に二間折(ヒラク)を普通の
 定石とす此圖の如き姿となりて黒梅鉢の型と
 なりて白の方利勢なりこれ黒(七)の悪手により
 てなり

手筋の説明(一)

手筋の原型を示し説明す
 第一圖圖の如き形出來たる時黒先なれば(イ)に
 打つこれ碁家の所謂筋(スヂ)と稱する要點なり
 即ち手筋の事なり若し白より(イ)と打たるれば
 黒は(ろ)に切らるゝ手あるがゆえは(九)と打
 つ外なし黒はなれば白(へ)に下るなり(と)に飛
 り何れにしてもよし又黒(九)に打てば白(ち)に
 縛ね黒の形悪しくなり行なり(前圖第二圖白
 (イ)項これ手筋なり其時黒(ろ)へ打てば敵は三
 角型にさせたるにて白(は)に下りて大に善し
 れば黒(ろ)に打たずして(九)に下らば白(ほ)に縛
 ねる手筋もあり白の方矢張善し因つて圖の如き
 姿にて黒先手なれば(へ)へ斜走すべし實戰に際
 し白より(イ)の項を防ぎ他に着手を急ぐの必要

ツソレタヨカワチルヌリチトヘホニハロイ



第三圖

さざれ石のいはほとならん
 そのごをば斧の柄くたす
 ひとぞ見るべき

(光 彪)

するつひにとをはたみそと

よむ石の數よりしげき

おもひをやつむ

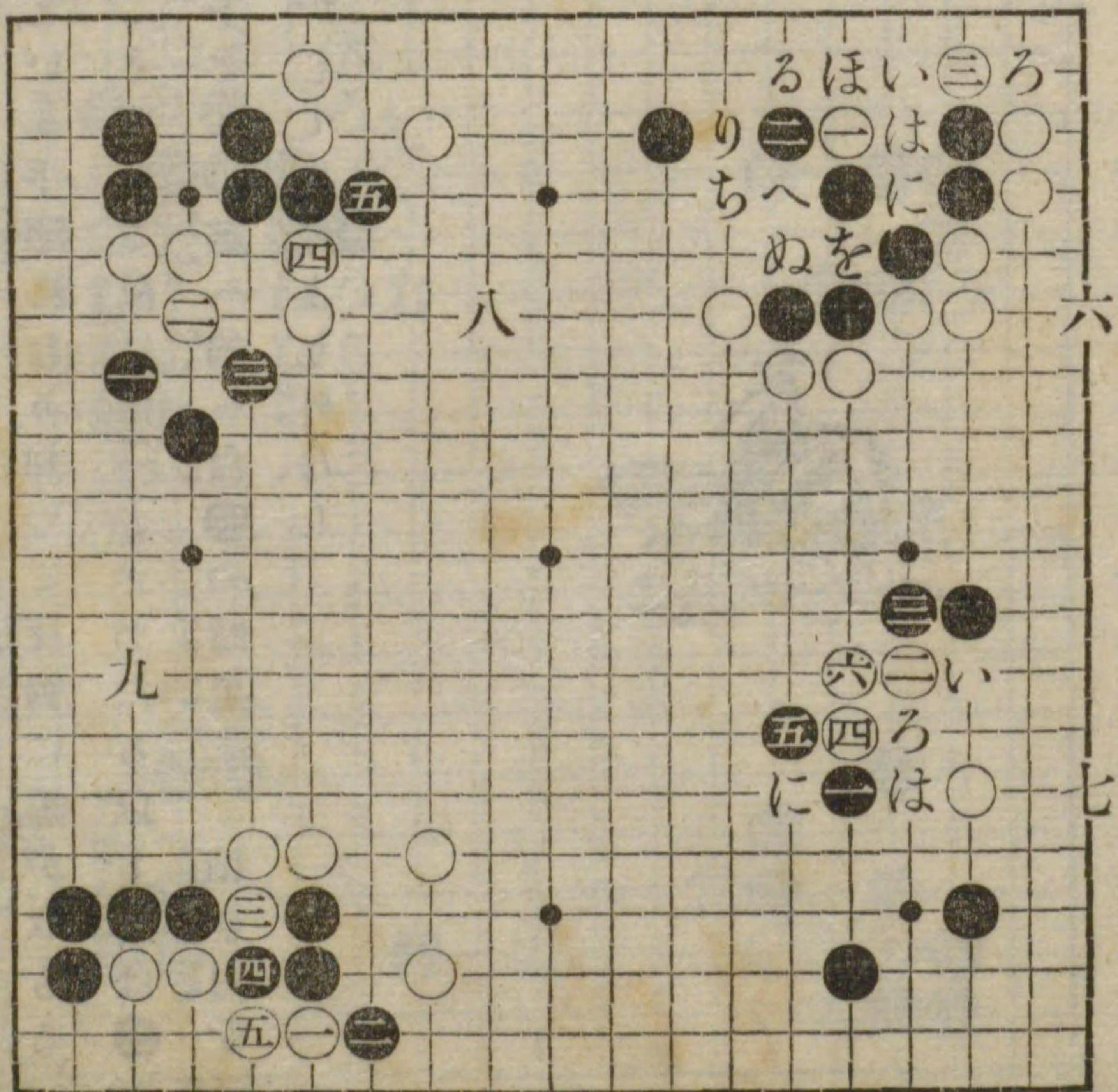
(千 隆)

あるときは(と)にコスミツケ白(ち)に立ちし時他に
 轉すべし、第三圖白(い)にツクルが手筋なり此
 時黒(ろ)が(ば)に打てば白(に)に引き黒(ほ)とツギ黒
 の型悪しくなる故に黒の手なる時は黒(い)にナ
 ラブが善し又白(ろ)ノ三の黒なくして只(又)ノ四
 に綽ねたると假定せよ此時黒(ヲ)ノ三にカケツ
 ゲば前述の如く白(い)の筋を打たるがゆる其
 時黒(ヲ)ノ二へ打たずして(い)へ飛び白(に)に伸黒
 (ろ)白(へ)黒(と)白(ち)黒(り)又は(ぬ)に打つべし、第四圖
 黒白共(い)が筋にして死活問題の手なり此(い)
 は第一圖と同型なり黒(い)に打たば白(ろ)黒(は)白
 (に)黒(ほ)にて白死なり白(い)と打ちをけば夫にて
 活なり、第五圖黒一とツケ白二とツギ黒三と飛
 ぶこれ手筋なり因つて白先手なれば(い)又は三
 の處に打ちをくを要す

手筋の説明(三)

第六圖白(一)のツケは手筋なり初學は此(一)の手
 にて(三)に綽ね黒(い)と約へられ白(ろ)へ粘ぎ黒
 (一)と守られ僅少の得にて終るなり又(ろ)に粘く
 手にて(は)に切り黒(に)白一黒(ほ)白二黒(へ)白(ち)黒
 (り)白(ぬ)黒(る)白(を)となり白黒の二子は得れ共黒
 にて(ろ)へ切りがある故白何等得る處なし、が
 打位なれば最初白(三)の綽を打たず只(へ)へ項る
 方はるかに優れり、白(一)とツケたる時黒若し(三)
 の所へ下りなば白(へ)へ綽ねて打つべし、さすれ
 ば(一)とツケ黒(三)に約へ白(三)と綽ねたる本圖に
 比した、上下の區別あるのみにて白の利益に
 大差なしこれ皆(一)の手筋の何れにも働きある
 所以なりされば黒先手の場合に此處を拒ぐに
 は(ろ)へ綽ねるか又は(へ)へナラブべし、第七圖、黒

フソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第四圖

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

中 押 の

碁に半目の 劫をせり

(茶坊主)

へボ碁打

十年吳下の 阿蒙なり

(六三人)

③の時白④とコスミツクルが手筋なり又黒が五と緯たる時白⑥とクズム(術語の俗言は前に示せし三角型なれ共此場合には最良手となるなり初心の内は兎角④の手にて⑥に伸び黒に⑤へ曲られ白⑦に曲るは往々に見る處これ即ち三角の悪形なり④⑥と打をけば黒⑤に曲れば白⑧に突當り黒若し⑤を⑧へ突當れば白⑤へ約ゆるにより白の働きなり本圖の三角型は白より⑧へ切る手ある故同じ三角にても此方が善型となるなり第八圖これは突出しの手段なるが最初黒が單に⑤と伸び出づるも働きなければ先③と白に攻り其勢により五を突出せば手段活動するなり斯る突出は所謂味善き突出としてこれも黒⑥及⑦が手筋なればなり第九圖開めれたる白の二子は一見活路なきが如きも手筋といふものは恐ろしきものにて①と

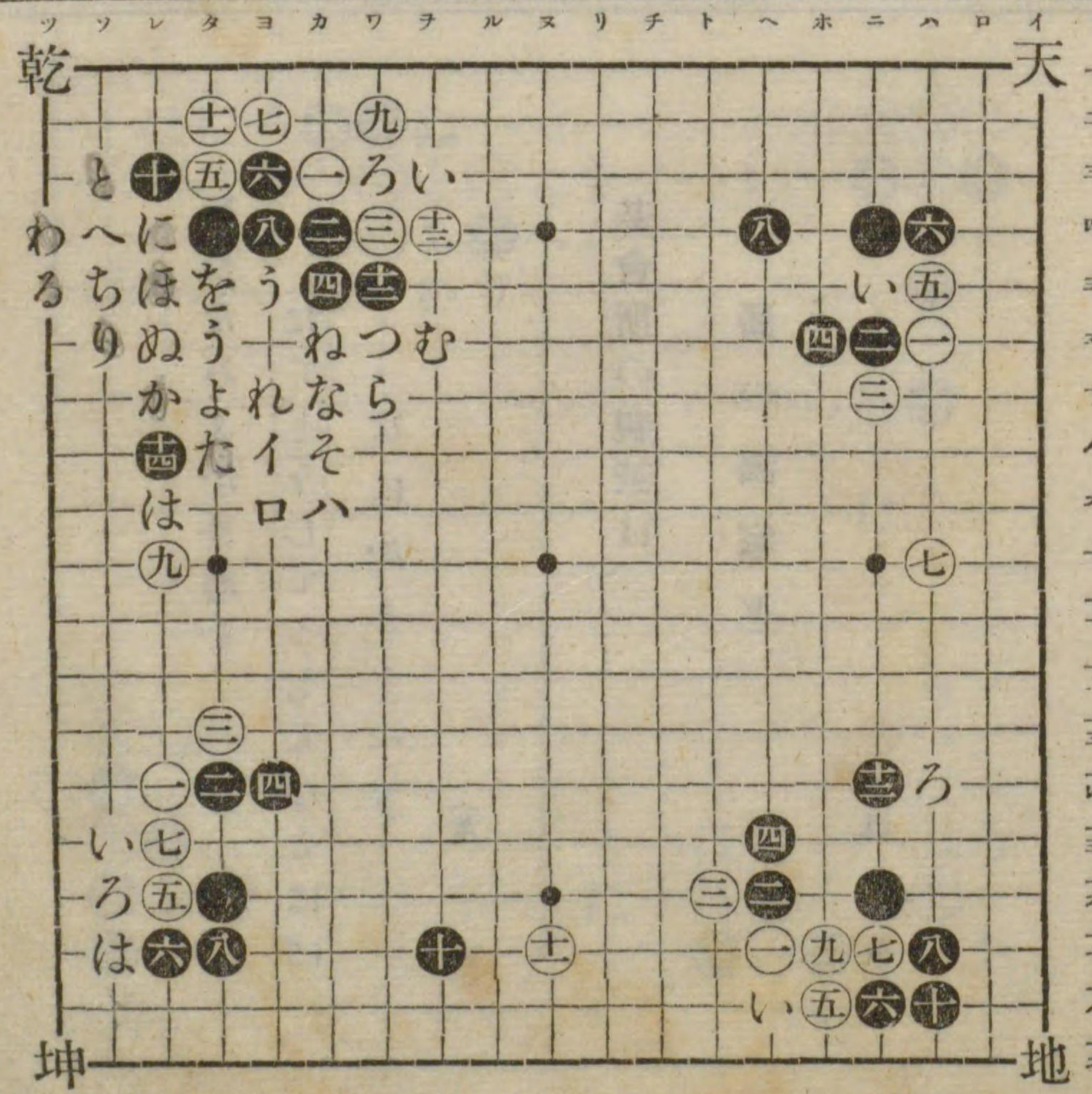
ツケにと容易に活きらるゝのみならず圖の如く黒が②と約へ飽くまで取らんとせば③④⑤といふ手順になり却つて反對に黒が取らるゝことになる故に白①とツケたる以上黒は②の手を五の處へ約へ白④の時黒③と粘き白を活かして打つより外なし



置碁定石白小斜走掛りの部

天地乾坤の四隅は普通に出きる乃ち定石なり白としても差支なき者なり黒二と項る手は隅を無事に詰ます手なり只白としては如此く黒に打たしめては紛れの生じ様少なき故一の手を他より掛り打もあり(夫は別に黒の示す)
 ○天の隅は白敵が弱きと見ると七の手にて⑤へ出る事あり夫等應じ方は次々に示す
 ○地白⑦⑨を打たず④と守りても黒は矢張り⑤へ應じてよし又は黒⑨へ當白⑤の時黒⑧へ守りても善し夫も次々に示す
 ○乾白①を若し⑤へ押さば黒⑤⑥⑦⑧⑨へ一子を捉るべし又白⑤へ押す手を他へ轉じても黒間を見④へ一子を捉るは莫大の處なり黒④は⑧又は⑨の星下へ打つも善しかく④と打ち

第五圖



ては打たぬとも限らず黒(八)を若し(い)へ應ずれば白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)となる黒は無事なれ共イカニも働き薄き故かく(八)と縛るが白の手段を消す手にて善い白(九)を(十)なれば其時は黒(い)へ約へて善い(下)圖を参照黒(十)と押し白(土)の時(三)と項手は所謂手筋なり(手)筋説明内第三圖を参照すべし此時白若し(へ)へ縛るは黒(と)白(ち)黒(り)白(ぬ)黒(る)白(を)黒(わ)白(四)目粘たる時黒他へ轉じて善い白又(へ)へ縛る手は(と)へ粘は黒(は)かへ飛なり或は(る)へ曲りて善い白(土)を(五)へ飛ば黒(土)へ附けるなり其時白(よ)なれば黒(る)へ曲るべし何れにしても黒の方善し

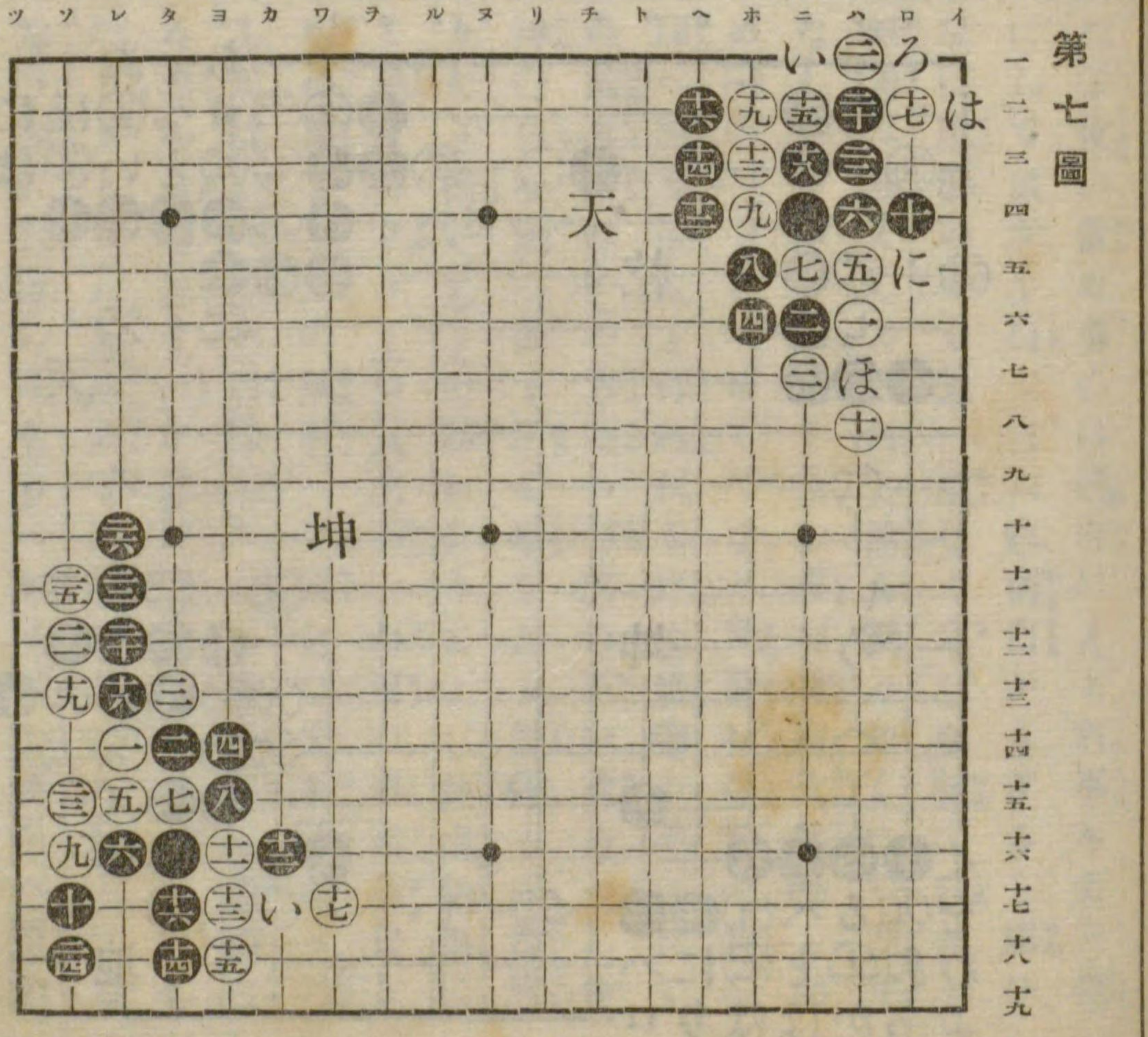
○坤の隅白(九)と打黒(十)となり黒は隅が無事に治まりて善い白として打てぬ事はなきなり

黒(一)と項行の定石は他に變化なし是より第一圖白(七)の手の變化を初學者の爲め示さん

○天の隅白(七)と出(九)と切る手は無謀なり是れ敵を弱きと見打手にて黒にかく手順を運ばれて白莫大の損害なり此時白(い)へ粘ば黒(ろ)へ打込白(い)を(ろ)なれば黒(い)へ打込にて善い白金を若し(九)へ下らば黒(白)黒(土)白(ろ)黒(は)にて黒善し白又(土)を若し(に)に約へなば黒(ほ)へ切りて善い

○坤の隅白(九)と縛るは黒に(九)へ下がられてはイカヌ故一着かく下(土)と切り見る黒もこんどは白石を殺すと云事は不可能故(五)と打而して(六)と切る白も殺さるゝ憂ひはなけれども圖の如くなり白は一方一間筋をハイ活る手にては(土)と切りたる效さらになし否却つて悪結果に終りたるなり是もとより(七)と出切る手かぬ者なり附言白若し(五)を(い)へ曲らば黒は矢張(六)へ切りて善い

圍碁上手泣かせ 置碁定石白小斜走掛りの部



紀のうみや黒き干潟に
うつなみもやがてしらの
濱と見ゆらん
(野淵良)

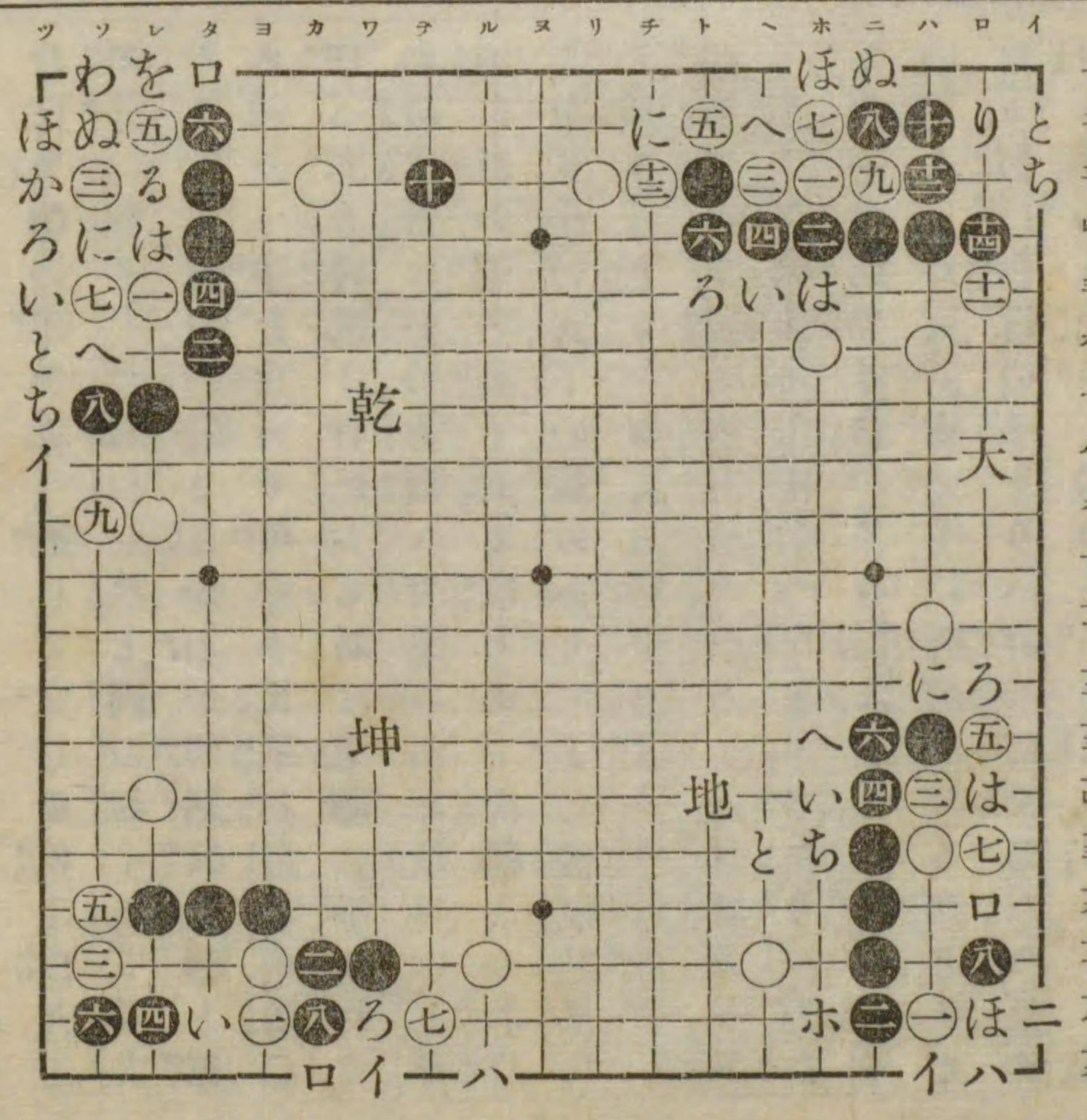
題道策畫像
技也、道也。如解入神
坐隱活澹 前無古人
(原鳳郷)

白小斜走掛りの二

●天本圖白前圖天の隅五の手を(五)へ飛黒(一)と應ずる手を他へ着手したる後白(一)と打込たるなり前圖は白に飛石なき故黒(四)を(六)へ行るなれ共此型にてしか打たんか白に(五)の綽粘を打たれ而して(五)へ切られ黒悪し依て此型にては黒(四)と應ずるが普通なり○白(七)を若し(七)へ打たば黒(八)と飛ぶべし○白(七)を(七)へ行なば黒は直ちに(五)へ綽白(七)の時黒(四)と應ずべし其理由は白本圖の如く(七)と打たる時黒(五)へ綽(四)と應ずる後碁の出来により此黒石白に封鎖されんとも限らず其場合黒捨置かんか白に(七)へ打たれ黒石死となる然るに(五)の綽を打たずおけば白(七)の時黒(七)白(八)黒(九)となり黒より(八)へ打込手ある故黒死する憂ひなし夫を白(七)を(七)

へ行てあるとすれば最早黒より(九)の下りの必要消滅したる故黒直ちに(五)の綽を打つがよいのである其替り前に述たる如く外型の都合により黒石に死す型残る故黒たる者其用意すべきものと知るべし●地本圖は前圖白(七)の手の變化なり○白(一)と打手は一つの趣向なり何となれば此時黒(四)を(六)へ行れば白(四)黒(五)白(五)黒(六)白(六)黒(七)白(七)黒(八)白(八)黒(九)となり後黒より(一)へ綽ても白(一)黒(二)白(三)となりて黒より(一)の綽の効力なし故に白(一)と來り(三)と突當りたる時は黒(四)と應じ一方盤らせ(六)と打(一)の石を取がよいのである今假に白(一)を打たず(五)七黒(八)となりたる時白は(六)より尖むべきを圖の如くにては(一)と中より打たる型にて白の損莫大なり依て黒(四)と應ずるが善いのである又白(一)と此へ打たず最初三と打黒(六)の時白(一)黒(二)白(三)

第九圖



と綽なば黒は(五)の約を(四)へ粘べし白又(五)の綽を(四)へ出黒(五)白(五)なれば黒(五)へ應せず(八)へ粘ぐ其時白(七)なれば黒(八)にて可なり白又(七)を(八)なれば其時は黒(五)白(六)黒(七)となる其型は前圖天と同じにて後黒より(一)へ綽る手ある故白の方面白からざるなり●乾●黒(一)と尖む手は(四)へ約るが普通なれ共或場合によりては(一)と尖むもあり黒(八)と双ぶ手は(三)の白石と隅の白石を遮断するにありて白の(九)は隅の我石に聲援を與ふるにあり若し此手を白が打たざれば黒(一)白(二)黒(三)白(三)黒(四)白(四)黒(五)白(五)黒(六)白(六)黒(七)白(七)黒(八)白(八)黒(九)となり黒(五)を打たず(八)へ當白(五)黒(五)を白(五)黒(六)白(六)黒(七)と打白は黒に(七)へ打たれ隅死す型

共黒捨置くも劫故夫は問題にならず黒又直接劫とするなれば黒(た)白(れ)黒(い)白(そ)黒(口)にて劫なり併し黒(た)へ打たずとも(丸)の邊へ打をき白より(た)へ打たせ黒(つ)へ劫と取る方利益と知るべし●乾本圖も普通定石なり○白(い)の時黒(口)へ縛る事他隅と同じ後黒時機を見計ひ(い)の約へ先に打べし尤も黒が左側地型となりたる場合白より(ろ)へ斜走される侵分手はあると知るべし因に白(土)を(は)へ飛べば黒は(白)に(土)となり後黒より(ほ)へ附る手節を狙ふべし白又(土)を(土)へ覗き來らば黒は(土)へ縛出すべし(へ)へ粘なぞの卑屈の手は必ず打べからず○坤本圖も普通定石なり黒(四)と曲る手は白をして連絡させ自石を穩やかに納る手なり時と場合を見計り打つ因に(六)の當は必ず忘れてはならず(い)の處は黑白共莫大の侵分是等其局の模様により何

白三三二の打込の二

●天(五)を掛粘手は星下に白○印に打有後打手にて一つの趣向にて黒をして紛らかさんと手なれ共圖の如く黒に運ばれて白何等得る處なし●黒(五)を(い)へ縛白(五)黒(五)と打手は下手の打碁に往々見る手なれ共(い)と縛るは筋違と知るべし本圖にて白(五)を若(ろ)へ行なば黒(五)白(い)黒(五)白(は)黒(に)と出るが本手筋と知るべし○白(五)の粘を打たずをかば黒(五)へ二目取る手は先手白其時○印へ取かへたる時黒より(ほ)へ出(白)へ(黒)と(白)ち(黒)りへ附隅の白石劫となるなり故に白は(五)の粘は必ず打たねばならず此粘は型の悪き手なれ共隅の關係ある故無手なり因に黒(十)を(五)へ尖み白(十)黒(ぬ)白(五)黒(る)と打手も黒にはあり●地●黒(四)と縛る手は場合に

れより先に打着するやは評者にも不明なり

面白き手にもまけじの争ひに

なにごこちをも打忘るらん

(依 平)

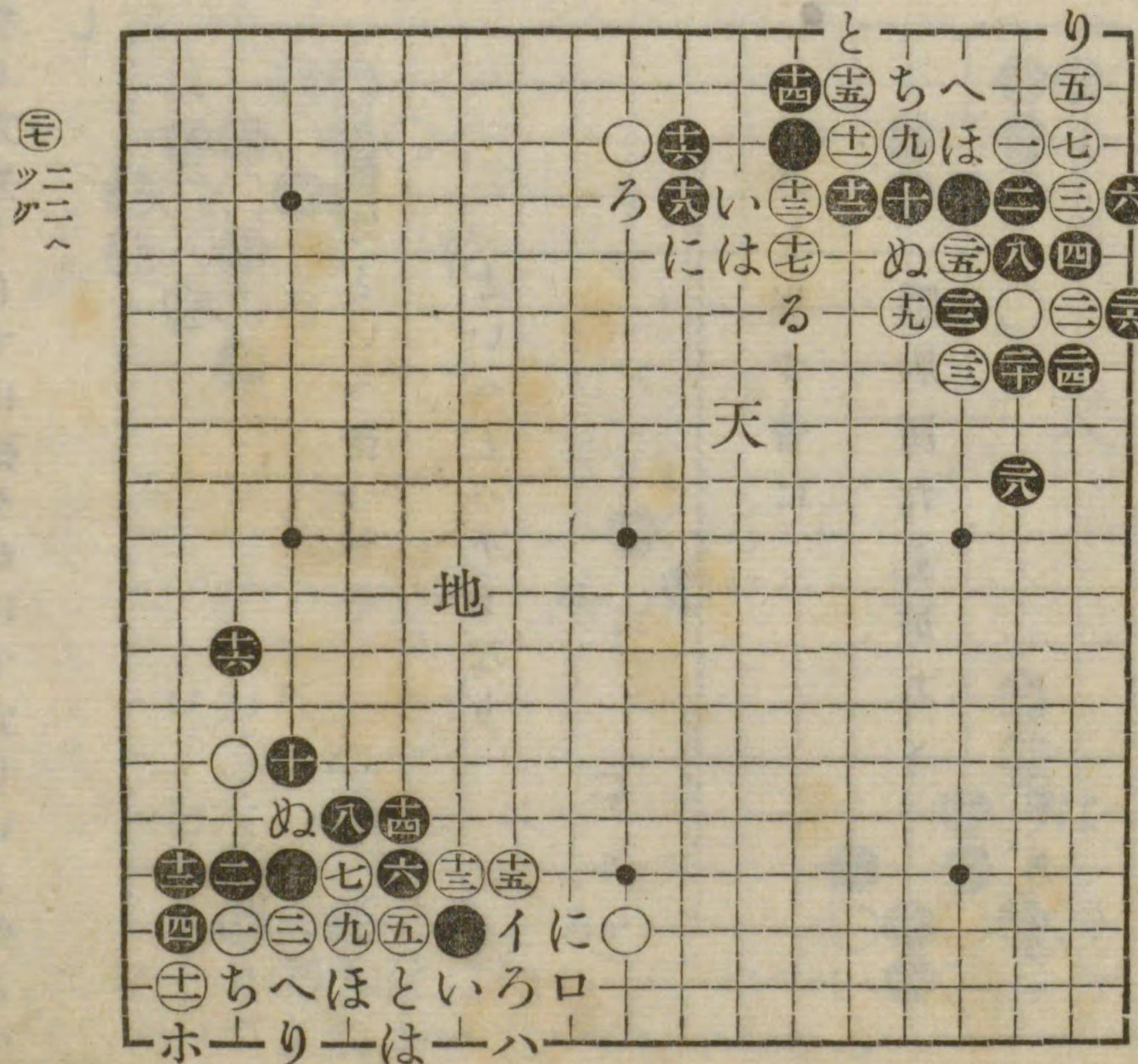
打分の碁に

女房の世辭笑ひ

(なきき)

第十一圖

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



より打手故参考迄示す圖の如く打大斜走の石と白の小斜走掛の石と振替趣向なり○白若し(五)を(六)へ飛ば黒は(三)へ粘白が(一)へ縛ねばならず黒(二)白(四)黒(七)白(八)黒(九)へ縛ねばなり行故そは白悪し因に黒(六)の時場合により九へ割込白(七)黒(八)白(九)と黒(一)となる黒へへ切り白(二)を(三)へ曲り黒(四)白(五)へ縛白の二子を征に取れぬ時は黒(六)を(七)へ切り白(八)黒(九)白(一)黒(二)白(三)となる手にては黒面白からざる故(四)へ割込手はなきと知るべし白又(五)の手を(六)黒(七)白(八)黒(九)白(一)黒(二)白(三)黒(四)となる後黒より(五)へ切り白(六)黒(七)白(八)黒(九)白(一)黒(二)と縛る侵分なぞ残る故白(三)へ行る手は面白くなきなり本圖にて黒(四)を(五)へ粘ぎ白(六)黒(七)白(八)へ切る手となることあり然れども夫は初學の内は六ヶ敷戦争となる手故かく(九)と打振

替る方黒としては穩やかにて宜しいと知るべし

留守といへ留守ぢや

といへとバチリなり

(かゝる)

碁を崩す音に

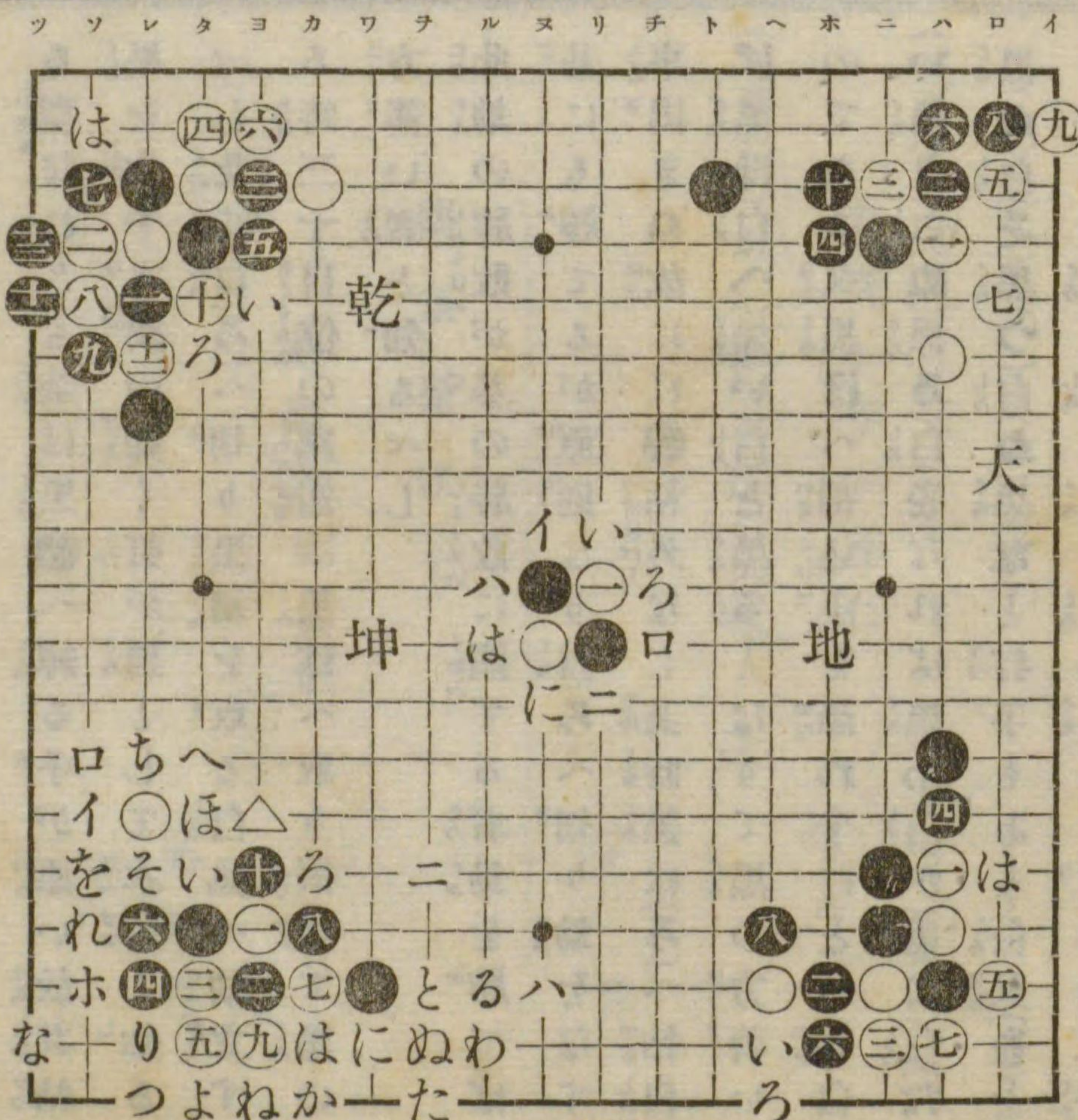
隠居所たそがるゝ

(鋭角子)

項け切り定石

●天白の(一)と項け三と切る手を項け切りと云○白(二)と切りたる時黒(四)と行る是にて白に別段手段なき者何れの場合にても敵より項けて切りたる時は十中の八迄は行るとか引くとかすればよき者と知るべし例へば中央に右様の型ち出きたる時敵より(一)と切りたる時黒たる者(二)白(三)へ縛ると白に行られ手段をされる者夫を(イ)(ロ)(ハ)(ニ)へ行ると敵より手段のなき者と知るべし併し四圍の情型によりては黒より(一)白(二)へ縛ねなければならぬ事生せんとも限らず夫等の事は對局の時自身考究ありたし本圖は白とても差支なき者なり他圖は白黒共に變化の手を示す●地○白(一)と押すは少し無理なれ共或る場合によりては打ともあ

第十二圖



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

り ● 黒(一)と割込(四)をつきあたりとなる以上(八)となる隅は白に得をさされても黒は(八)と打白の一石を徒手とし外型がよくなる故黒にとりては打よき局面となる者なり此後白(イ)へ約へねば黒は(ろ)へ縛る手を忘れてはならぬ因に黒(一)の手を(は)へ附る手筋もあり夫等對局の際研究ありたし ● 乾 ● 黒(一)と縛以下を運手は他の形勢により打事もあり併し餘り好んで打手にはあらず本圖の如く打此時白に(五)の處へ粘れ黒(イ)へ打ても白に(ろ)へ出られ征に取れぬ時は黒(土)は(イ)へ曲り白(土)黒(ろ)白(は)となり隅の二子を捨上の二子と振替打なり場合によりては外型が張る故黒も趣向として打てるなり ● 坤の隅白小斜走に掛り黒大斜走に應じ白(△印)へ飛たる時黒手を抜き其時白(一)と上より項來る手は白として往々に打見る手なり此時黒たるもの(四)

ざれば打てぬ手故黒としては(ほ)へ割込が穩やかなの打方と知るべし又本圖にて白より(ろ)へ切られ黒劫争の起きざる打碁の時は黒(六)の粘を(九)へ約へ白(六)黒(イ)白(り)黒(そ)白(ホ)黒(を)白(十)黒(ち)白(れ)黒(ほ)と打てば黒にとりて劫になす憂ひなくして宜しいのである能くく 玩味ありたし



圍碁上手泣かせ 項け切り定石

の手を(八)へ縛白に(六)へ打たれ黒(十)白に(イ)へ當られ黒隅を損する型は初心者の碁に往々に見らる型なれども是は黒(八)へ縛る手が悪い故其結果を生ず本圖の如く打が黒として本筋と知るべし此時白(ろ)へ切り黒劫を取る白他へ却立する時三十目位の處迄は黒(は)へ取り振替て黒の方善い者と知るべし 此劫の勝敗が碁の勝敗に關する者劫を勝てば碁にも勝てるが原則なり白(ろ)へ切り劫をなす事出きぬ故に(一)粘外なし其時黒は(ろ)へ粘白(に)黒(ほ)白(へ)黒(イ)白(と)黒(ち)となりて黒の方善いのである又黒(ほ)へ割込手を恐れず(と)へ行白(イ)黒(り)白(ぬ)黒(る)白(を)なれば黒(わ)白(か)黒(よ)白(た)黒(れ)白(そ)黒(つ)白(ぬ)黒(な)と打手もあり白(又)を(わ)なれば黒(イ)白(口)黒(を)白(ハ)黒(ニ)と打つべし併し(と)へ行たる手は強硬の手にて餘程手が見へ

互先一手一手に
癢をいひ

(土 峰)

薬瓶提げて

碁敵久しぶり

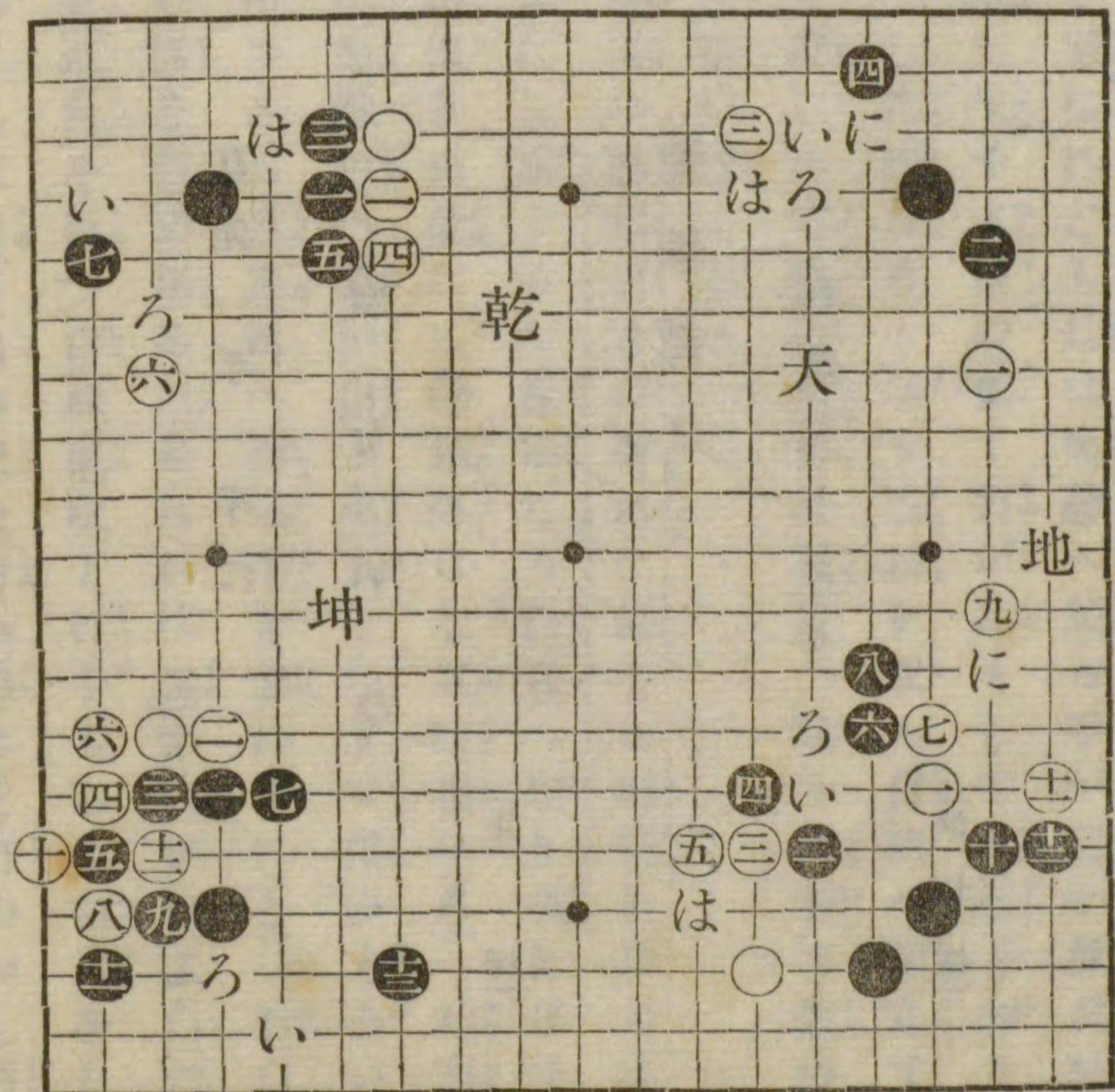
(伊勢雄)

白大斜走掛り定石

●天白①と打手を大斜走掛りと云ふ黒④迄は普通の定石なり併し白③の手は必ず斯打とは限らず(い)ろ(は)の邊へ打事もあると知るべし白(い)なれば黒矢張④へ應じて善い本圖の黒④の手は(に)へ尖みても又手を抜いても善いのである●地白①と打來らば黒②と斜走するは手筋なり且白よりの壓迫を防ぐなり此時白③を若し白(い)へ項來らば黒④白(ろ)黒(は)と掛けべし本圖白七を(に)へ斜走なさば黒⑤とか⑥へ守りをきて善い●乾●黒①とかく角へ打手もあり以下七迄普通なり白若し④を打たざれば黒直ちに④へ縛べし是れ二目の頭と云てのがすべからざる處と知るべし同じ二目の頭と云ても白より⑤へ縛る手は無理なり若し縛れば黒④

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ

第十三圖



へ切るなり白⑥若し⑦へでも打たば黒(い)へ應ずるとも又は(ろ)へカケ白②に下を打たせ黒外型を張りて打つも一策なり白②の手を③へ押さば黒は(は)へ應じて善いのである●坤●黒⑦は隅を堅固に守るなれば⑨へ双びても善い白⑧と附るは若し先へ⑤へ打黒に(い)へ守られて後⑧と附ても黒に⑩へ下られる故機先を制して⑧と附るなり此時黒⑩へ下れば白⑨黒⑤白⑧となり黒面白からざる故かく穩やかに應ずるが善いのである白も⑧以下は直ちに打や否やは一つの問題なり

碁の歸り

赤電車にも

置き去られ

(横田生)

老の浪より來る

人のすさびとて

はまのまさごは

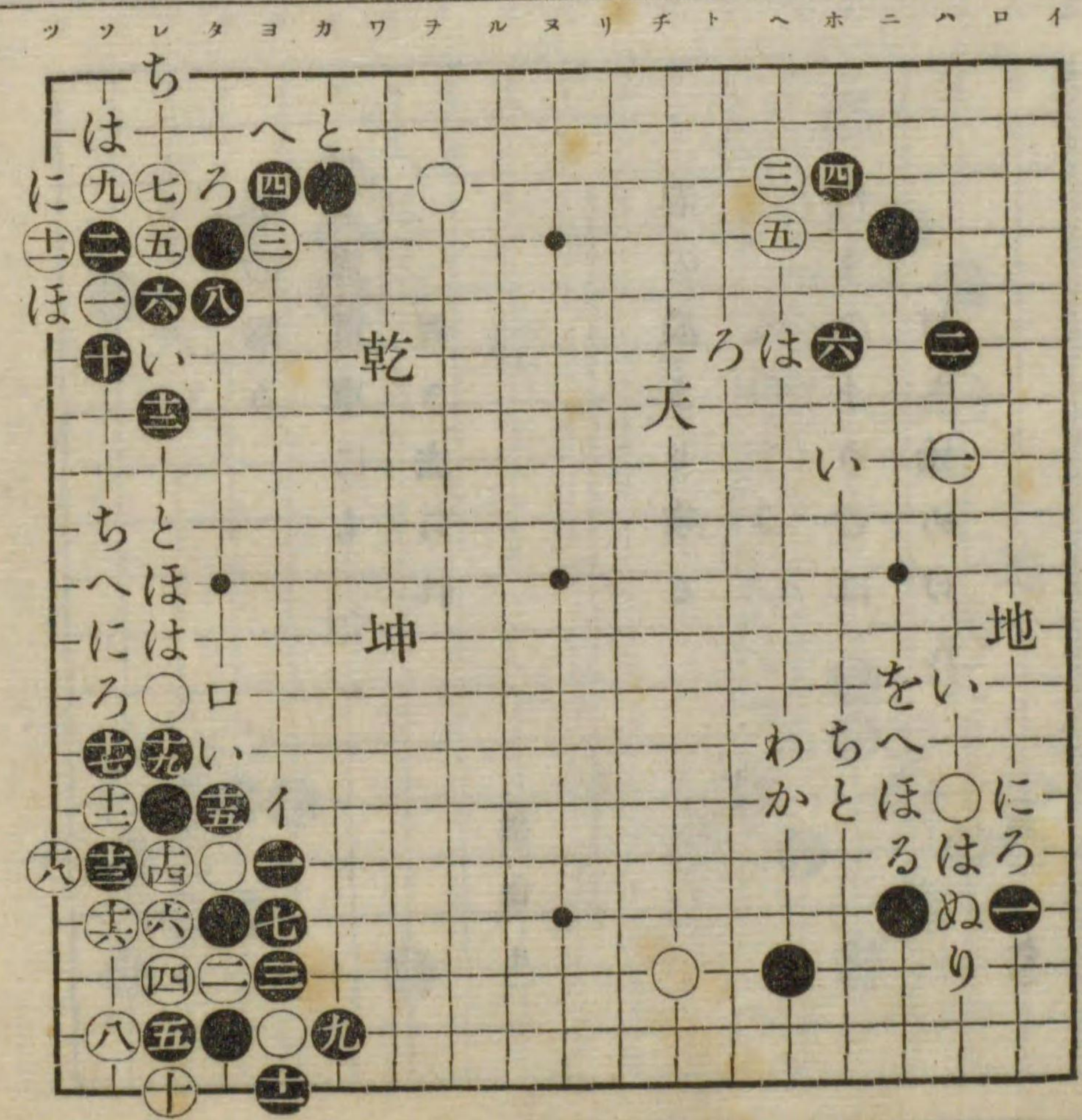
打ち始めけん

(布信)

白大々斜走掛り定石

●天○白○と打つ手を大々斜走掛りと云ふ黒
 ①は普通の應じ方白③とカ、リ來りたる時黒
 ④と打つは隅を堅固に守る手なり併し④の
 時他へ打ても善いのである此時白若し①へ飛
 ば黒も①へ飛ぶべし若し手を抜と白には①へ項
 られ黒外出し得ざるべし●地●黒●とかく守
 るもありかく●と打つ手は後①へ夾み白石を
 攻めんとなり後白より①へ尖項なば黒手を抜
 くか又は①へ當白②に黒③白④と打つべし
 (因に黒と)へ行ぶる手を②へ二段綽をする手を
 往々見ると雖もこの二段綽は悪いのであるか
 く黒が打たんか白①に黒②白③と黒④をとり
 黒は勢ひ今一手①と②か③と④へ費やさねばな
 らず黒の型は悪し白に①を②と行ばし白の型を徒

第十四圖



らにをくなくす手故①へ二段綽は面白からずと
 知る可●乾○白○と打つは常に打手筋なり此
 時黒②は①へ尖項と③へ斜走又は⑤へ双ぶと
 三點あり白③と項⑤と割込ば敵を下手と見
 て打つ手にて下手は此①を②へ應じ白③黒④
 白⑤黒⑥となれば白は働く故なり本圖の如く
 黒に打たれては白目的外れたる型なり白③を
 打たず⑤へ割込ば黒⑦へ應じをけば無事さも
 なくとも⑦を①へ切り白⑦黒⑧白⑨黒⑩白⑪
 黒⑫白⑬に黒⑭白⑮と白⑯にて隅にて活は活
 ても黒に外型を塗れ白大に悪し何れにしても
 ⑤へ割込ては白の方無理なり●坤●黒●と上
 へより綽るも一策なり白若し④なれば黒⑤白
 ⑥なれば黒④と約る白の二子重くして悪し○
 白⑦と割込以下運び黒に手順の間違なき故
 白としてせんすべなし○白⑧の時黒⑨と綽

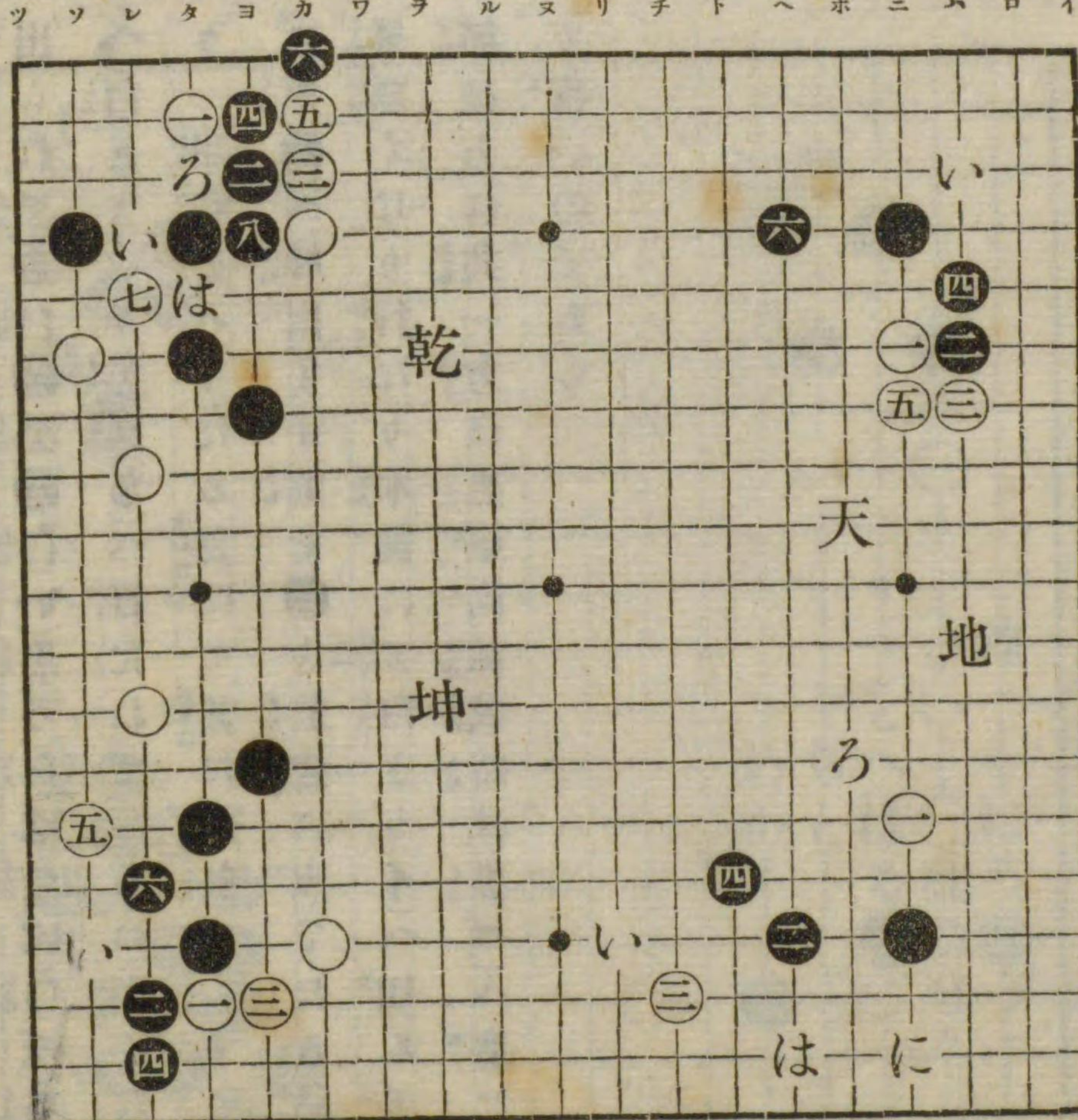
出し續いて⑤以下手順尤も善い⑤を⑥へ約へ
 る手もなきにはあらざれ共しか打と白に⑤へ
 出られ黒④白⑤黒⑥白⑦黒⑧白⑨黒⑩白⑪黒
 ⑫白⑬となり黒又⑭へ打たねばならぬ型とな
 り一間筋をハイたる姿にて甚た面白からずこ
 れ黒④へ綽出す手筋を⑤と筋違に出でたる結
 果悪くなり行なり本圖にて白より①へ切る手
 筋はあれ共一方は黒堅固故其時は黒①へ應じ
 て善いのである

白一間掛りの定石

● 天白(一)と打つ手を一間掛りと云ふ圖の如き型は初學者の上手に對したる時往々に見る型なれ共此型は黒の方面白からざると心得べし夫を何かと云ふと最初白の(一)へ對し黒(二)を項る手が元來面白からず初學者はかく打あれば隅は確固たる地型と思ふ之が抑も間違の初めなりかくなりてありても白より(一)へ打込れて容易に白石を殺と云ふことは不可能なり依て黒(二)と項ける手は悪きと覺單に(六)へ飛べし其打方は下圖に示す●地の白の(一)に對しては黒單に(二)と飛が善い○白(三)と來りし時黒(四)と尖むは善い手なり或場合により(一)又は(三)へカケル手筋を打べし此隅は輕き故輕きとは黒の石少數をさす白より別段手段なき者白は(一)へ斜

走する位の者其時黒は(二)へ守りて善い●乾○白(一)と打手は外型の模様により打手筋とす白は此(一)の石を餌として外型を張る手段の手なり●黒も(二)と尖出し(一)の石を取り込みて少しも差支なし○白(五)の時黒(六)の綽を忘れてはならぬ白(七)を尖むは黒が若し(一)へ粘ば白(八)黒(九)白(一〇)と切斷せんとなり黒又(一)を(一)へ粘ば白(二)黒(三)白(四)と切斷す依て黒(八)と(グスム)は善い受手なり是にて黒石の切斷の憂ひないのである●坤○白(一)と項來らば黒(二)と應じ白(三)の時黒(四)と下りにて善い場合によりては(四)の手を(一)へ掛粘手筋もあり○白(五)の時黒(六)と受て善い白(一)の手は直ちに打とはきまらず若し打來る時黒の受手を示すのみなり

第十五圖



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

碁敵を持つを

女房苦勞がり

(天地庵)

碁敵のこつそりと

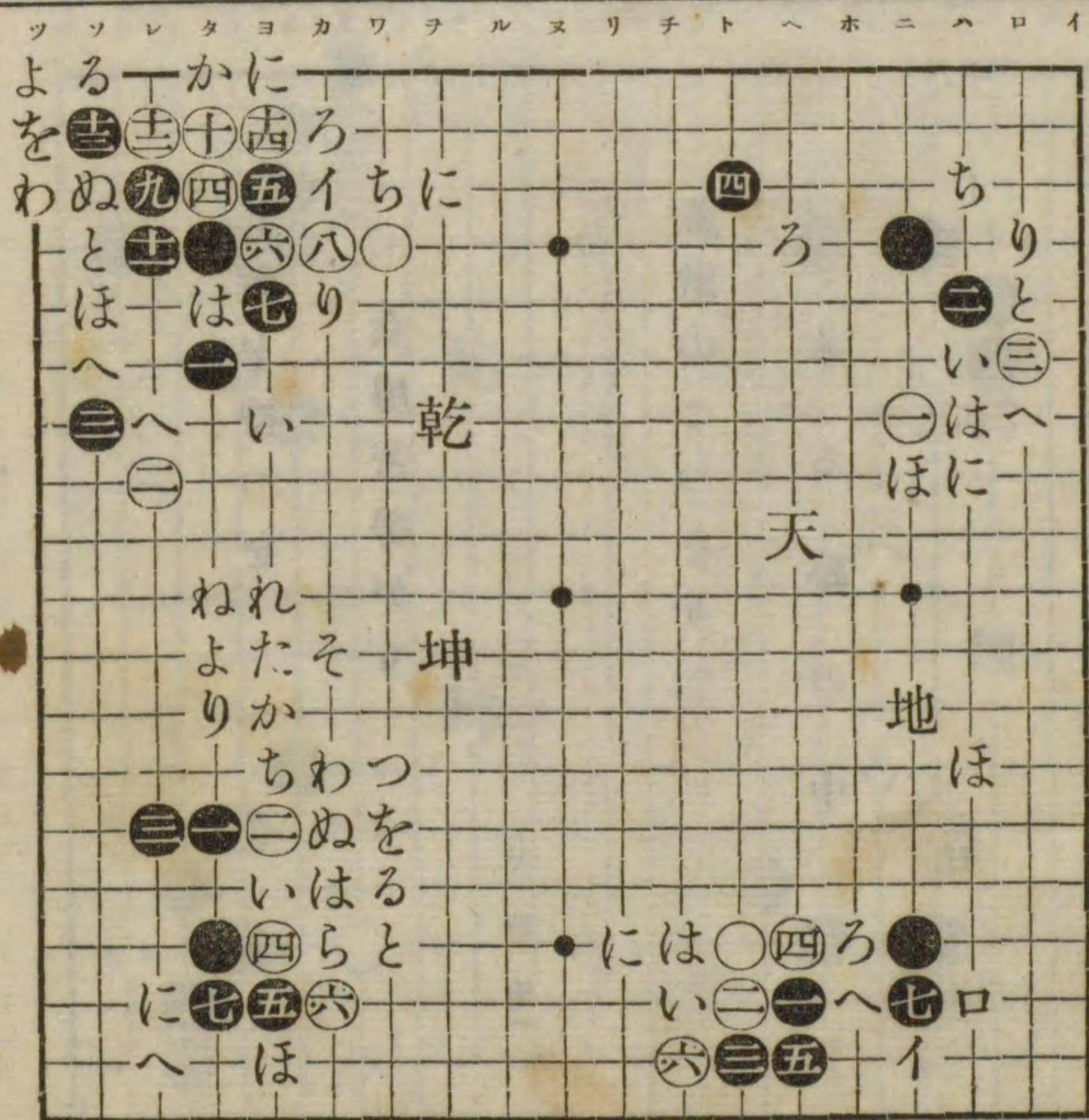
來る忌の中

(行々子)

白二間掛りの定石

●天白①と打手を二間掛りと云ふ●黒②の尖みは①に對しよき受手なり白③は①へ尖頂るあり其時黒は矢張④と大斜走でも又は⑤へ一間飛んでも善い黒⑥の時白③及④を若し他へ着手せば黒は直ちに⑤へ附白⑥に黒⑦と切るべし又は單に⑤へ斜走するも宜しいが打たれては白の①の石が徒手になる故白として③又は④へ打つが慣用の手なり本圖にて白直ちに⑤へ出なば黒は⑤へ應じて善い若し④へ打か緩きと思は⑤りへ約へても善い然し④りへ約へる以上白より④へ視かれ隅に手段される事は豫め覺悟せざるべからず●地●黒●とかく打手もあり此時白②を若し④へ押さば黒は②へ押し白①黒②は④にの時黒③の邊へ守るべ

第十六圖



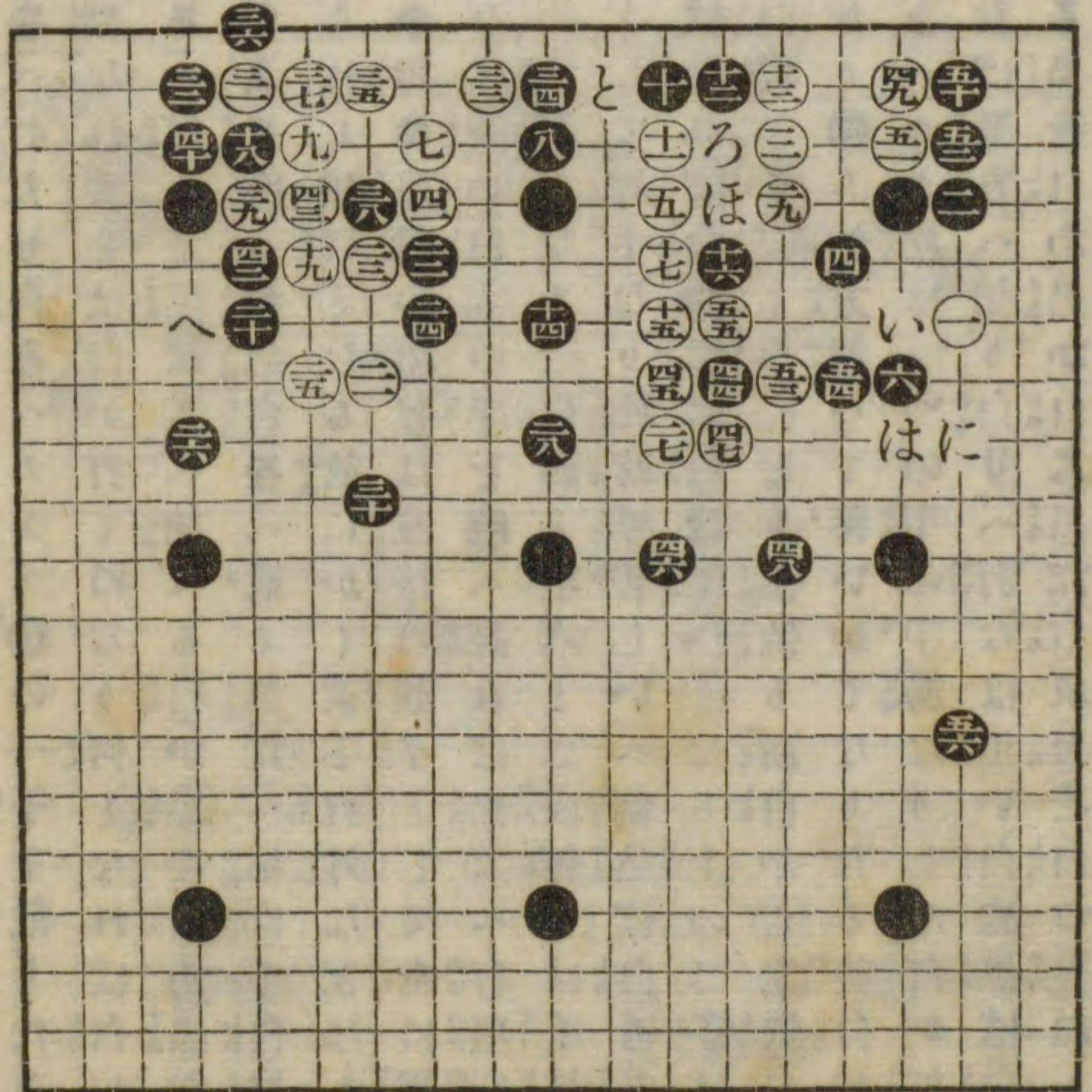
し白④の時黒若し⑤へ引くと白に⑥へ約へられ一問掛りの天の隅と同様にこは黒の方面白からず本圖にても白④の時黒⑤へ引くと同じ型になり黒面白からずかく⑤と粘が本手筋と知るべし白⑥の時黒⑦は⑤へ突當るもあり併ししかすると隅が廣き故白に⑥の邊へ手間應ずる⑦普通白⑧の時黒⑨は必ず打つに●限らず⑥へ尖むか又は他へ着手するも善い○白④と附る手往々に打手故黒の應じ方を示す本圖の如くは普通なり併し場合によりては黒より變化する手はあり其一二を示せば黒⑦の時⑧へ尖み白⑨黒⑩は⑧と打つか又⑪の手を⑨へ綽白⑩黒⑪は⑩と打つか又⑫の黒⑬と打つもあり白若し⑭を打たず⑮へ曲らば黒⑯白⑰は⑰り黒⑱白⑲は⑲ぬ黒⑳白㉑は㉑ぬ黒㉒白㉓は㉓ぬ黒㉔白㉕は㉕ぬ黒㉖白㉗は㉗ぬ黒㉘白㉙は㉙ぬ黒㉚白㉛は㉛ぬ黒㉜白㉝は㉝ぬ黒㉞白㉟は㉟ぬ黒㊱白㊲は㊲ぬ黒㊳白㊴は㊴ぬ黒㊵白㊶は㊶ぬ黒㊷白㊸は㊸ぬ黒㊹白㊺は㊺ぬ黒㊻白㊼は㊼ぬ黒㊽白㊾は㊾ぬ黒㊿白㊿は㊿ぬ

夫等の變化は黒たる者對局の際場合を見計り任意に出だし本圖にて白④と打つるへ綽黒に⑤へ打たせ白⑥へカケテ⑤の一子を取りたき型なれ共そは白が打てぬなり何となれば白が⑤へ綽ると黒は⑥へ約へる白か黒を白か黒か白よ黒③へ打込白④へ取る黒た⑤へ粘にて白取られる破目となる故に⑥と打外なきなり●坤●黒●の項けは直接の應手として常に用ひて善い白①の手に②へ綽れば黒③へ行項の定石となる○白④と項⑤と二段綽るは手筋として打手なり此時黒若し⑥へ割込ば白⑦は黒⑧に白⑦粘り白⑧粘り白⑨粘り白⑩粘り白⑪粘り白⑫粘り白⑬粘り白⑭粘り白⑮粘り白⑯粘り白⑰粘り白⑱粘り白⑲粘り白⑳粘り白㉑粘り白㉒粘り白㉓粘り白㉔粘り白㉕粘り白㉖粘り白㉗粘り白㉘粘り白㉙粘り白㉚粘り白㉛粘り白㉜粘り白㉝粘り白㉞粘り白㉟粘り白㊱粘り白㊲粘り白㊳粘り白㊴粘り白㊵粘り白㊶粘り白㊷粘り白㊸粘り白㊹粘り白㊺粘り白㊻粘り白㊼粘り白㊽粘り白㊾粘り白㊿粘り

井目の部實戰 第一局

●黒①の下りは如何にもをかしい手で本来ならば(イ)項か(ろ)へ大斜走に打つか(四)へ一間飛なぞが普通で(ろ)へ打つてあつて後に(一)と(二)と下るのが定石としてあるに直ちに(一)と打つは一見悪手の様で我々にしても斯様な手は悪い(イ)か(ろ)又は(四)に打てと教へるのであるそれだから(二)の悪手をとがめ様として白が取散す(三)と打て黒の應手を試みる事になる處が黒に(四)と尖まれて白が困るのであるたとへば(ハ)か(ハ)へ打つても黒から(ほ)にカケられるれば場所は違が此の圖の様に黒に(六)とカケられたと同型になる此の形勢を考ひて觀ると却つて普通の定石よりは黒の方が優勢となつてをる次第でさうなると黒の最初の(一)の手を悪いと云ふ事はいへ

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



井目の一
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

ないわけである然し此處で斷つて置くのは此の(一)の手は六目より少ない五目からの置碁では悪くて應用は出來ない事である○白(七)と大々斜走にカ、つたのは(三)(五)の石の連絡を計つたのである黒はさうさせじと(八)と下つた此手が(一)の手と平衡した強硬手段である(八)の手で定石通りに打つたならば白に(八)とツケラれて白にしてやらるゝ事となる白(九)の手で(十)とか(四)とかに飛んだら其時こそ黒は(九)に結め白が(一)へ飛んだ時黒も中央に(四)と飛び出したならば白は双方を凌がなければならなくなり黒は真中にあるから一手下すと双方の白に響くわけで白は困難するのである○白(九)は先づ普通の手で此時黒が(三)(五)の石を攻めようと裾から捲くし立てゝゐるので白が若し手を抜ひたならば黒が(ほ)へツケ(三)と(五)の白を切斷するのであ

るさうなると白が孤立となつて悪いから據なく(十)と應ずる外はない●黒(四)と飛び(六)と覗き白の眼形を取つてをいて(六)と轉じて又ぞろ(七)の白を攻めた趣向は面白○白(九)の飛は手筋として善い手である黒から(七)と縛られて薄い様ではあるが此縛ねらるゝ手は白に取格別苦痛を感じない何となれば黒が(七)へ縛て來たら白(八)黒(四)白(九)と劫に受ける手筋となり此劫は白にとつて軽い劫であるから黒が存外うまくゆかないのである●黒(三)は(八)に飛ぶのが通例であるけれど此處では中央に黒が(四)とあるし黒として双方の白を狙ふ場合であるから一様斯く急に進んで飽まで攻勢をとり白を取らぬまでも左側に廣い地面を作る目的に打つのである是等の手段が自己本能の實力である●黒(三)は白を攻めながら地を作る調子の善

い手筋である○白④は黒から(ろ)へ出切ぎり手
 のない處で一見手緩いよふだが是は意味のあ
 る手である其わけは此の場合白の大石が双方
 薄弱で殊に黒から壓迫を加へらるゝと到底凌
 ぎ難いから此手を用るのであるし左側黒から
 上部を塞がれても④へ尖む手があつて活は容
 易である此の④の尖を打つには何しても此の
 手の必要が起る云ふまでもなく黒から後に(を)
 に出切られて一方は活ても一方は死型となる
 から豫備に最初④と打てをくのである下手の
 言には上手には先手々々と打たれ黒は兎角後
 手に廻はつて負けるといふが是は大なる誤解
 である碁には先手で後手の手があり後手で先
 手の手があるので今此の④の手を(ち)へ打つて
 黒に(と)に引かすれば④の手は先手だが後に黒
 から左側を壓迫せられた時黒は(と)にある爲め
 白④の尖が先手に打つことが出來ずそれが爲
 白が死型となる又右側とでも其如く白が最初

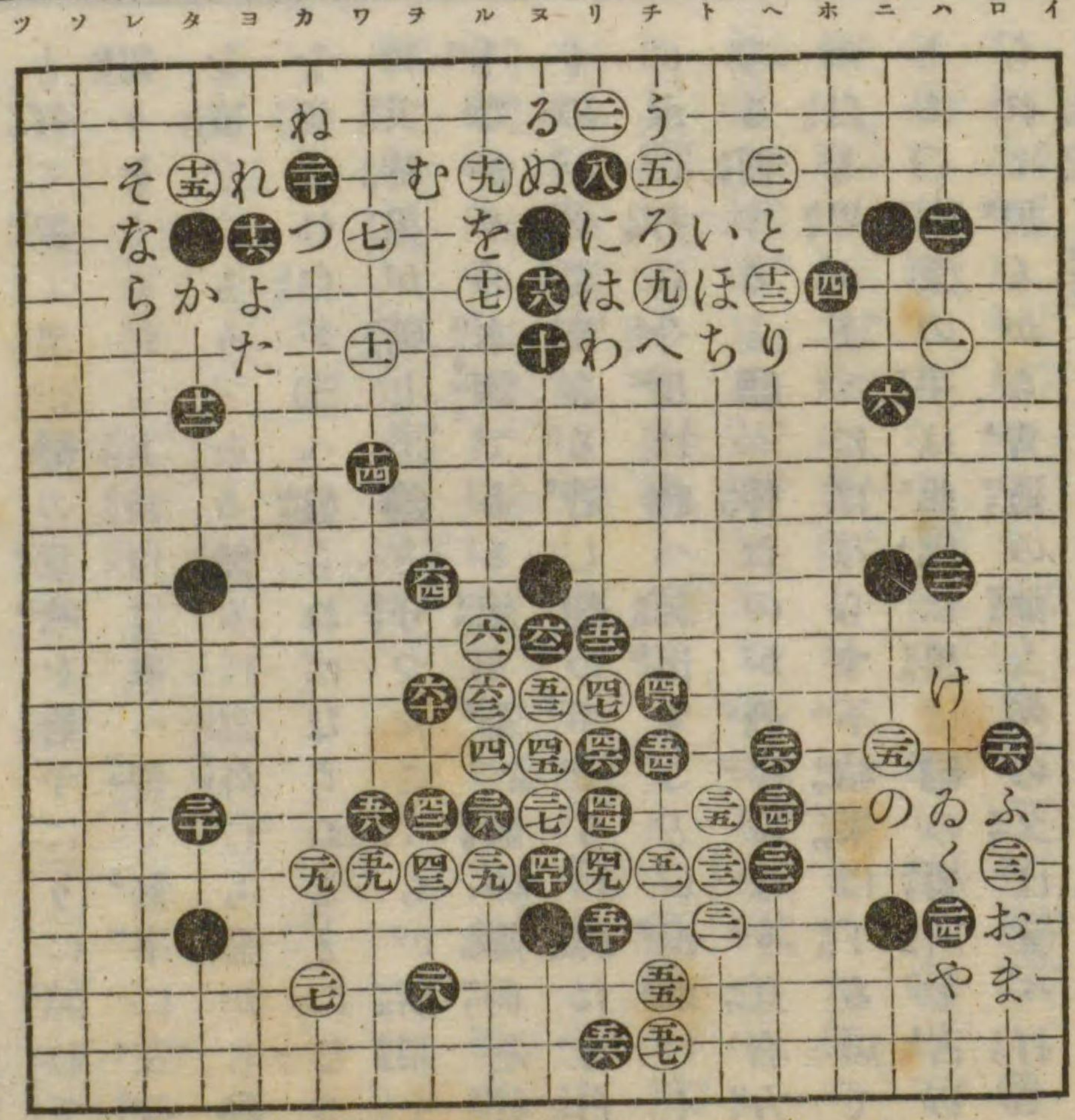
④の手で(ろ)に先手を打つて置た爲却つて眼形
 をなくす恐れがある之によつて見ても先手の
 み打つから善いといふ事はいへぬわけである
 時と場合によるのである●黒④の手は白石を
 活し外部を堅くする趣向で初學のよろしく參
 考すべき良手である●黒④と打つて態々取ら
 れ行く此の手には大に意味がある斯く④と打
 つて敵に一子を與へる爲め白に④のアテを打
 たし④となつて隅が一層堅固となる總て碁
 は石を捨てるに妙手があるのである然るに初
 學者は兎角石を捨てるのを嫌らつてそれが爲害
 を受ける事がまゝある宜しく研究がありたい
 ●黒④と覗き④と外部を圍つて白石を攻め
 たのは④の手と同意味で白は漸く活路を得る
 のみで黒には少しの疵もなく●と守つて白は
 最早施す術がない斯様な石立となつては此の
 末黒に大概な失策があつても勝ち動かない
 次に變化を示す

井目の部實戰 第二局

●黒⑥は(い)へ打つても宜しい其時白が(ろ)に押
 したら黒⑨白⑧は黒⑫(白⑪)黒⑬(白⑭)黒⑮
 (り)となりて差支ない若白が(は)の手を(ほ)に切つ
 たらば黒は(白⑩)と黒⑭(白⑯)と打つのである
 又白が(ろ)へ押す手を(ぬ)にツケたら黒⑮白⑰(黒
 (る)白⑱)黒⑲を(白⑳)の時黒が⑳へ掛けるのである
 ●黒㉑と尖附た手は前圖の㉒の下りと同意味
 である○白㉓の飛も前圖㉔と同意味である●
 黒㉕は中央へ飛出してをいて兩脇の白を攻む
 る善い手である○白㉖の手で若(か)にカカツタ
 ナラバ黒は(よ)へ尖(七)と(か)との白を隔て打てば
 善い又白が(か)でなく控(七)にカカツタ黒は
 (た)へ打つのである●黒㉘と守つたのは若手を抜
 と白から(か)か㉙へ打て隅の置石を攻られ夫か

井目の二

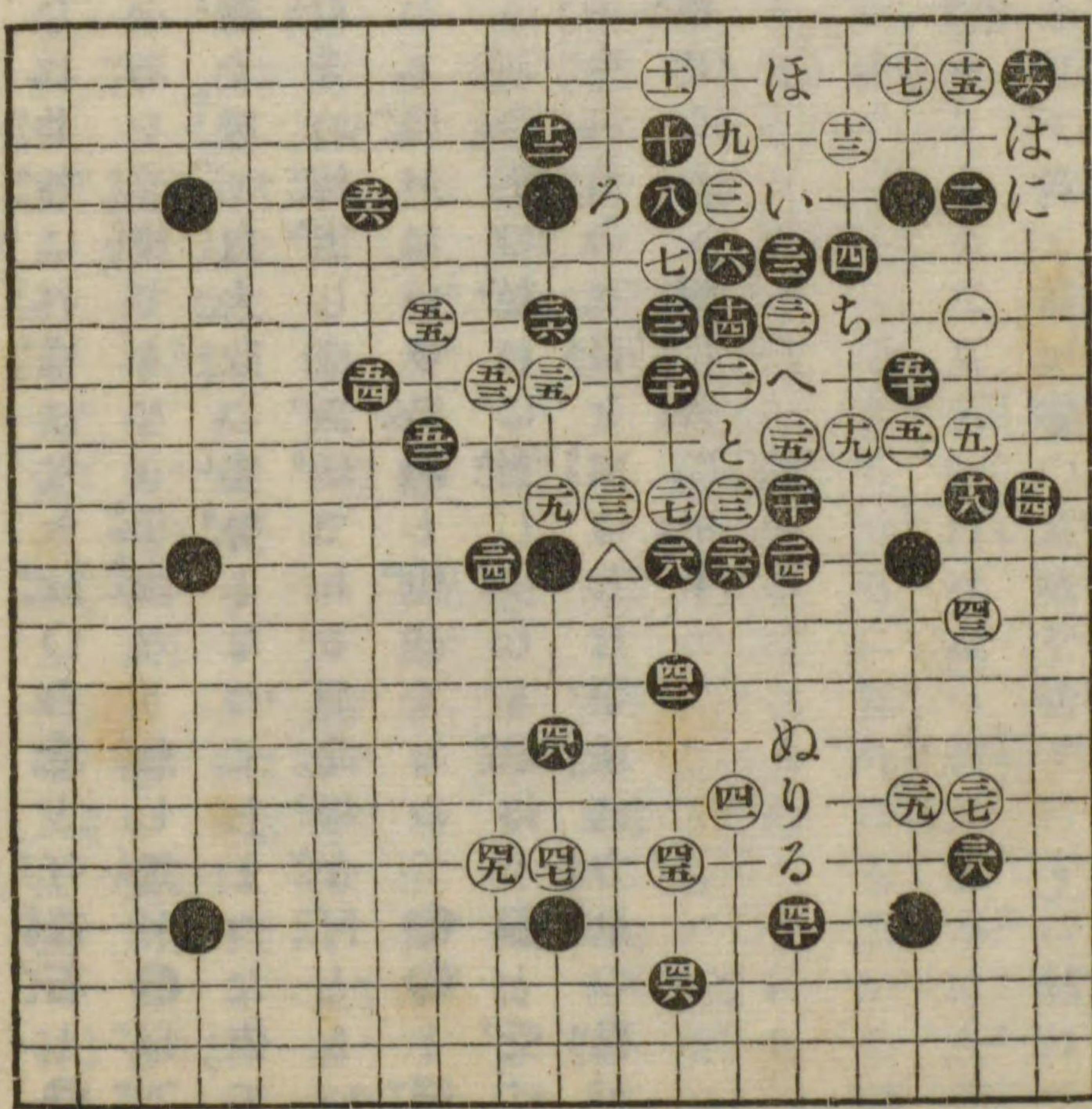
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



井目の部實戰 第三局

○白(五)の手にて(四)へ飛ば黒(六)カクル事前圖の如し●黒(六)と項(八)と切るは大に力を振ふ處なり○白(九)の手にて(三)へ綽込ば黒(四)白(五)黒(三)白(十)黒(七)と粘となり白活路は得られるも形勢非なり●黒(七)と並びたる手は軽くして宜し●黒(八)と附自を(七)へ打たせ此處其儘にして(六)と尖附白石を攻る手段面白し(五)の處打すおくは中央の白無事に治りたる時には黒(八)と引ききて收束すべきも場合によりては(九)へ下り次に(六)にオキ上邊の白の眼を取る手と中央一團の白の眼型とに關係あるゆる(八)を直ちに打たぬ處妙意味を存するなり●黒(九)は白の眼形をつぶし且つ正中置石の調子を與へる良手なり白若し(三)を打たざれば黒直ちに(八)に當白を(七)に粘が

フツレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



井目の三
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

せ置くべしさすれば後に白(三)へ切るも黒は(四)に打此處カケ眼となる因りて白(三)と眼形を存して打なり○白(三)と打しまゝにて(七)と轉ずるは危険なれ共眞面目に守るべきを守り居ては井目など置せては打るものにあらざれば止を得ぬ次第なり●黒(四)の手此場合よし●黒(五)は△印の出切の弱點を防ぎ且(九)に附白(九)に約へし時(九)に棒に粘白石を切斷する手筋あるを以て白無據(三)と打(三)と出動せしなり●黒(四)は白に(三)と伸られ下邊に損なる事勿論なれ共飽まで我を堅固になし而して(七)と覗き此處に始めて中央の大石に向て攻撃を開始す白(五)は全部の死を賭してかく打白の意中敵は下手故此の大石を殺す手は容易ならずと見大膽にも打見るなり然れば黒(三)●黒(六)と黒より徐々に急所々々に着手せられ意外の感あらん黒は敵が

上手の事なれば如何なる手段あるやも計り難く因て急激にせずして徐々に攻め立て自己の地境を廣めんとする策是上手にとりては殺さんと来るよりは却て大に困難の事總べて多數の置碁にては白を強て取らんとし往々白の術中に陥り不覺をとる事あり然るに只長圍の計をとり堅實に打廻されては白の苦しむ處なり是等を上手なかせと云ふなり變化次に示す

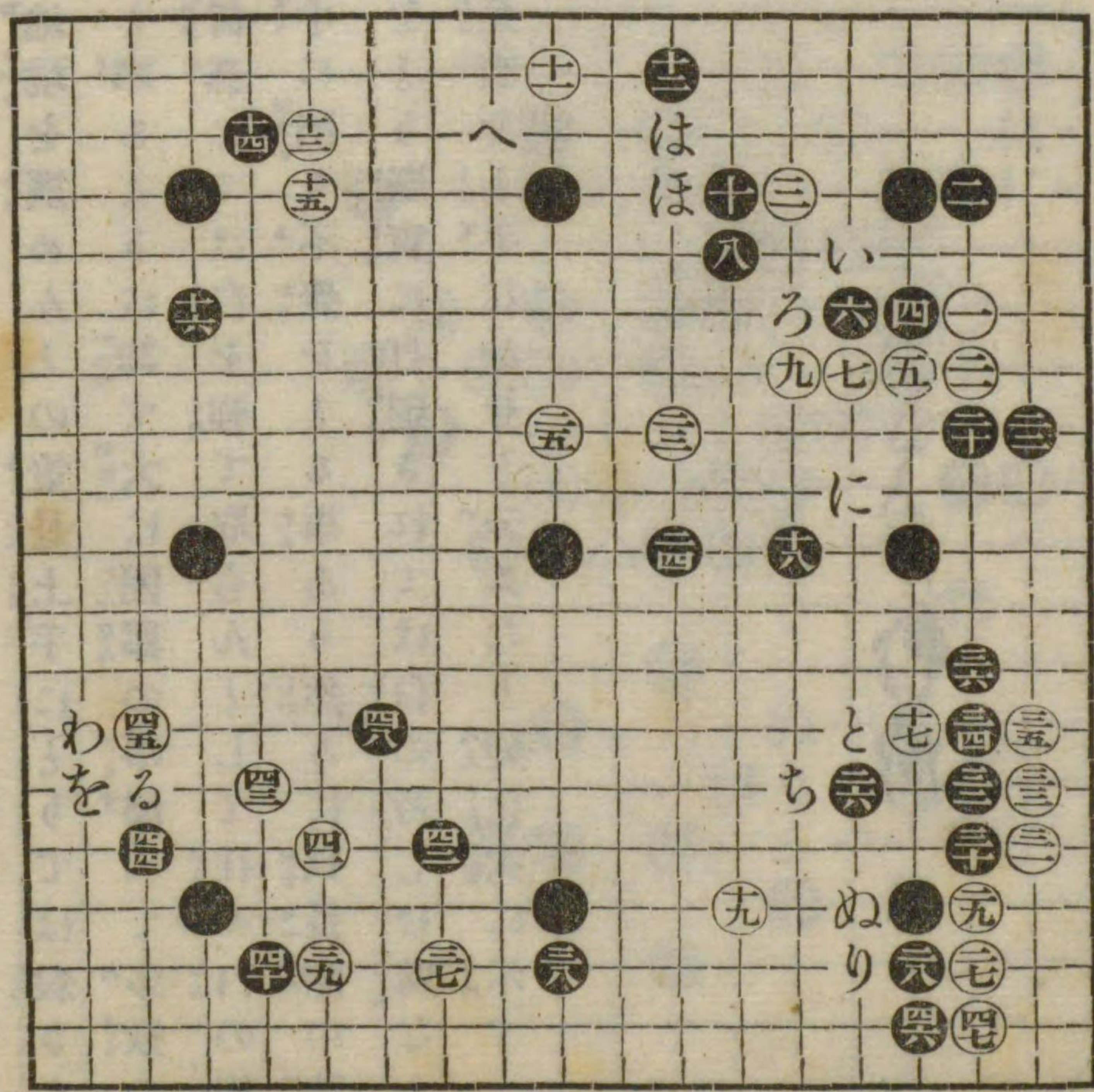


井目の部實戰 第四局

○白(一)と一間高く來りたる時は黒(四)は前圖の如く(い)に尖より圖の如く打つ方優れり○白(五)の手にて若し(は)へ飛ば黒は(五)に行てよし○白(九)の手にて若し(は)に打來らば黒(九)に縛ね白(九)の時黒(九)へ尖頂白を活し外部をヌル手段に出づべし○(十)は(三)の石は最早捨石と見て黒の地を消す手段なり●黒(三)は(へ)へ尖みても善い○白(七)の時黒(六)の飛び善し白より(六)の處へ冠せらるれば紛れを生ずるなり●黒(三)の時下隅の置石を放棄し大石を攻めカカリ(四)と中央石(天元)の一と云ふに飛び付きしは尤も善し斯く中央へ連絡せられては局面狭くなり恰も半面の碁盤にて打つが如き姿勢となるが故白甚だ不利となる總て碁勢廣く(廣くとは黒を紛らす意味狭くとは碁が無事と云ふ意味に解釋して仔細なし)なすを白の働きとす●(三)は白を隔つる手に善し此の時白若し(と)に押しなば黒(ち)に穩やかに伸びて宜し白益々重くなり捌きにくくなるなり●黒(六)は(四)より打ちたき處なれども而する時は白(六)黒(り)白(ぬ)に切る意味あり少しく紛擾を來すが故斯くは穩和の手段を示せしなり●(三)の意味は既に説明せしが如く廣く地境を拓く手なり●(四)の手は攻守を兼たる良手なり●黒(四)は障らずして良き手なり普通初學は此場合(る)へ斜走し白に(四)へツケられ不結果に終る事往々あり(る)に斜走は敵に趣向を與へる手にして且つ手筋としても面白からずと知るべし○白(三)を(る)へツケなば黒(を)白(四)黒(わ)と打つべし●黒(四)と先づ利し而して(三)と圍ひては勝算既に至し白に施すの術なし變化次に示す

井目の四

ソソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一二三四五六七八九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九

附言黒(二)の手に對し白種々に試みたるが圖の如く(三)と一間に掛る手が最も不利益なり

又碁かと

くるまつて寝る

草履取

角の石

やうく

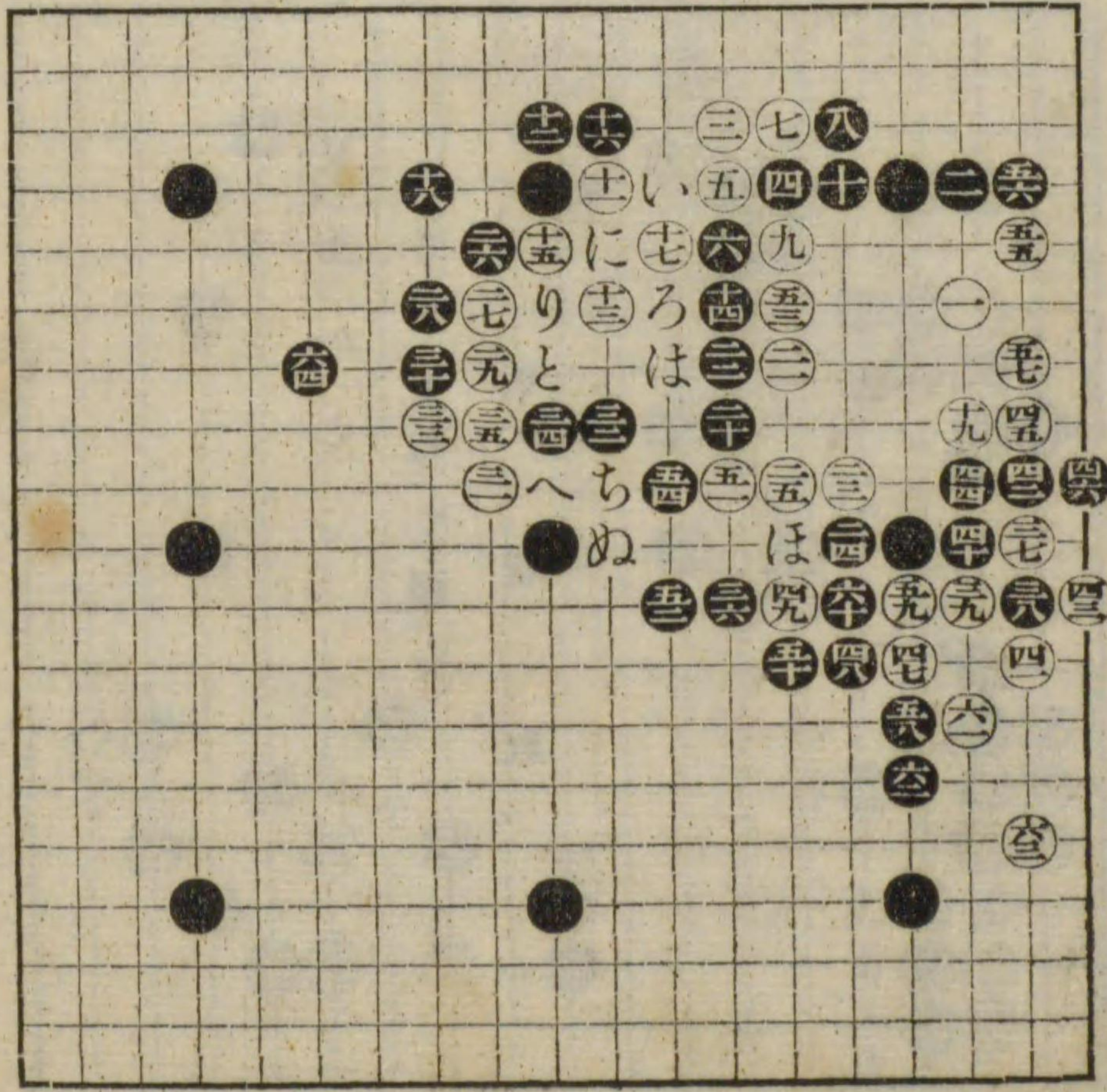
活きて

吸ひつける

井目の部實戰 第五局

○白(三)のかゝりに對し黒は(八)にコスムが普通の受方であるけれどそれで手でぬるいから斯く(四)と(三)の肩を衝で(一)の一子を孤立させた手段は強硬で善いこれでこそ最初(二)と下つた手が働きを顯はすことゝなるのである白(七)の手で若し(七)へ縛たら黒は(七)へ抑へてよい此の變化は次圖に示す●黒(八)の抑へも●(六)の趣向を行くので矢張手強○(五)を(七)へ縛たら黒は(六)へ伸び白が(六)の切りを防いで(七)へカケツいたら黒は(五)に伸び白(五)黒(五)白(五)を伸びれば黒に於て仔細ない然しそうなる(一)の白は益々立枯となるわけで甚感心しない事になるから白は手筋の上からみても只(五)にツケたのである此の時黒が若し(五)の手で(五)へ伸れば白(五)は捲り黒が(五)へ伸びた時白(六)へ突出し黒(五)白(五)黒(五)白(五)と縛る手順となるから白が何とか捌きのつ

ツソレタヨカワラルメリチトヘホニハロイ



井目の五

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

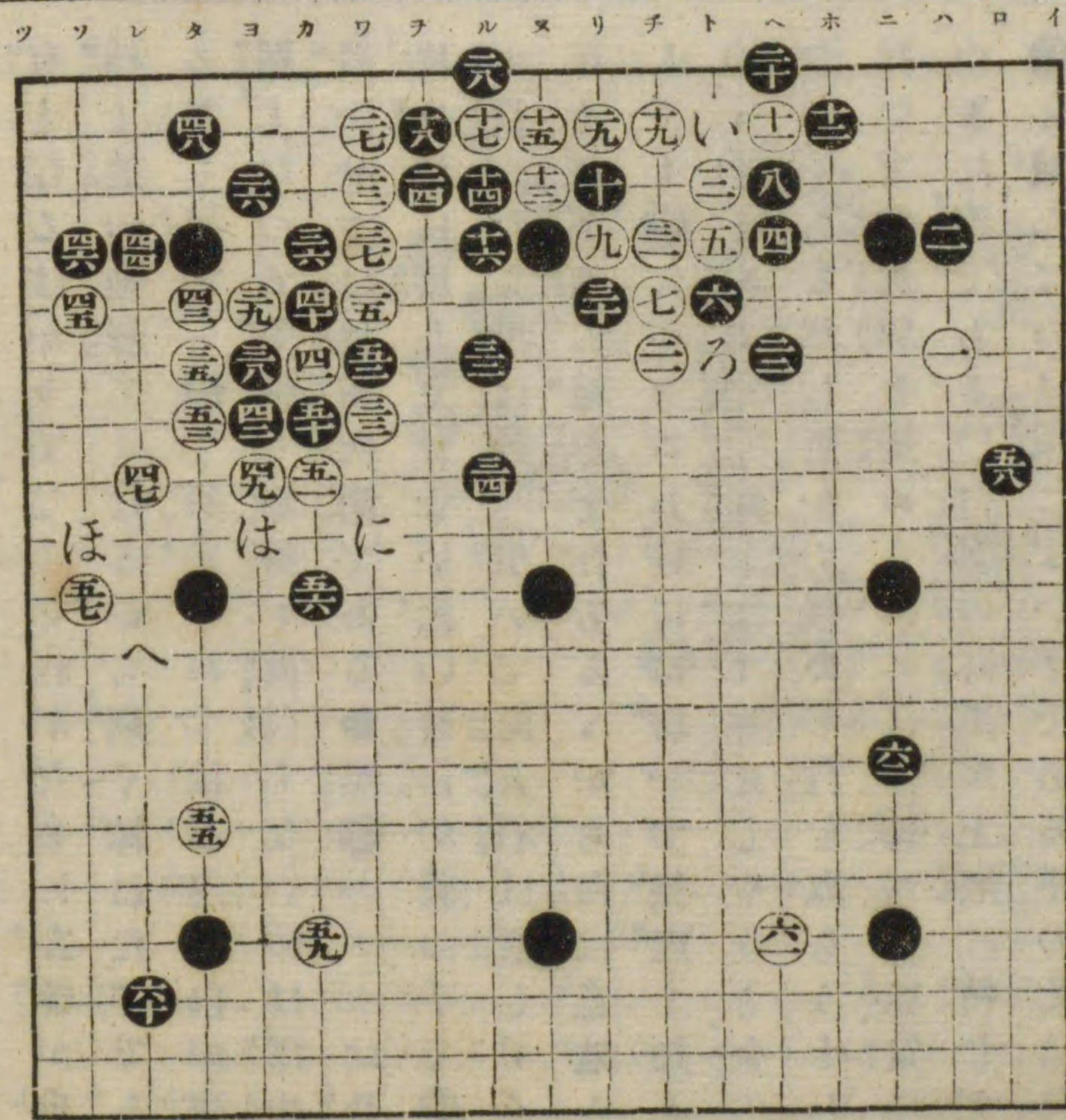
く型ちとなるのであるそれ故に黒が(五)へ伸びる手は筋違ひといつてよい○白(五)は善い手筋である●黒(五)と曲り(六)と守つた手順も善い○白(五)は先一方は大體凌げたゆる(一)の白の處置にかゝつたのである●黒(五)の飛びは雙方の白石に關係を持つ善い手である○白(三)の覗きは打づらい手であるが(三)の處に顔を出す足場として止むを得ず打つたのである兎に角白は中央へ出動する手段をとるのは此型勢として必要に相違ない●黒(五)と押し(六)と轉じ双方から白をもみ立る手段は初學の参考に値する●黒(五)は己れを堅固にしたから白の眼をとるよい手である○白(五)の手で(五)に曲つたら黒は(五)に縛ね込み白(五)黒(五)白(五)と切る事になつて白は忽ち潰れ形ちとなるのである又すぐ(五)に曲らないで(六)に出て黒が(七)に抑へた時(五)へ

曲つたら(五)の縛込は防ぐけれど黒から(七)に打たれ白(七)黒(七)白(七)黒(七)となつて白は眼形が自有となるばかりでなくそれがために左側が自然と黒の地形ちとなるから斯く縛ねた譯である然し黒から(七)と斜走されては右邊の白が薄弱となつて矢張り形勢が面白くないのは澤山置かせては無據次第である●黒(五)のツケは此場合殊に厳しくよい此の時白が(五)の手で(五)に戻つたら黒は(五)へ引いて此大石は活してくれるが下邊に地形を作らるゝから白は意地として(五)にへコムわけには行かず無理と知りつゝ(五)と縛ね出し隔を觀て遁走しやうと企てたのである然し黒から強めて白を取らうとしないので飽迄郭を堅められては白却つて術策につきた姿である○白(五)の時黒が上隅に轉じて(五)と飛んだのは誠によい手である此は白の狙ふばかりでなく大模様を作る打方で初學の研究すべき着手といつてよい變化次に示す

井目の部實戰 第六局

(白七)より前圖と變る(○白九)の手で(土)に縛ねたら黒は(土)に抑へ白が(イ)と續いた時黒は(ろ)に伸びて仔細はない○白の(九)に對し黒(十)と縛ねたのは手筋である未熟な人は白に(土)と切られて此の一目をとられるのを悪い様に思ふけれど白を(土)へ切らせ(土)と外部を堅くすることの出来るのは誠に結構なわけである○白(九)とカケツイだ時黒が(手)と縛たのはつまらぬ手の様だが此縛を打そんじてはならぬ大事な手である斯く縛ねておけば白の眼形を自からとつてをくのである●黒(三)のカケツギは軽い(俗言)手である且つ(一)の白に迫つておつて良い○白(三)と運んだ時黒が(三)とコスんだ手は中央の我が石と連續ともなり白石の攻めともなつてお

井目の六



一二三四五六七八九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九

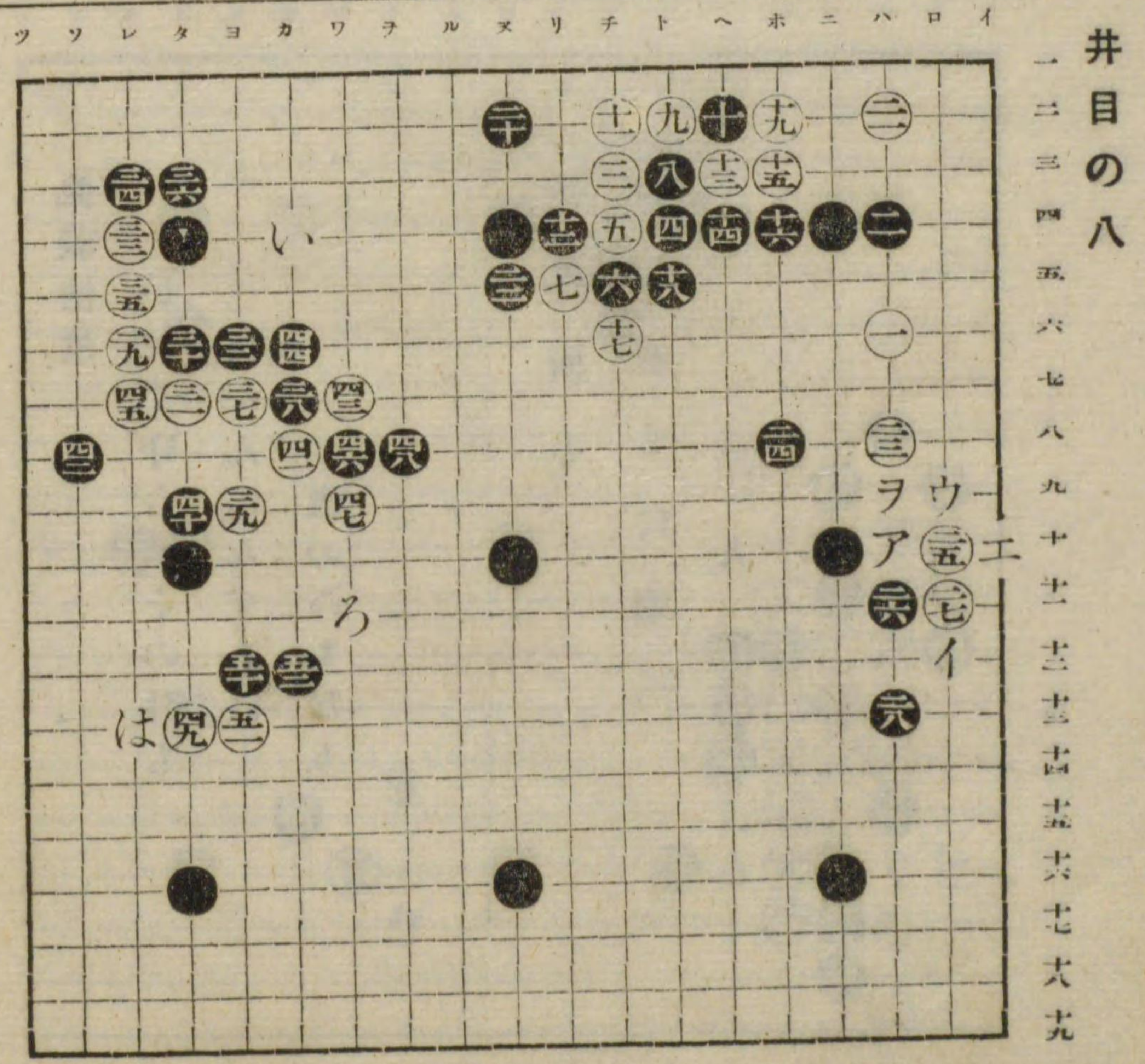
る一舉兩得の手筋である○白(七)の抑へは少し無理である(土)に打つ位のものであらふそうきたら黒は(六)の手で(土)に轉じて又(土)にツケテ白を兩斷しても宜い●黒が(土)と覗きて(土)とツケダス手筋は常にある型であるから記憶しておかれない○白(九)を(土)縛ねたら黒は(四)へ伸びるのである其時白に打つ手がないそれであるから白は無理と知りつゝ斯様に(土)と縛出し黒の失着を待つといふのは心細い次第である(土)迄の結果は最早黒が勝勢を現はしたといつて差支がない○白(九)の時黒(九)は(土)にコスンデも仔細はないが夫では隅の石が何となく不氣味故斯く堅固に守つた次第である○白(九)の手で(土)に飛べば一方の石は上部へ出るけれど黒に(土)にコスマれて双方が弱くなるので止なく(土)(土)(土)の四子を黒に與へて(土)と轉じ中服

の置石を攻めかゝつたのである●黒(九)は(土)に打つのが普通の受け手であるがそうすると白に(土)とかぶせられて紛擾を生ずるから(土)に飛んで白が手を抜いたら(土)に斜走し白石を擒にせんす用意であるから白は止なく(土)と受けたのである此の時黒(九)の手で(土)へコスンでも宜い(土)と迫つて(一)の白を擒にする方が確で更に宜い○(土)の時黒(九)と(土)に守つた手は白に何等の施す手段がなく堅いこと此上なしである圖の形勢となつては黒の勝局たる疑ひない變化次に示す

井目の部實戰 第八局

(白九)より前圖と變る(○白九)の綽前圖の變化なり●黒五と切るは井目も置たる手には少しく強過る嫌ひあれ共これ即ち自力をあらはす處なり白石を下にちめ黒は上部を打てば白趣向の立様なし○白(三)と一子に活路を求め來りたる時黒(四)と上を冠せ白石を下部に活し飽迄上部を廣大の模様にする●黒(五)は(三)へ項る手もありしかすれば白は勢ひ(六)へ綽出すべし其時黒はア(白)イ(黒)ウ(白)エ(黒)オとなる二子を得ても相當の餘地あれ共黒最初よりの趣向は白を下部に打し黒上部を打趣向故今此處しか打ちては白に上部へ出れ黒趣向に反す故(六)と打しなりかく上部を廣大され白に於てほとんど手段に窮す白も別に工夫もなきゆる先(七)との普

通に打黒の受手を待つ外なし黒も(三)と普通の定石に打徐々に攻め立つる手段最宜し○白(九)と飛びたる時黒普通の場合(イ)に守る處なれ共此局既に一方(三)と打ある故飽迄強硬に(四)と打(五)と手節に覗き白石の眼形をとり而して(六)と自から地形をなす總て圍碁は自己一手彼れ一手なれば無理に地をとらんとするは容易に出來ぬものなり敵石を攻め立て敵の逃に乘じ之を追撃し従つて地形をなす爾すれば地域は自然に成る宜敷參考とすべし○白(九)は少しく無理なり(ろ)へ打位が本手なれ共黒に(兎)又(は)に打たれ黒の地勢益々廣くなる故斯く打ち黒の應手を試み手段をなす心算なり是より白の手段に陥らざる様打さいすれば黒の勝算疑なし變化次に示す



からつぼの茶碗を

負碁度々啜り

碁で道をつけて

隠居に金を借り

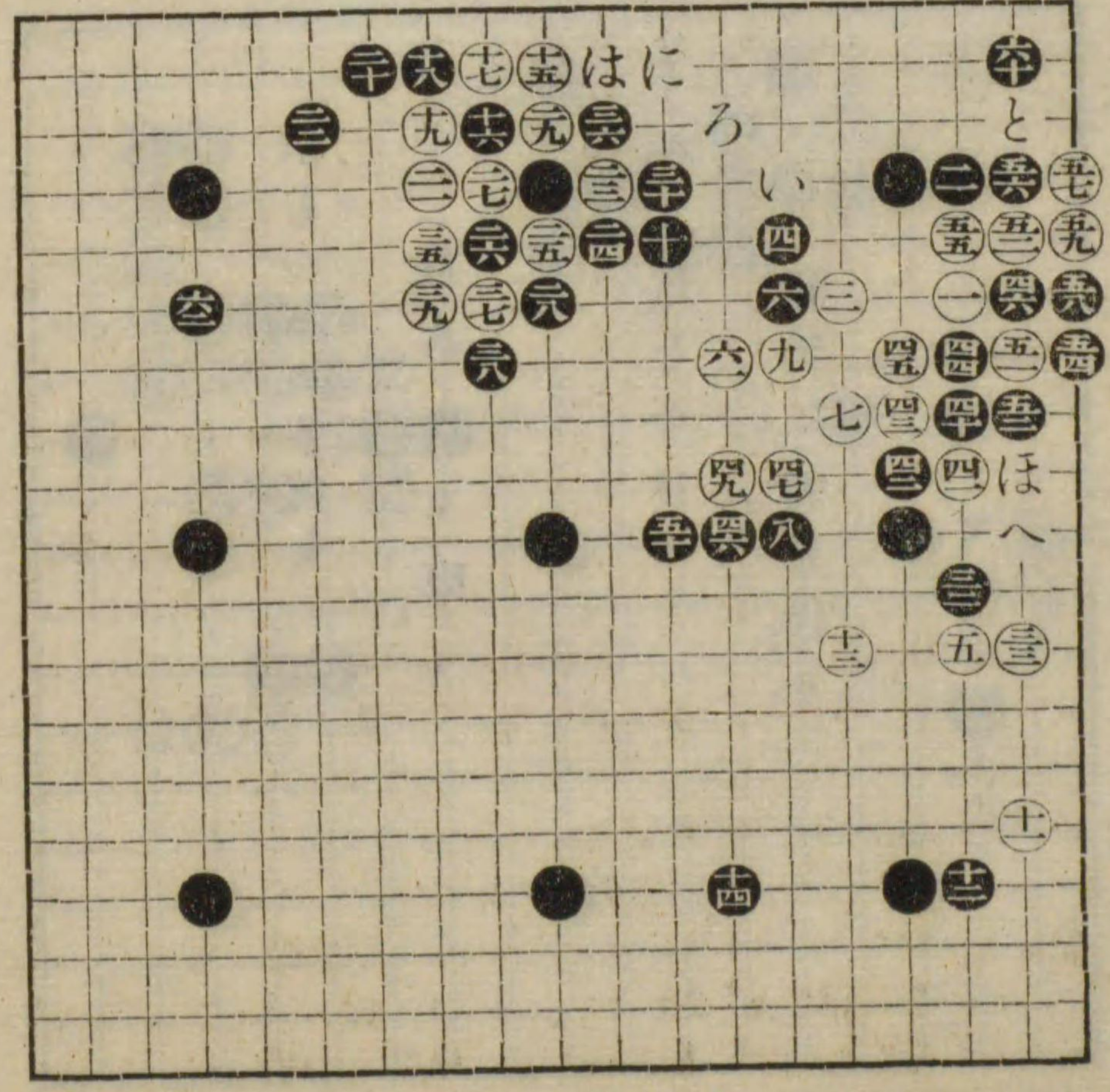
井目の部實戰 第九局

白(三)はこれ迄上隅を割つて置石と黒(二)と下つた石諸共狭撃の手段を取つて見たが何も失敗に終つたによりかく普通に(三)と飛黒(四)か(五)に受けたなら丁度最初黒(二)の手で(六)か(七)と受けそれから白(三)黒(二)と縮つた定石と同一だによりて白何とか趣向をなす心算である然し黒はあくまで強硬に對抗して(四)と慾張つて打たのであるこの時白は(五)か又は(六)へでも打て見たい所であるがそれではやはり黒に前號の様に打たれて不結果となるが故今度は白も飽迄黒の趣向を外して(五)と掛たわけである黒が是を捨置て(六)と押し(八)と中央の置石を飛出し白石を攻め自己本能的に四間迄に地形を作つた手段は甚だ面白い○白(十)の手は先づ下隅の(五)の

石を防ぎ上隅に趣向を立る心算である黒(十)と(四)の手は白の弱みをうかがひつゝ守勢の手であるさて白として外に手掛りもない故先(五)と打ち黒の應手を試みたるに過ぎない然して黒は(六)へ突當り白(七)黒(八)と打て此處に地域にするのが普通初學として仔細なき打方であるが白に(九)と打たれ後に(二)に附らるゝ意味を打たれ折角初めに取つた地面を消さるゝことが時々あるによりて(三)と反對に尖み白が右方へ手を延せばその虚に乗じて白を擒にするかさなくば活したる處で今度は反對に左側へ地面を作つた所謂舊を捨新に就く妙策である○白(十)と切つた趣向は黒(六)とすきまなく攻られた以上右方に活路を求めたとて格別面白くもなき故此二子を捨て左側に向つて手段を廻らす趣向である例へば黒が(七)へコスミ二白子を取りに來らば(八)へ伸び手数を延し(九)へカケテ打つのである黒も僅か二子の爲めに白より(十)にか

けられ位を低くしては格別の利益でない故(三)へ尖み徐々に白石を攻め立つる手段を取つた白も無據(三)と打(六)の石を得て辛じて連絡したのである●(七)と劫を争つたのはよい手である○白(十)の時もし(八)へ粘いたなら黒は(九)へおさいるか又は(二)に飛ぶか自由である黒(九)白(十)となり先此處差すめ黒にも好點もなき故(三)と止を得ず損をなしては上に出る策なき故(三)である●黒(六)用意周到此手を打たず置けば白に(七)と約へられ黒(八)の時白に(九)へ打込れば眼形が残るが故かく後の手の残らぬ様打つが碁の本法と心得べき事である●黒(卒)の時上の眼をかくと白に(と)へ刎ねられ此處に一眼出來黒莫大の損となるによりかく己れの地を守り白もし之を打たざれば忽ち擒とす此の如く黒は白石を攻自分の地域充分に出來たる故(三)と守り軍を引上勝算を立てるのである變化次に示す

井目の九



井目の九
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

(三)却提
(四)劫提

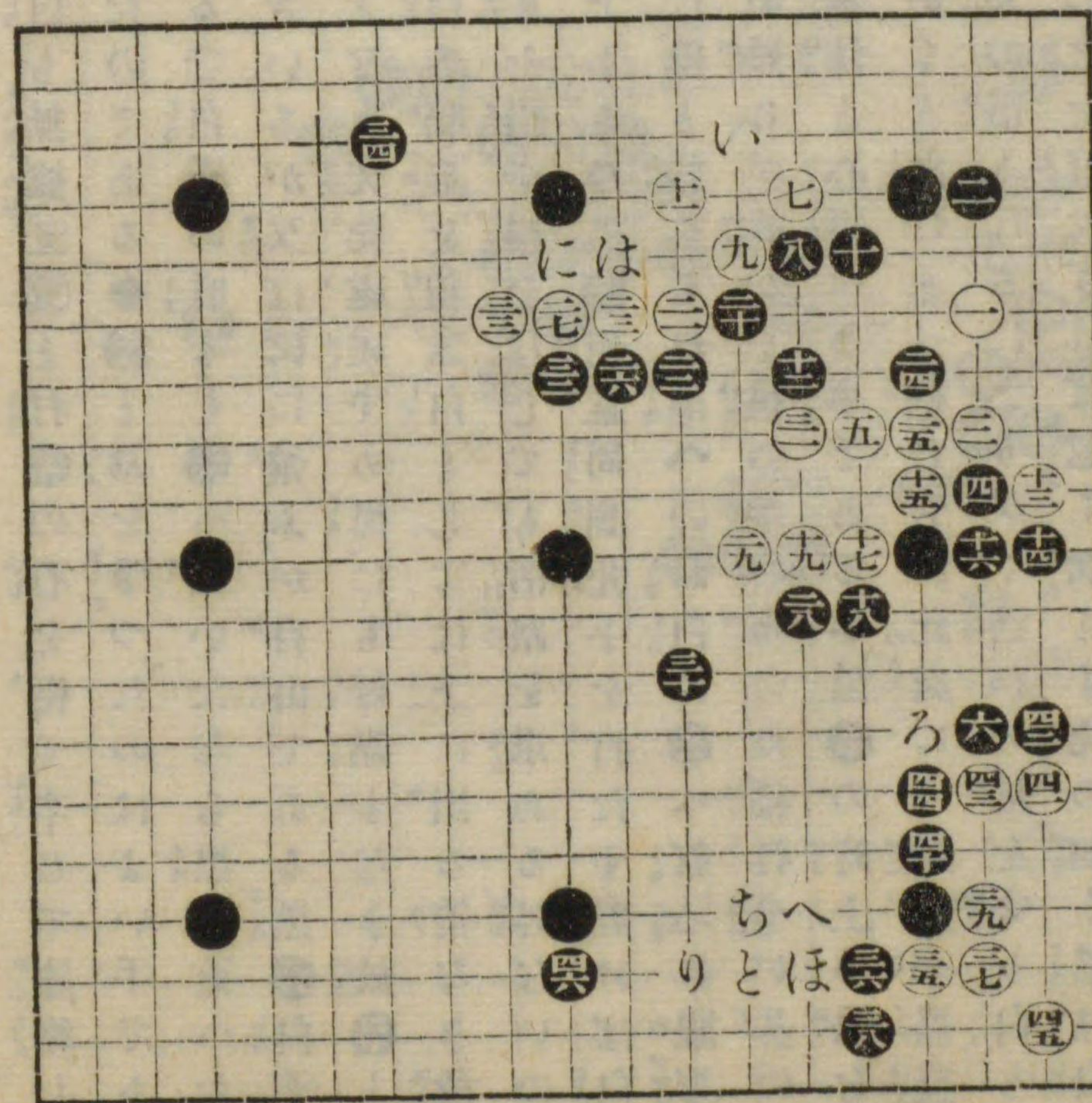
井目の部實戰 第十局

白③は黒に迫らず軽く捌く手である●黒④の尖頂は⑦の處か又は①の處に守るが普通であるが夫れでは餘り自己の本能に叶はず依つてかく變化して打つ次第である之の手は②へ打つてもよい白も黒にかく打れて見ると上隅をそのまゝにして置くもあまり不甲斐なき故⑦と追撃するのである●黒⑧とツケ⑩と運び白石を兩斷し攻立る手段は烈しい手で良い○⑤⑥は誠に打つらひ手であるが止を得ないもし⑤の手で直ぐ③へ押たなら黒③白③黒③と圖の如く運びて⑨へ飛たなら白は眼形がなく恐らく活路がなからう○白③の手でもし④へコスンだなら黒は④に斜走し白に②と打せて⑥⑦と運んで仔細ないかやうに白を攻て置て④

と普通の大斜走してから後①へ覗き白の眼形を取る意味を狙ふのである○白⑤の時打方に苦む處である普通に④へ②と①と打つても中央が堅いから手段の施しやうがない依つてかく打て黒の應手を試みた次第である黒もこの白を擒にすることは到底不可能であるから白を隅に迫込んでかく外勢を張つたのは至當の着手である●黒⑧の良手である事はいふまでもない是等の局勢を俗に狭い碁と稱へて白が趣向の立やうのないものである此末多少黒に失着はありても勝算は確固たり以下八目之部を説明せん

ツツレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ

井目の十



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

勝と見て

和尚の

高笑ひ

碁の味は

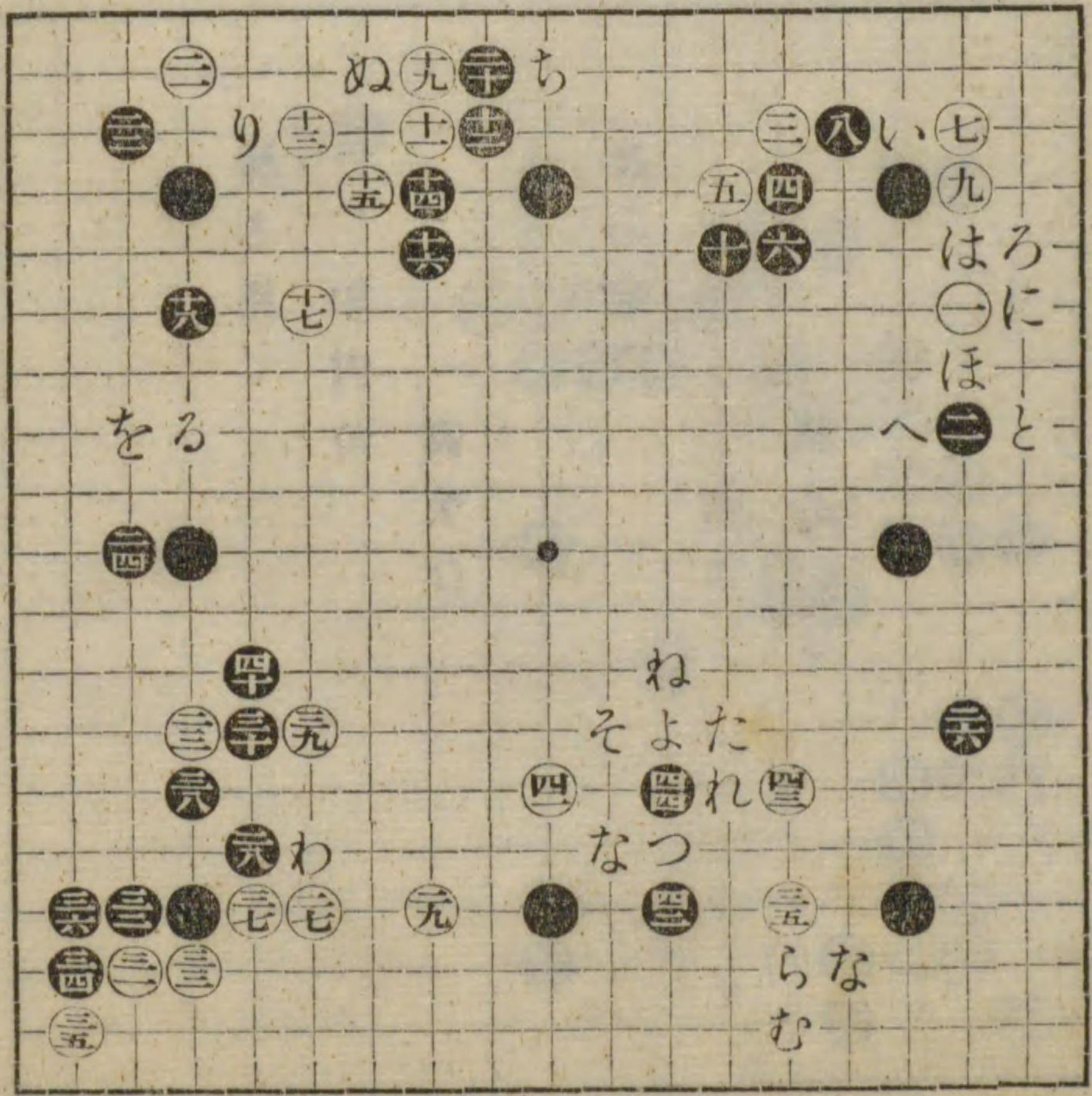
こゝと味ふ

新茶かな

八目の部實戰 第一局

井目の部は打きり是より八目の打方を示す○
 白一と掛るに對し黒二と詰る受手○白一と掛
 りたる時黒三を井目の如く九へ下りても差支
 なし夫は井目の部にて示しをきたる故こんど
 は型を替斯く二と打手を示す●二と詰たる時
 白三と掛るのは此時から一の石は捨ててもよい
 といふ考なのである●黒四白五黒六迄は普通
 出来る型である此時白七と打たのは愈々三の
 意趣を實現して一の一子を捨る手段である黒
 がうかと八の手を九へ打てば白は得たり賢し
 こしといへ打つとすれば白の一子は捉れるこ
 とになるが最初二と打ある爲め今又九へ打て
 此一子を取りては如何にも地型が狭くて面白
 くない換言すれば白の方寸に陥ることとなる
 故黒八と反對に出で一七の白を連絡させ●と
 曲りて三五の二子を取るの良手段である凡

ソツレタコカワナルネリチトヘホニハロイ



八目の一
 一二三四五六七八九十
 十一十二十三十四十五十六十七十八十九

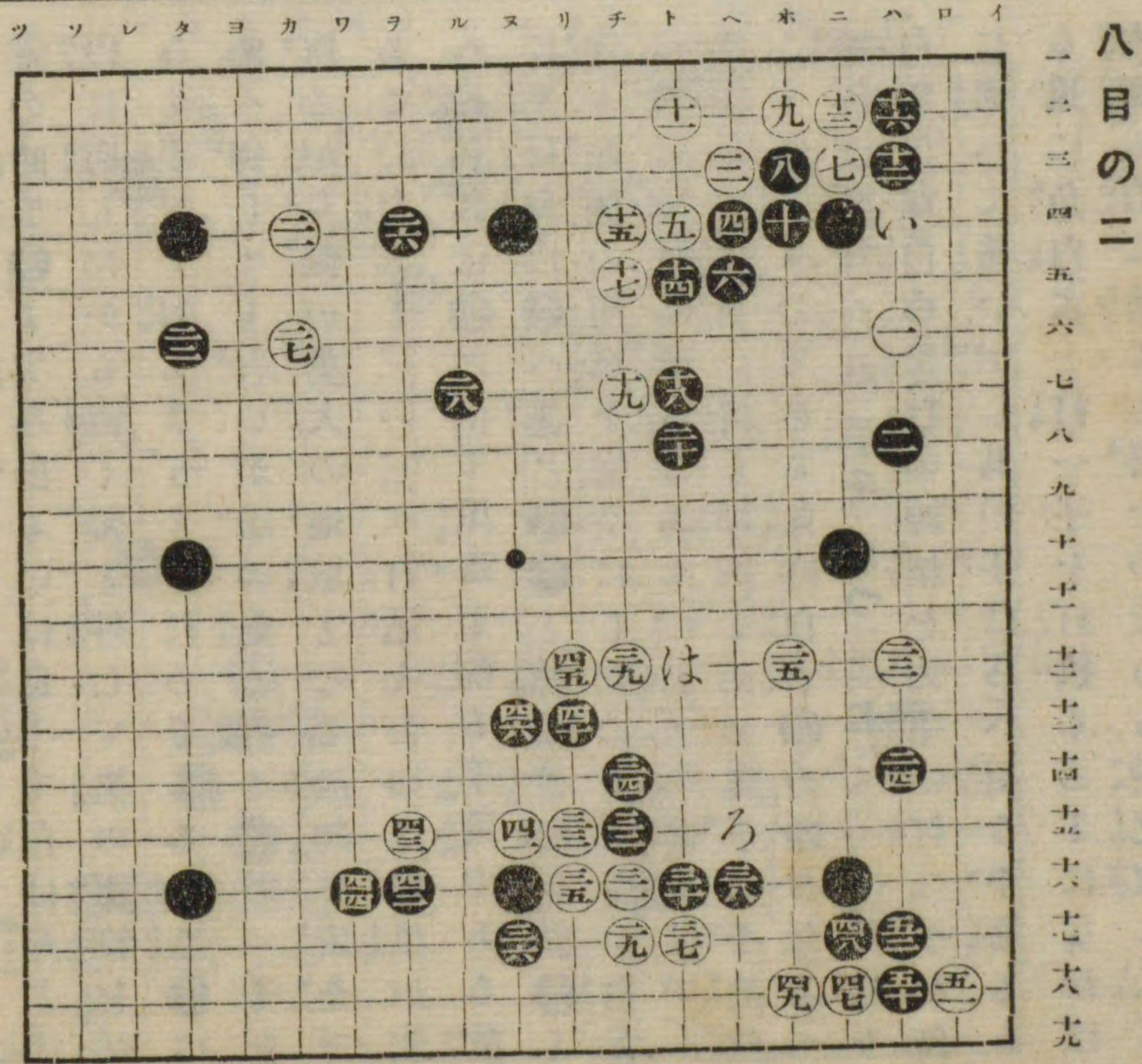
碁は敵の意中に陥らぬ様に打つのが肝要である
 併し此型は普通の定石だから白として斯なり
 ても止を得ないのである後黒は或場合を見て
 (ろ)へ打白は黒二と連絡して白の眼形を奪ふ手
 段を狙ふ味がある故白も場合により(ほ)へ突當
 りて此手を防ぐとせば黒は(へ)或は(と)に應じて
 よいのである○白三普通は(出)へ行るのである
 がそうすると黒から(り)に尖まれて重くなる嫌
 があるから少しく筋違ではあるが軽く(出)と外
 して黒の應手を試みたのである●黒(出)と(出)と
 (出)とふくれた時(出)へ縛るのが手筋であるがそ
 うすると白に(ぬ)と却に受られ却争の結果黒不
 利益を醸す恐れがある故譜の如く(出)と(出)と
 のが穩健の着手である○白(出)より黒(出)までは
 双方共普通の打方である○白(出)の時打着す
 べき個所は澤山にある只黒は白の着手に應じ
 好點を選んで打ば善いのである●黒(出)は上隅(る)
 へ打れる手があるから斯堅固に守り(る)の打込

を防いだのである若白此上(る)へ來たら黒は(を)
 へ應じて善い白は何の得る處ないのである○白
 (出)の時黒(出)と尖み出るのは良手で白は殆ど手
 段に窮したから暫く(出)と外して黒の應答を試
 みて手段を廻らさうとしたのである●黒(出)は
 (わ)へ押ししても善いが譜の如く打て(出)の一子を
 取るが左側が莫大の地域となる故却て安全で
 ある○白(出)と三の三へ打込んだのは若黒が(出)
 へ約へれば(出)に出で黒地を削る手段である故
 に黒反對に(出)へ應じ(出)と(出)と(出)と
 守り左側の領域を完全にしたのである○白(出)の時
 は(出)に冠する前提である○白(出)の時黒は(出)へ
 尖出して示すので善い併し(出)と(出)と詰める手は
 こゝに示すのである此時白若(出)の頭即ち(出)へ
 項れば黒(出)白(出)黒(出)白(出)黒(出)白(出)へ
 白(出)黒(出)白(出)黒(出)白(出)黒(出)白(出)へ
 に與へて善い但し其の手は(出)へ項る手筋もあ
 る兎に角白(出)と打一子を打抜くことになれば
 大底の石は捨てても善いのである變化次に示す

八目の部實戰 第二局

○白七は△へ打てば△へ應じられて餘り面白からぬ結果になるのは前譜の通りであるから
 ⑦と普通の定石に出て見たのである是とても
 白好んだ型ではない●黒八は△へ約へ白八
 黒い)と打ても善いが併し斯普通の定石に出で
 て①の一子を捉れば莫大の地域となる故充分
 である●黒△は白より①へ切られる憂ひがあ
 るから夫を防ぐ爲めである以下白△迄は普通
 の布石である●黒△と詰白△と飛んだ時△と
 打たのは輕妙なる手筋である○白△の時黒△
 は井目に於て示した通り△△と打白に△と粘
 がせ黒△と下り飽迄強硬に敵を壓迫する働き
 ある手筋である此場合白△△の二子が薄弱で
 あるから黒△と行る手順尤も妙である若白が

○の手を△へ打たならば黒は△へ項けて隅の
 石と共に上へ出さすればよいのである●黒
 △の時△へ打て△△の二子を取れる目的立
 ばそう打ても善いのである故に白は其憂があ
 るから△と逃げたのである●黒△の尖みは場
 合に適して居る白に△と打せ△△と自然に地
 型をなすに反し白は双方共眼形がないから黒
 は徐々に之を攻立てば孰れか一方は白は死石
 となるのである例令死なぬにしても黒は攻勢
 を取る位置にある故充分勝算を得らるゝので
 ある變化次に示す



形勢が

よいと先生

せきばらひ

花時や

雨の静かを

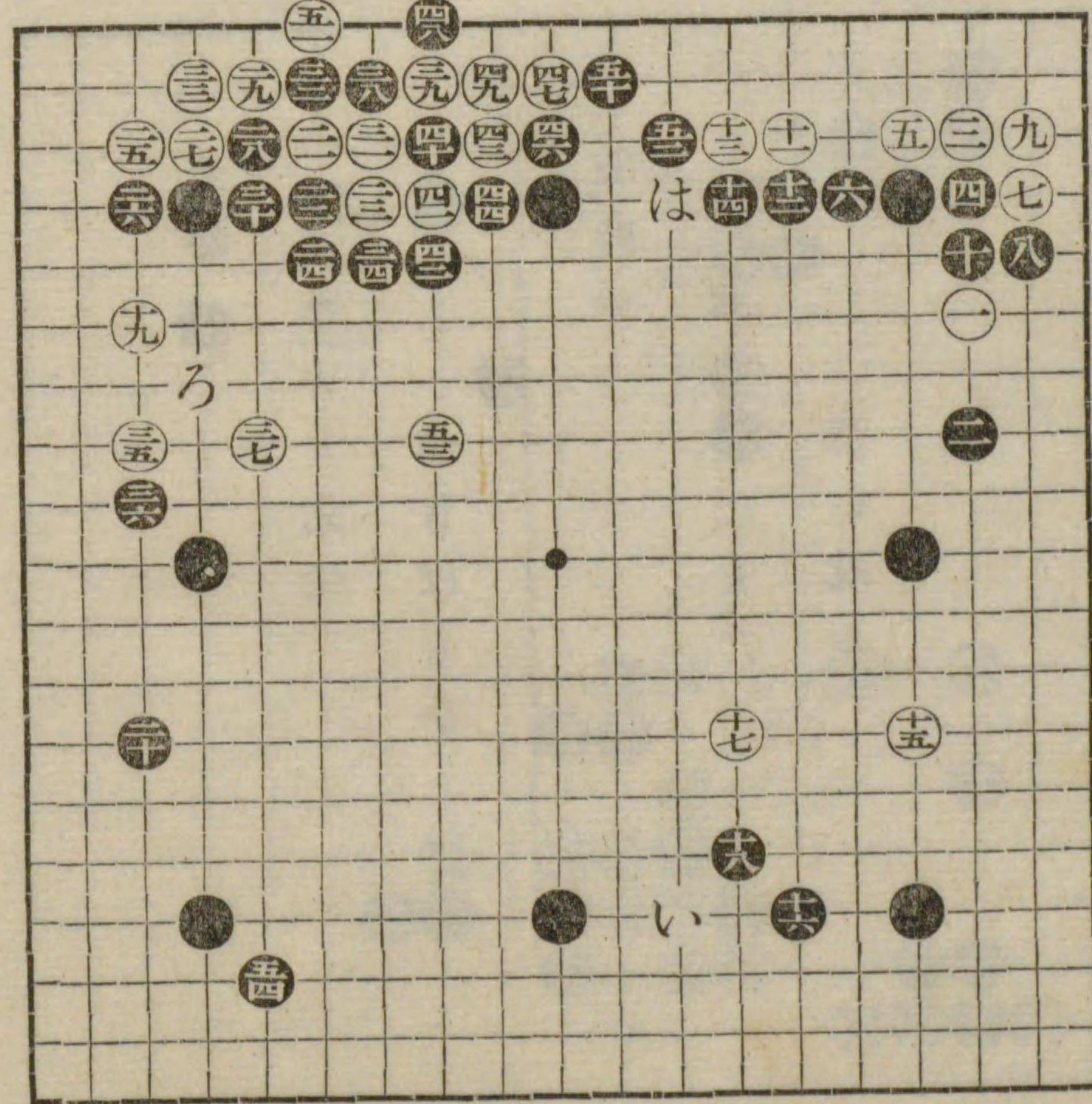
碁に耽る

八目の部實戰 第三局

○白③は前々譜に述べた通り①の一子を捨る手段である譜の如くなりては黒が少し凝り型の嫌ひはあるが多数の置碁としては外型が手堅くなる故白としても餘り面白い振替りではないが致し方なし●黒④は白から⑤に打込まれるのを防ぎ併せて白に迫つた働きの手である○白⑤と掛つた時黒⑥は⑦又は⑧へ應じても善いのである○白⑧より⑨迄は双方共普通の定石である●黒⑩平素は餘り好ましくない手だが此局面にては斯打方が善い何となれば今假に普通の如く⑪の手を⑫へ打白⑬となりては右側に白⑭と打てある故黒⑮⑯の二子を取るものが面白くない故譜の如く⑰と打方優しである○白⑱は⑲へ掛粘が本手であるがそうす

ると黒に⑳へ曲られ白㉑へ行た時黒に㉒へ掛られ㉓の一子を擒にせられ爲に黒の地域を廣くする故斯打て見たのである此時黒若㉔へ掛たならば白は㉕へ押し場合に依りては㉖へ綽の意味を含む手段を爲す心算である故に黒は敵の謀の裏をかいて㉗と切り㉘と押し白を壓迫したのである斯なりては白㉙の一子を孤軍重地に臨む状態となり此の一子を取られては黒の地域益々尨大となる故白は先んじて㉚と眼形を作したのである●黒㉛以下㉜迄の手順尤も善研究ありたし○白㉝の時若㉞へ飛ば黒は㉟を約へて矢張り黒の方宜しい○白㊱の時黒⑤は良手である併し此時黒に打着すべき好點は澤山あるから敦れへ打も夫は隨意である其一二を例せば⑥⑦などは尤も適當の打場所なり變化次に示す

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



八目の三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九

四五ツグ

涼しさや

盤に布く

碁の千松島

春雨や

碁敵に

やる

果し状

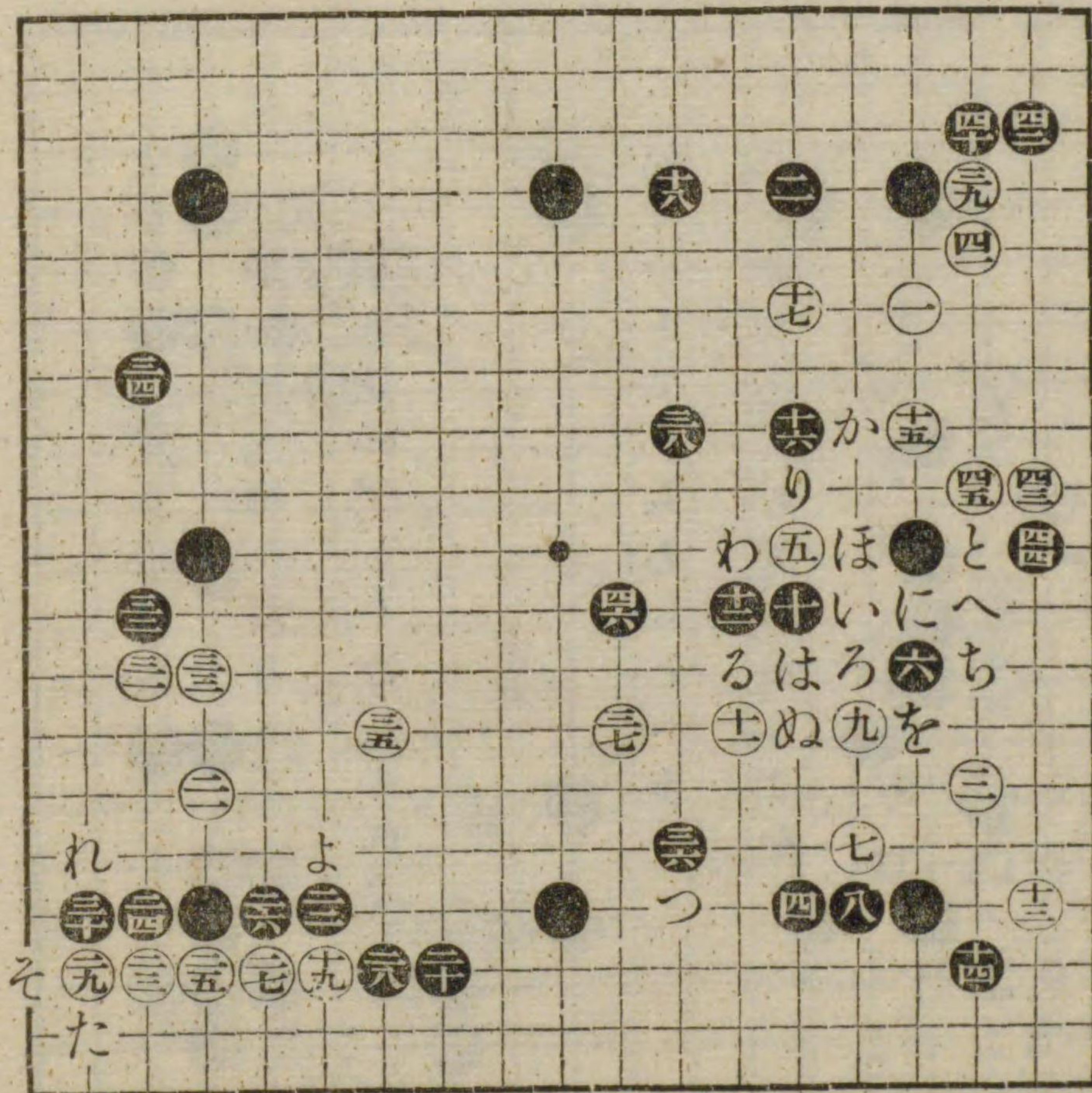
八目の部實戰 第六局

白①と掛りに對し黒普通の受手○白⑤と冠し
 來る此帽子の爲めに黒は兎角紛れを生じたが
 者故一譜を示すことにする元來白⑤と冠し
 たのは黒の星石を取るのが目的ではない黒が
 此星石を逃る處に乗じて上下の隅に關係を生
 じて得をせんとする手である故に黒は此星石
 を逃る時上下何れへ出るにしても隅に損をし
 ない様に打つべきである此場⑥は⑤へ詰めて
 も善いのである併し譜の如く打て白⑦の手段
 を打たせる方が得策である○白⑦は打たくな
 い所だが斯く打たなければ趣向が立たぬ故止
 を得ず打たのである此時黒⑧は必ず打手と心
 得て置くべきである○白⑨の時黒⑩と附て出
 たのは善き手筋である白若し此時無理に⑪へ

綽出れば黒⑬白⑭へ行ひ其時白⑮なれば
 黒⑯白⑰へ黒⑱と白⑲黒⑳にて黒善し白㉑㉒へ出
 る手で⑳へ粘ば黒㉓白㉔黒㉕をにて宜しい黒又
 ⑳へ出る手を⑳へ切り白㉖黒㉗は白㉘黒㉙白㉚
 黒㉛かと穩かに出ても黒の方が善い畢竟白が⑳
 へ綽る手が無理である故斯く㉜と打て黒を出
 す外はないのである○白㉝の時黒㉞は手筋で
 ある前々譜に示したる⑨の手と同意味なり參
 観すべし●黒㉟は他へ轉じても善い○白㊱を
 若し⑳へ打てば黒は㊲へ打て善いのである○
 白㊳は⑳の一子を黒に與へ㊴へ連絡する手段
 である故に黒㊵を㊶へ打てば⑨の一子は取れ
 るなれ共夫れは白の術中に陥るので面白くな
 いから斯く反對に㊷と打ち㊸の一子を薄弱に
 するのである白㊹は打たずをけば黒より㊺へ
 綽られ白㊻黒㊼白㊽を打たねばならぬ型とな

八目の六

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



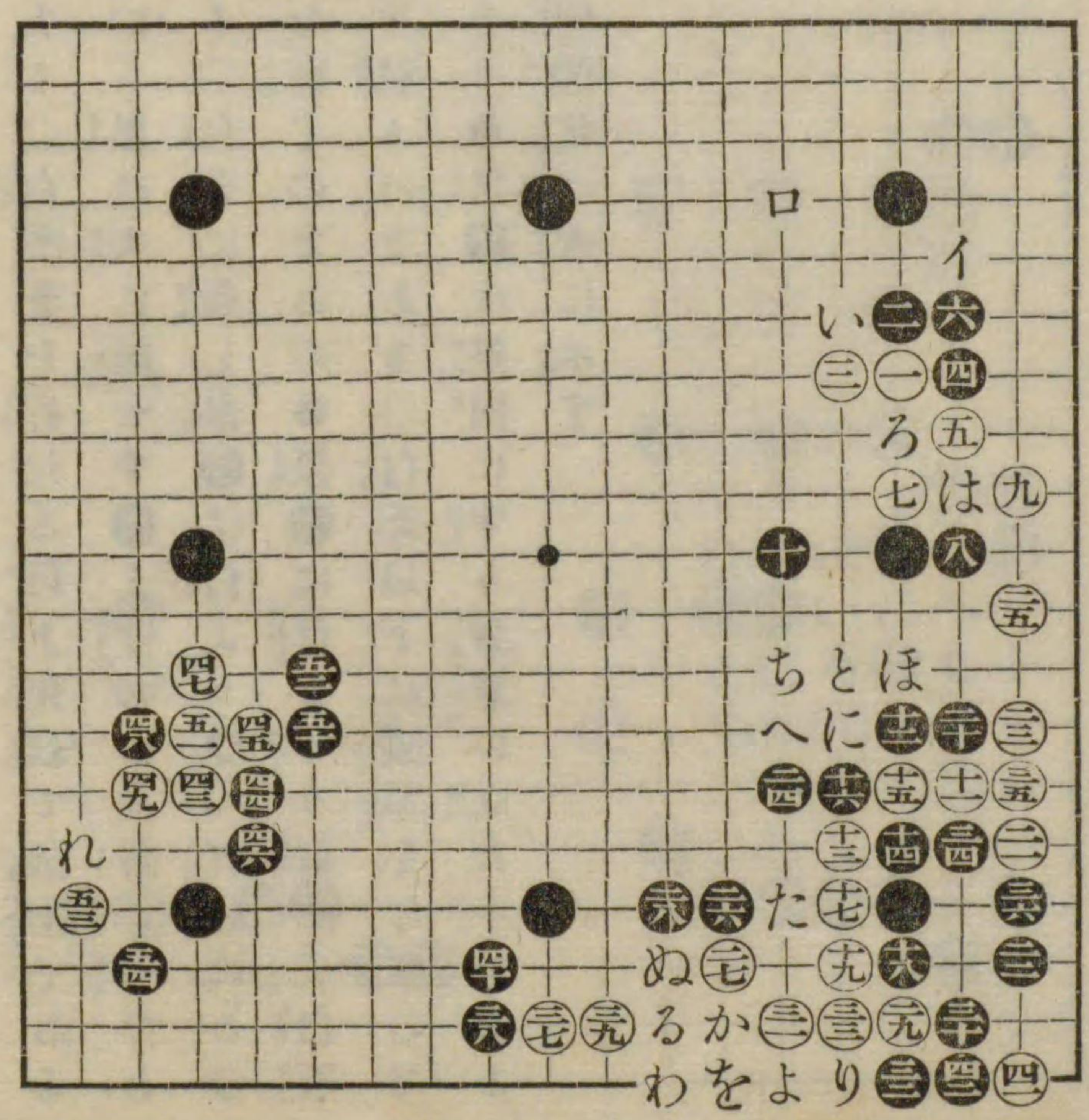
り而して黒①の一子白②に近き故それ丈一
 子が薄弱となる故其豫防に斯く打て置くので
 ある○白③④を打たる以上先以て活型である
 から黒は夫に關せず⑤と守たのは善い手であ
 る○白⑥に對し黒⑦は白より⑧へ打込れるの
 を防ぐのである●黒⑨は白を守り併せて白石
 を狙ふのである○白⑩以下は眼形をなすので
 ある●黒⑪は堅固に守り勝算の立た手である
 尙變化は次に示す

八目の部實戰 第七局

○白①と二間に掛りに對し黒附手の受手○白②と二間掛りに對し黒③と附るのは普通の手である(或はイ又はロ)へ打も任意なり此時白④へ縛れば黒⑤へ行項行の定石になる元來白は此項行の定石を避ける爲め①と二間に掛つたのだから夫にては趣向にならぬ故斯く③と行びて黒の應手に依り趣向を立てんとしたのである●黒④と縛⑥と粘いだのは善い手である白は(ろ)へ切られると次に(は)へ夾まれ黒に連絡される手がある故捨て置くことは出来ない依て先⑦と打⑨と連絡を絶つたのである此時上隅の黒は堅固である故⑩と飛んで上へ發展するのである或は⑤へ守りても善い○白①と掛りた時黒②の角一見無理の様なれ共此手は強

硬飽迄白を壓迫する良手段之等が上手なかせの今本なりである○白⑤を⑥へ押せば黒は⑦へ約へて宜しい其時白⑧と打たずして⑨へ切らば黒⑩白⑪黒⑫白⑬と壓迫すれば善いのである○白⑭の時⑮へ切りても黒は矢張前述の運びで宜しいのである夫にては白は面白からぬ故少しく無理なれ共⑯と打ち戦を挑んだのである○白⑰は手筋である此時黒強て白を取らうとすると悪結果を來す故白も活し自己も活き白を上へ出さぬ様に打のが善いのである以下⑱迄の結果は黒充分なる局勢である○白⑲と打て置くは(り)の約へが先手に利く故黒に圍中の白は活と思はせる手段である然るに此白は全く活て居らない黒の先手にて劫になる今其順序を示さん黒⑳へ曲り白㉑(黒)を白㉒(黒)か白㉓と捉り黒㉔(か)へ打込(此)か打込

八目の七



む手は初學者には一寸六ヶ敷手である(白)そに取れば黒たにて白死となる故最初黒が(を)へ置たるの時白た(黒)かにて劫となるのである夫を知りつゝ白が他へ轉ずるのは誠に横着なれ共白としては據ないのである依て黒は時機を見て前述の手段に出て善いのである○白①と掛りし時黒②は平生は好ましき手ではないが此場合適當の好着で白は應手に窮したのである○白③を若し④へ粘ば黒は⑤へ縛て善いのである○白⑥の時黒⑦の覗きは働きある手である此時白⑧へ粘ぐのは如何にも心外なる所故(兎)と打たのである其時黒⑨と縛⑩と行び上邊益々廣くなり白は何共施す策なき形である尙變化次に示す

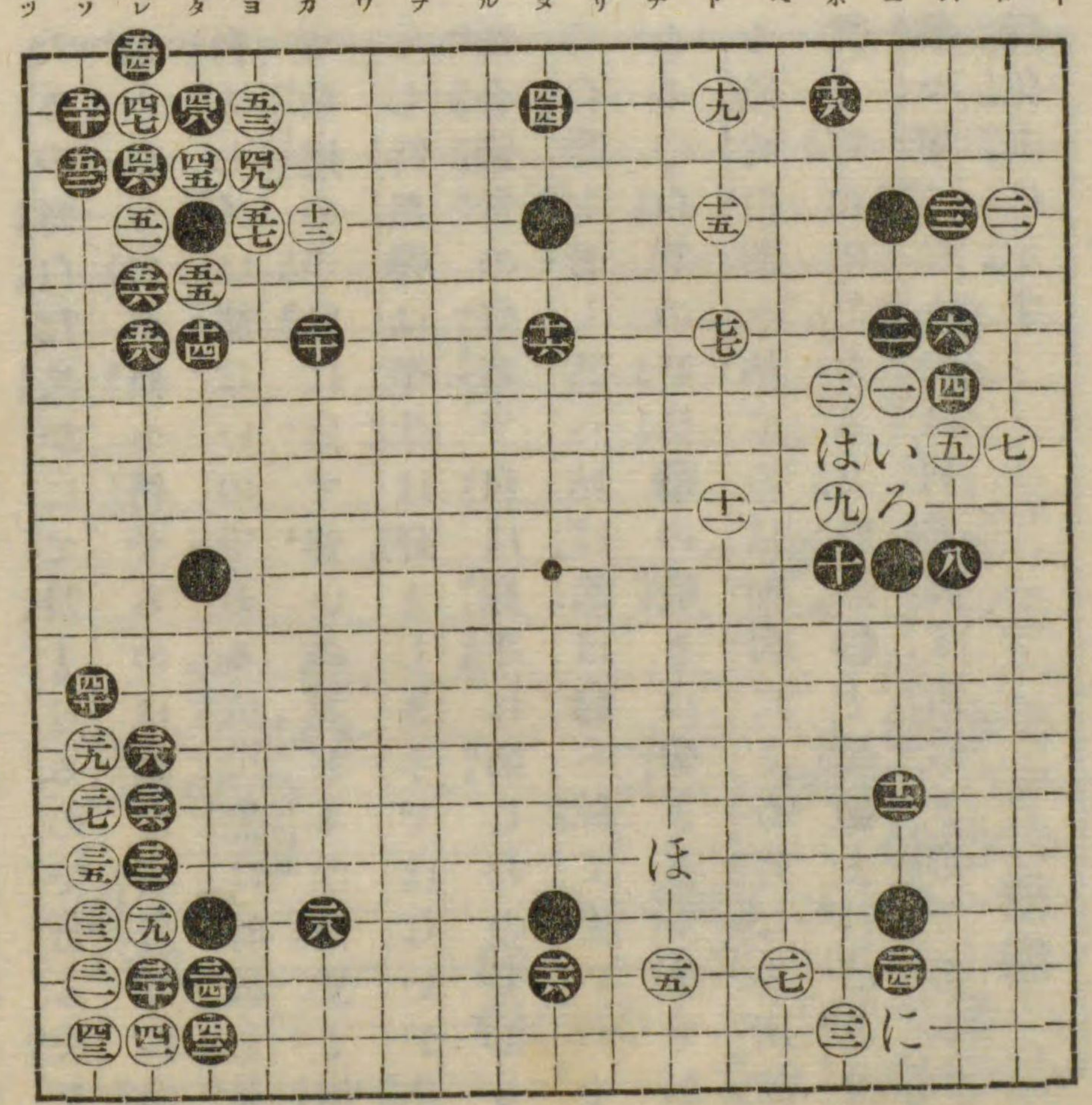
八目の部實戰 第八局

白①と二間に掛りに對し黒附手の受手○白
 ⑦と下りたるは黒が若し①へ切れば白⑧黒⑨は
 白⑩と突出る心算である黒はそうなりても左
 したることはいないが手筋として餘り好ましく
 ない故譜の如く⑧と打て⑨へ切る意味と⑨へ
 覗く意味を存して打つのが善いのである●黒
 ⑤の守り實に適當の地點である○白⑥は黒が
 隅を懸念して一手を費したならば直ちに左側
 へ着手する手段である故に斯かる場合は黒と
 しては細心の注意をせねばならぬ是を譜の如
 く黒に手を抜かれては白の目的は外れたのであ
 る(前々々述べた通り凡て碁は敵の注文に陥ら
 ぬ様に打べき者である)依て白は直に③と脅や
 かして見たれ共黒に④と應せられては何の施

し様もないのである○白⑤は數子を置せた碁
 には往々斯く打つこともあるのである●黒⑥
 は⑦に應じても善い●黒⑧と守り若し白手を
 抜けば直に⑨又は⑩へ冠ぶするかして白石を
 取らんとする手段がある故に白は⑧へ守るか
 又は⑨へ飛ぶ外はないのである何れにしても
 黒は⑩と守りて善いのである斯くなりては白
 も別に手段の施し様もなき故先⑩と頂け黒の
 應手を試みたのである●黒⑪は⑫より約へて
 も善い○白⑬を⑭へ行ければ黒は⑮へ下りて
 宜しいのである譜の如くにては白邊隅に活て
 も上邊の黒廣く且堅固になり白は何の得もな
 いのである●黒⑯は⑰の石を飽迄廣く取る良
 手である○白⑱を頂け⑲と二段に綽ねるの
 黒が⑳の石を取らんとして㉑へ綽ねたならば
 白は㉒と粘⑳の一子を捨て、隅へ振替る趣向

圍碁上手泣かせ 八目の部實戰 第八局 八目の八

八目の八 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九



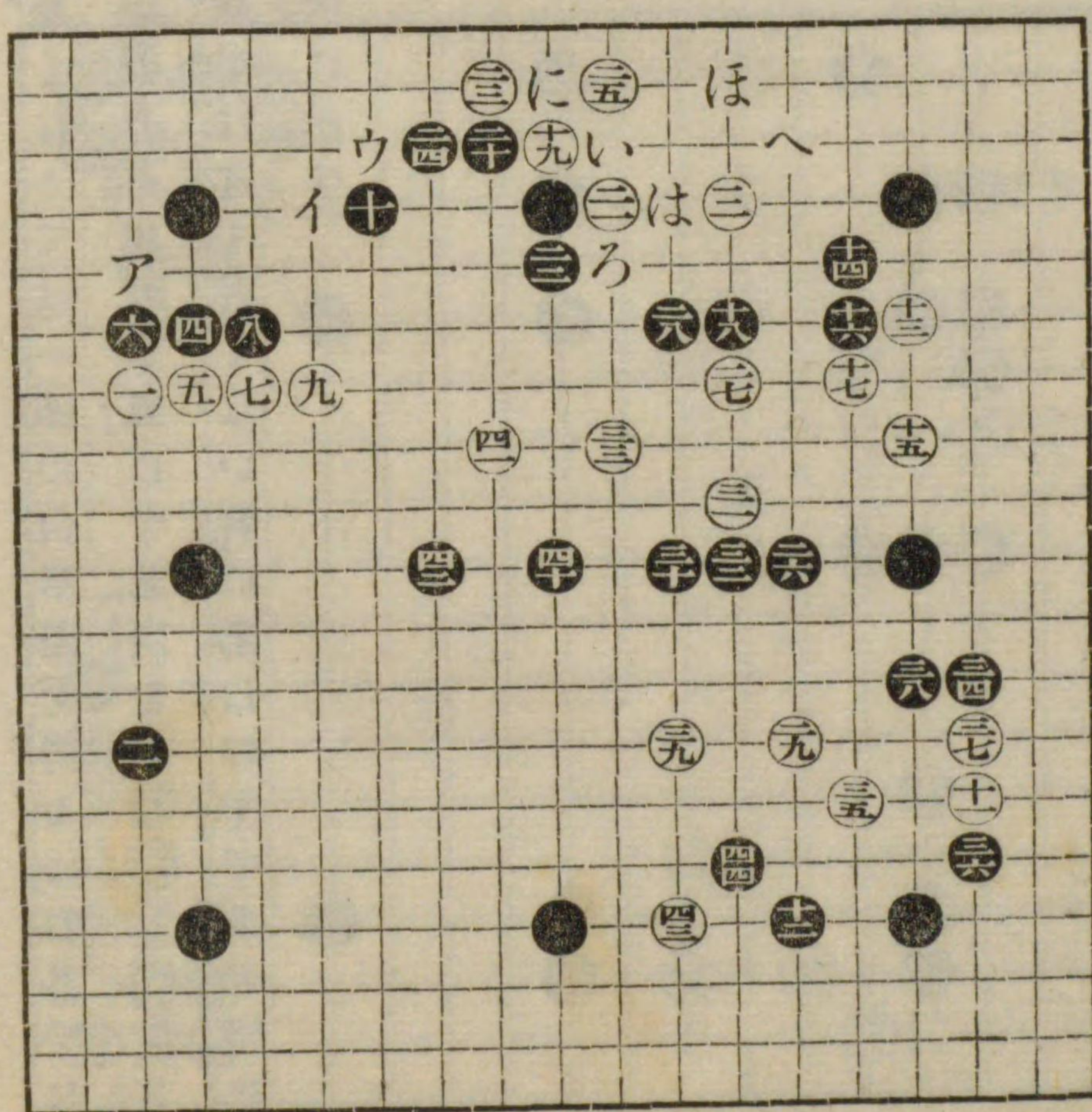
である然るを意外にも⑩と切り⑪と打て置石
 を捨られ白は連絡しても全く眼形が出来ない
 斯くなりては一團の白活路を得るに容易でな
 い縦令必死の工風にて此所を活たとしても其
 結果は必ず善くない實に閉口の型である變化
 次に示す

八目の部實戰 第九局

○白①を大斜走掛りに對し黒手拔の受手○白②に對し黒アとか④とか又はイウとか受れば普通の定石であるが斯く手を抜ても白は別段に手段もない依て先③と轉じて黒の應手を試みたのである此時黒④より⑧迄の手を下し⑩と守たのは頗る穩健の着手である○白⑤と打た時黒⑥の尖み出しは白石を兩斷する手段にて白に誠に打手に窮したのである故に先⑦と外し黒の來り様にて策を立てんとしたのである●黒⑧⑨穩やかにて且つ兩方の白石へ響き居りて宜しい○白⑩は黒が⑪へ綽ね白⑬黒⑭居りて宜しい○白⑮は黒が⑯へ綽ね白⑰黒⑱を黒の方が善いが斯く穩やかに打て中央の白石を⑲の白石とを攻たて、打つ方が紛れがなく

て打善いのである●黒⑳と打ち㉑と白石を攻立る手段少しも隙がなく白窘窮の體である●黒㉒と中央へ飛出す所謂飛敗るなの格言に叶ひ白場面狭くなりて殆ど打様がない白㉓と打黒に㉔と尖まれては如何共策の施す處がない恐らく潰れ型となるであらう變化次に示す

ハロニホヘトチリヌルヲカヨレツ



八目の九
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九

競ふ碁に
蚊はしたゝかに
太りけり

行れは水に
戻りぬ
石の音

八目の部實戰 第十局

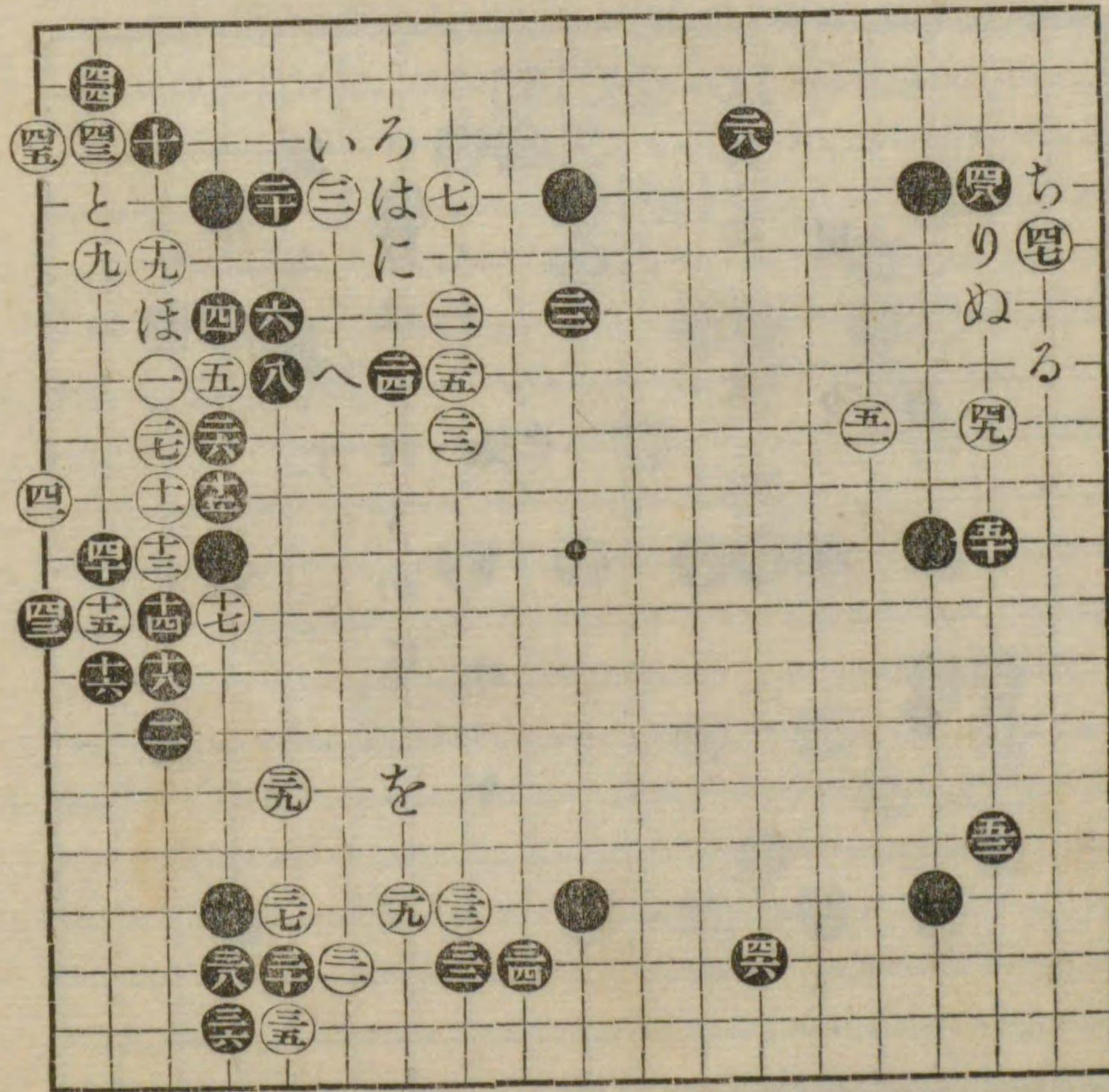
○白①と大斜走掛りに對し黒手拔の受手○白③は④又は⑤等へ打つこともある夫等は追々順を追て記すことにする○白⑦は⑧へ打たい所であるが而すると黒に⑨へ掛られ⑩の一手の所置に窮する故先薄き方面から凌いで見たのである●黒⑧は⑨へ約へ白⑧と打たせて⑨へ縛て打つも善いが斯く上を塗りて打方が黒としては打善いのである○白⑤は打たくはな手なれ共此手を打たずに置くと黒に⑩へ尖項られ白死石となる故夫を防ぎ併せて先手を持ち③と飛出したのである●黒⑥迄の手順を運び⑥と守つたのは實に充分の布石である此時白殆ど打場がないから先⑥と打黒の應答を試みたのである●黒⑥と守り白⑦の時⑦と迫

り白石を攻立る手段尤も宜しい○白⑤迄如何にも平凡の手なれ共斯く打たなければ眼形がない故據ろなく着手したのである●黒⑥以下⑥迄の手順を下して次で⑦と守のは申分のない手段である○白⑧の時黒⑧の譜の外⑨(りぬ)の三點を選び打ても宜しい○白⑤迄は無止打たのである●黒⑥の守りは堅固にて宜しい斯くなりし結果を見れば白は三石共に薄弱にして策の立て様がない此後黒時機を見て右側の白石を攻るには⑨の角から着手し左下側の白石を攻るには⑩へ打つのが手筋である以下緩急を見斗ひ白石を攻立れば自然と勝局となるのである變化次に示す

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ

八目の十

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



さざれ石のいはほとならん
そのごをば斧の柄くたす
ひとぞ見るべき

(光 彪)

するつひにとをはたみそと
よむ石の數よりしげき
おもひやをへむ

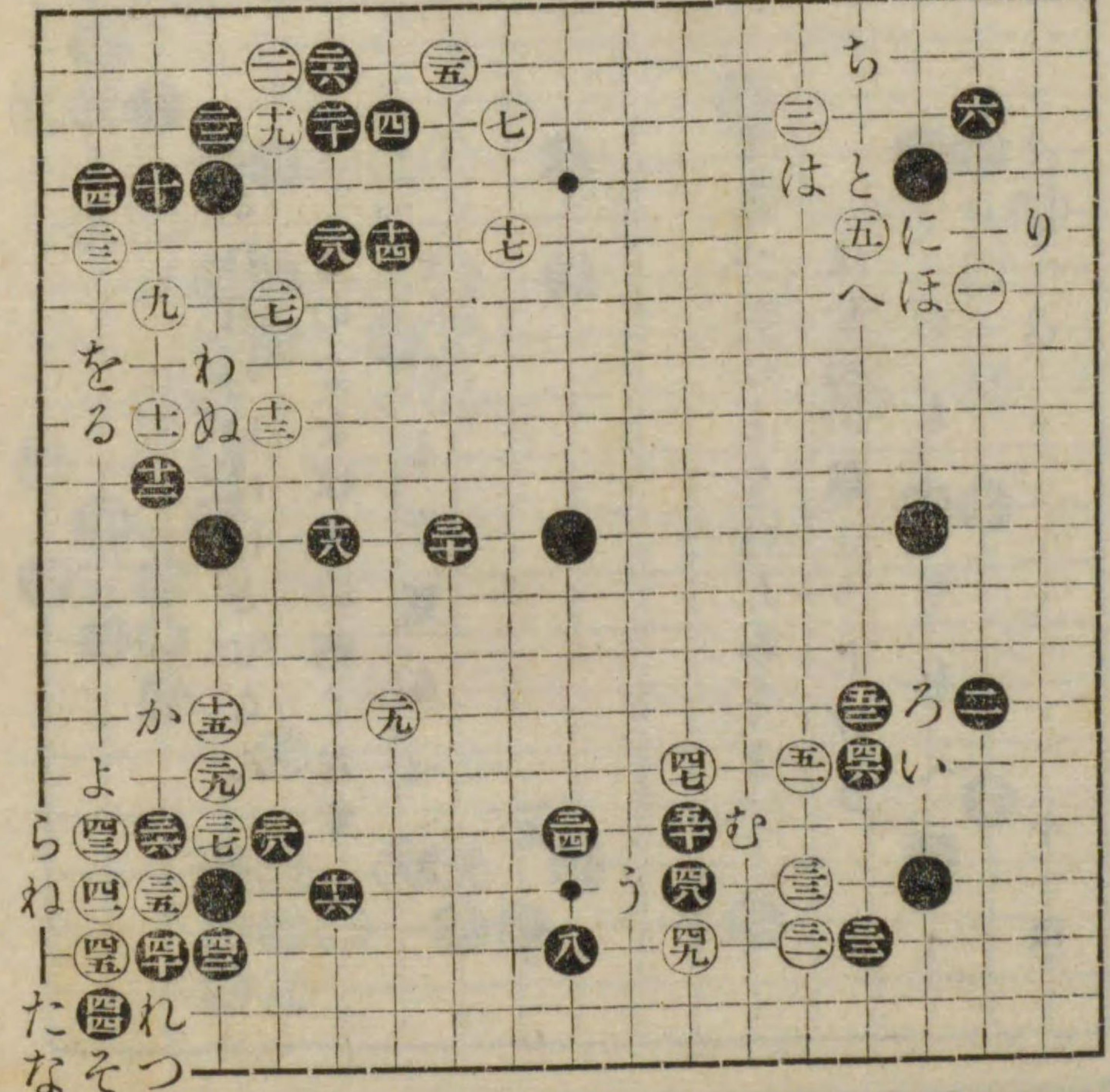
(千 隆)

七目の部實戰 第一局

○白①と小桂馬に對し黒手拔の受手○白②と小桂馬に掛り黒③此方面の手を抜て他へ轉じても差支ないのである●黒④他の執れへ打ても善いのであるが次に白から⑤又は⑥に打たれると中央の置石が煩はしくなく憂がある故斯く⑦と應じた方が打よき局面となるのである○白⑧と來りし時黒⑨を⑩へ項手に出れば普通であるが再び手抜きして白に⑪と掛させ後⑫と⑬⑭に眼形を保つ手段は七子も置た打碁としては白に手掛りがなくして黒としては打善いのである併し四五目の置碁では白に⑮と掛られては面白からぬこと、心得て置くべきである尙此隅は黒は或場合⑯へ出白⑰は黒⑱と切る意味を狙ふべきである又白より場

合に依り⑲又は⑳とへ打つたなら黒は㉑或は㉒に應じて眼形を保つべきである○白㉓は黒よりに⑳へ出切りの意味があるから斯様に場合を占めて打たのである●黒㉔は大場とて尤も好き場所である○白㉕黒㉖は普通の應答である○白㉗は單に㉘に飛ぶ事もある其時は黒は㉙又は㉚へ受て善いのである○白㉛と横に飛ぶのは自己の眼形を作る手である●黒㉜は先づ何となく白に迫るのである○白㉝は㉞へ行れば堅固であるが㉟㊱の間がせまき故飛なければ型とならない●黒㊲は普通であるが轉じて㊳又は㊴へ守りても善いのである●黒㊵は穩かで双方の石へ響ひて善い○白㊶より黒㊷まで此隅の定石は白も㊸㊹と先手に運ぶ働き故差支ないのである●黒㊺は中星へ連絡する手で此にて局勢狭くなり局勢狭くとは紛

ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



七目の一
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

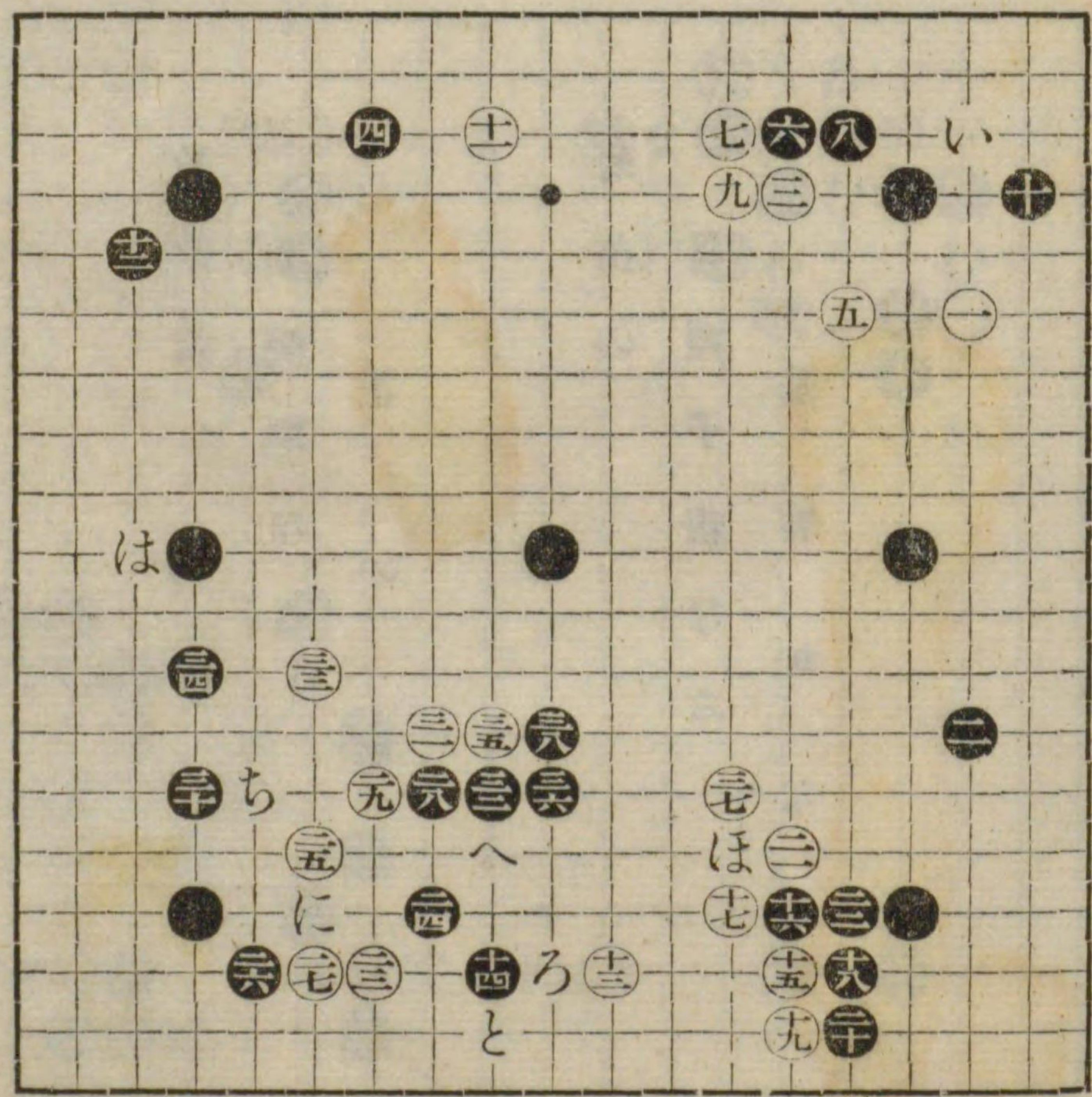
れざる型を云なり黒としては打善き布石となつたので白も手段に窮した故先づ㉑と掛り黒の應手を試みたのである●黒㉒と尖み項け㉓と飛び双方の薄弱なる白を狙ふて打手段申分のないのである○白㉔と項け黒㉕の時㉖と切るのは手筋として打べき手である●黒㉗は㉘い尖む手筋もあるが先づ斯く譜の如く㉙まで應じ置けば紛れる憂がなく善い○白㉚と㉛の一子を取るの白として面白くない㉜へ綽ね黒㉝白㉞と打てば本手筋であるが白㉟へ綽ることは出来ない何となれば白㊱へ綽れば黒㊲白㊳黒㊴白㊵黒㊶白㊷黒㊸白㊹黒㊺白㊻黒㊼白㊽黒㊾白㊿

筋である○白(兎)は黒若し急に此石を取らんと
して(む)へ尖み來れば白は(ら)へ綽出す意味を合
んだ着手である依て黒(卒)は其手段を外して穩
かに打ち徐々に白を攻立てたので安全の策で
ある凡て碁は敵の石が取れそうに見えるとき
に取りに掛り其石を取り損じて自己の失敗を
醸すことが往々ある故強て敵石を取らんとす
べき者である變化次に示す

七目の部實戰 第二局

○白(一)と小桂馬掛りに對し黒手抜の受手○白
前譜に述べた通りである○白(五)の時黒(六)は(い)
へ守りても善いが斯く打つ方が地型廣き故幾
分優しであるが其結果白の外型も堅固になる
から格別の得失はないのである●黒(七)は(ろ)の
大場を打つか又は(は)へ守てもよいのである○
白(八)は打場に困たから先斯く打て黒の應手を
試みたのである此手を(四)へ打つこともある若
し白(四)へ打てば黒は(五)より詰めるのである其
時白(三)へ拆けば黒は(二)へ頂け右側と同様に運
べば善い●黒(六)と頂け(六)と約へる手筋白(七)は
の間狭き故尤も良手段である●黒(卒)は堅固に
過ぎる位である(二)へ守るか又は(ほ)へ綽ても宜

ツツレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



七目の二
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九

友三人

碁に耽る夜ぞ

あけやすき

(旬彦)

又碁かと

女房箒を

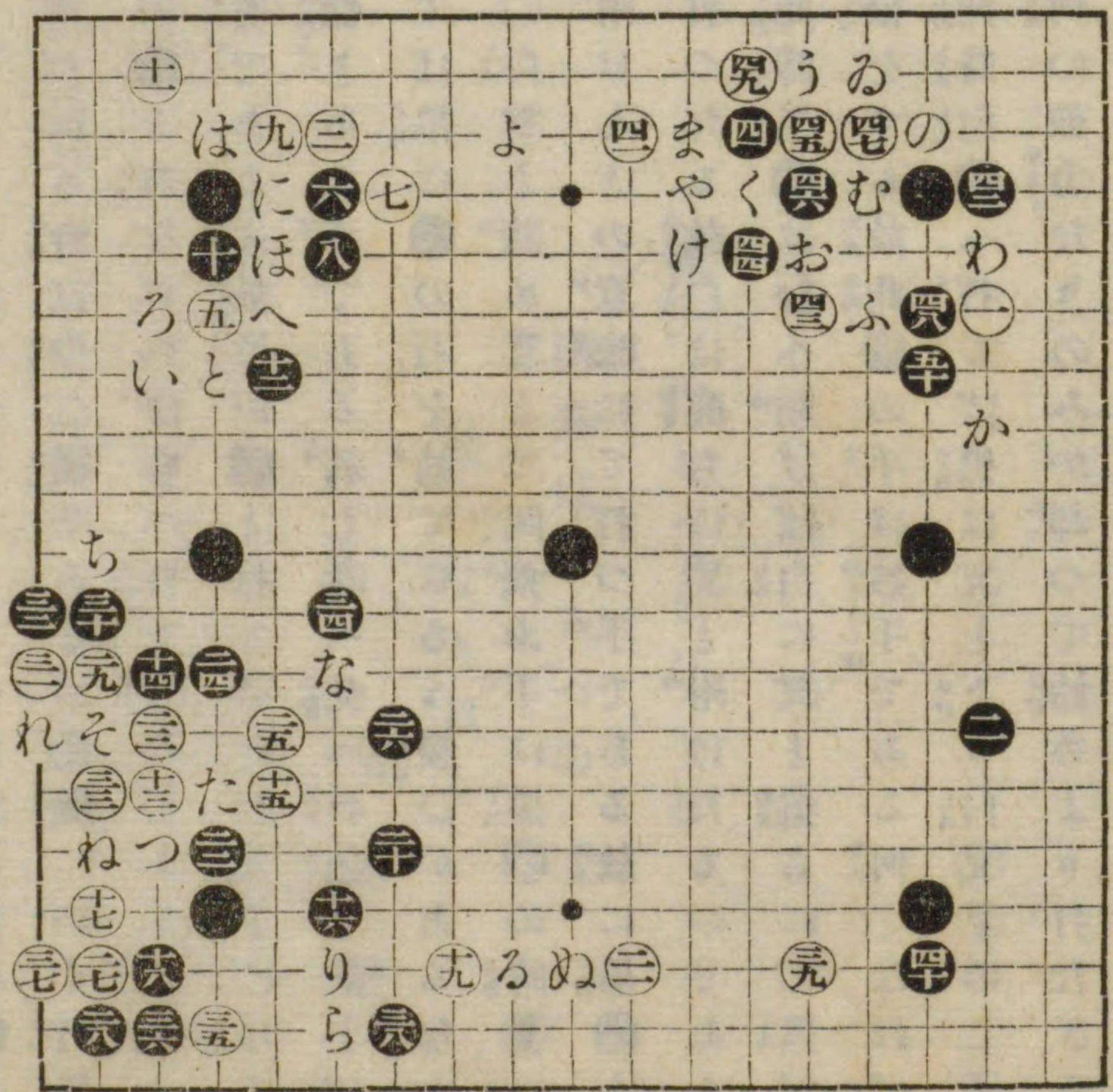
たてかける

しい○白(三)の打込は黒若し(へ)へ飛べば白(と)に打(三)の一隊と連絡を保つ手段である故に黒はそうさせぬと(四)へ尖み左右兩斷して打つのが善いのである○白(四)は(三)へ打ちたき處であるが(五)がなくして(六)へ打てば黒より(七)へ頂越され切斷されると白の型勢急忙になりて悪しき故(八)と打黒が(九)と打たなら(十)へ打考である黒其意を看破して(十一)と守り敵の趣向を外す處實に間然する處がない譜の如き布石となりては黒に紛れを生ずる場所がなく先づ以て勝算の型である變化次に示す

七目の部實戰 第三局

○白(三)を他隅に掛りたる時は黒(四)は(五)又は(六)へ大斜走しても善いのである○白(五)は(ろ)へ掛ることもある其時黒は矢張(六)と項行にて宜しい其時白(九)と行たれば黒は(は)へ應じて善い其時白若し(に)へ出たならば黒(十)白(ほ)黒(五)白(へ)黒(と)と打て五の一子を取り地型となる故(六)八の二子は白に與へても黒の方が割合が善いのである故に白(に)へ出るのは悪手である併し譜の如く白(五)と高く掛りある時は黒(は)へ約へ白(に)と出切られては黒の方不利であるから(十)と打白に(土)と打たせ黒(土)と掛けて五の一子を取るものが善いのである但し(土)の手も左側中央に置石のない時は(ろ)へ綽ることゝ心得べきである○白(土)と掛つた時黒(土)は尤も善き着手である

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



七目の三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九

茶座敷に
碁聲閑なり
花の奥
菊苗の
烏帽子親なる
碁客かな

る若し此(四)を他へ着手すると白に(五)へ打たれ折角黒地型をなしたる處が消滅することになる○白(六)若し(七)又は(八)へ掛り來らば黒は前譜に示したる右側上隅の如く受けて善いのである●黒(九)は(一〇)の星下が大場の好點なれ共此處は白の三子未だ全く眼型なき故斯く廣くして白の弱點を狙ふのである○白(一一)は(一二)の邊へ打つこともある其時は黒は(一三)へ詰め白(一四)なれば黒(一五)へ尖附白(一六)黒(一七)か詰め白を攻むるか或は(一八)の邊へ着手する共夫は黒の任意である○白(一九)の時黒(二〇)と覗き白石の眼型を破つたのは良手である此白石を攻るには此(二一)の所が必要の場處である若白より(二二)へ附られると忽ち眼形が出来るのである○白(二三)の時黒(二四)れ白(二五)黒(二六)つ白(二七)黒(二八)と打てば白の眼型はなくなる併しそうすると白より(二九)へ尖み出られ萬一取り損じた

時黒が損をするから(三〇)と壓迫して上の模様を堅固にした方が安全である○白(三一)は黒に(三二)と打たれる時は少し損であるが此處にかく打黒(三三)と打なければ(三四)へ打て得をしよう云ふ考である夫故黒が(三五)と打てば白が先手になる働きある手である若し(三六)へ先へ打後で(三七)と打てば黒に(三八)の石を捨てらるゝ憂ひがあるなり○白(三九)と詰め(四〇)と二間飛ぶ手は黒(四一)の時(四二)へ附けんとの意味にて打つ手である故に黒(四三)と打つたる故白は直ちに(四四)と附けたるのである此時黒(四五)は(四六)へ粘れば白に(四七)と盤られて黒が損をする故此(四八)の手は妙手である何となれば此時白(四九)へ打てば黒は(五〇)と下り白(五一)の二子何の效力なきのみか却つて始めより打たざるに如かぬ結果となる故止を得ず(五二)へ盤る黒(五三)と打て大に利方である之れ黒の(五四)の妙手の結

果である

(附言)黒(五)の手は(六)へ應ずる手もある其時白(七)なれば黒(八)の(九)白(一〇)黒(一一)白(一二)黒(一三)や(一四)に(一五)の方宜しい尤も斯く打つ手は白に(一六)けと打たれ黒上の二子を征に取られる時は黒(一七)へ應ずる手なしと心得べきである白又(一八)を(一九)へ行びたならば黒(二〇)白(二一)黒(二二)白(二三)黒(二四)白(二五)黒(二六)白(二七)黒(二八)白(二九)黒(三〇)白(三一)黒(三二)白(三三)黒(三四)白(三五)黒(三六)白(三七)黒(三八)白(三九)黒(四〇)白(四一)黒(四二)白(四三)黒(四四)白(四五)黒(四六)白(四七)黒(四八)白(四九)黒(五〇)白(五一)黒(五二)白(五三)黒(五四)白(五五)黒(五六)白(五七)黒(五八)白(五九)黒(六〇)白(六一)黒(六二)白(六三)黒(六四)白(六五)黒(六六)白(六七)黒(六八)白(六九)黒(七〇)白(七一)黒(七二)白(七三)黒(七四)白(七五)黒(七六)白(七七)黒(七八)白(七九)黒(八〇)白(八一)黒(八二)白(八三)黒(八四)白(八五)黒(八六)白(八七)黒(八八)白(八九)黒(九〇)白(九一)黒(九二)白(九三)黒(九四)白(九五)黒(九六)白(九七)黒(九八)白(九九)黒(一〇〇)

いにしへの

聖の作りたまひてし

圍碁はよろづの

教へなりけり

(古月庵)

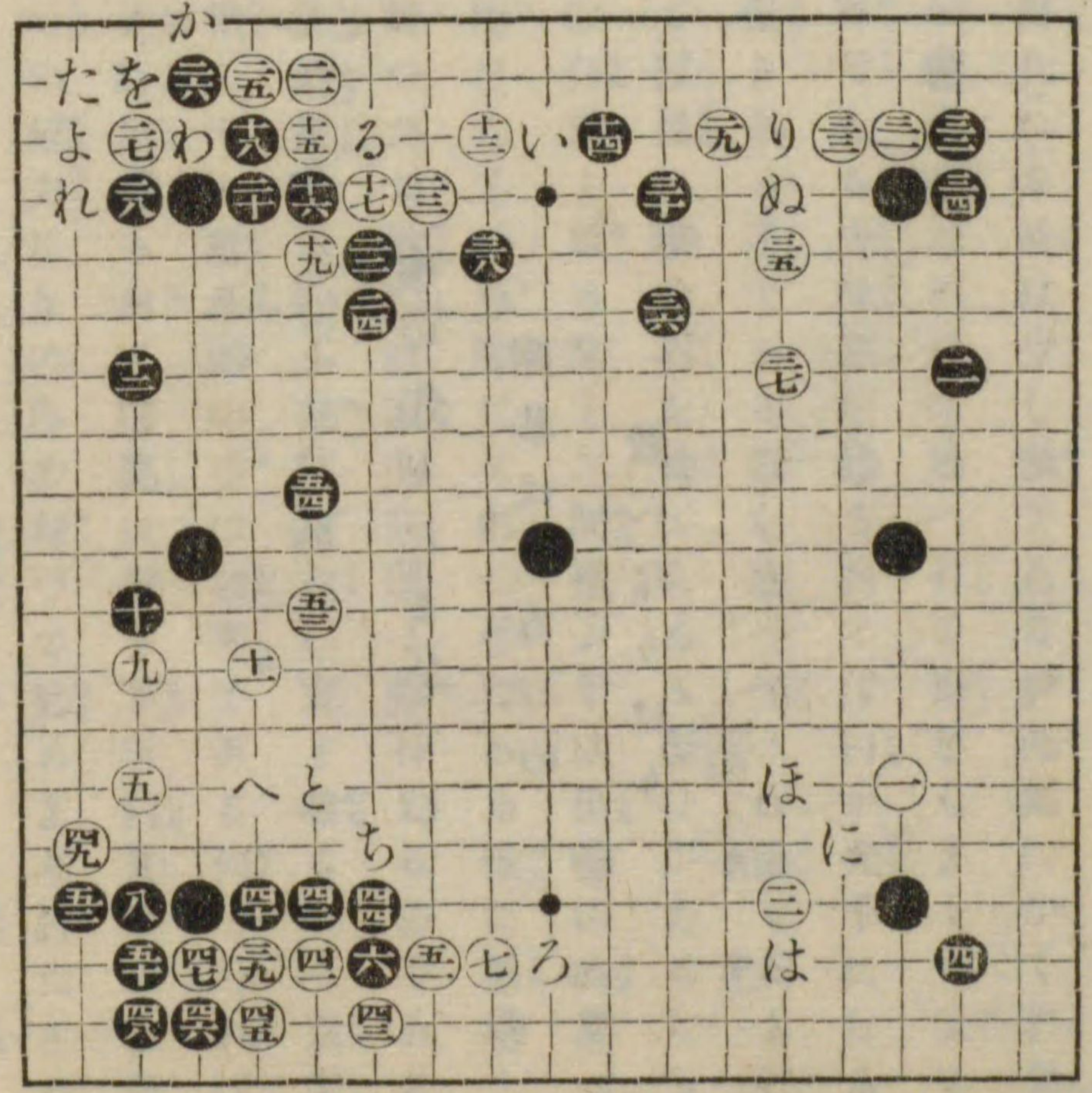
七目の部實戰 第四局

○白①と掛りに對し黒手拔の受方○白②と掛りたる時黒③は必しも此處に必らず(い)る又は他へ打ても宜しいのであるから任意に出てよし○白④は(は)へ掛ることもある其時黒は⑤へ項行の定石に出れば善い●黒④は兎角(に)へ尖みたがるのが初學の常であるがそは面白からぬ手筋である何となれば白より④へ打たれると孰れか一方へ連絡されることになる故斯く④と打置けば安全である而して次に(に)へ尖出るのは好き手筋である白此突出を防ぐ爲め(に)へ尖んだとしても夫は單に①③の連絡する迄で黒は何の痛痒も感じない又白(ほ)へ本手筋を打たとしても後黒は(に)へ尖み自由に白を切斷することが出来る故に最初後手を打て置いて後の

手を狙ふのが善き手と心得置くべきである○白⑤の時黒は大斜走がいやなれば(る)の星下又は⑥或は⑨へ詰ても善い○白⑦と詰めた時黒⑧は普通の守りである此時白⑨を(へ)との邊へ打つこともあり左すれば黒⑩は(ち)へ飛んで宜しい●黒⑩と尖附け白石へ迫り⑪と守るのは善い○白⑫は⑬の邊へ打つこともある其時は黒⑭へ詰めて白(り)なれば黒(ぬ)へ項け左側と同型に運べば善いのである○白⑮の時前々譜に述べたる通り白⑮の距離狭き故斯く打つのが宜しいのである○白⑯を若し(る)へ粘れば黒は轉じて(ぬ)又は⑳へ守て善い故に白㉑を(る)へ粘ぐは上手の打たぬ手である○白㉒の覗きは黒の應手を試みたのである黒(を)へ粘ば白(わ)黒か白㉓となり黒地が減ることになる故斯く㉓と應じて置けば安全である此時白(を)へ打てば

七目の四

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

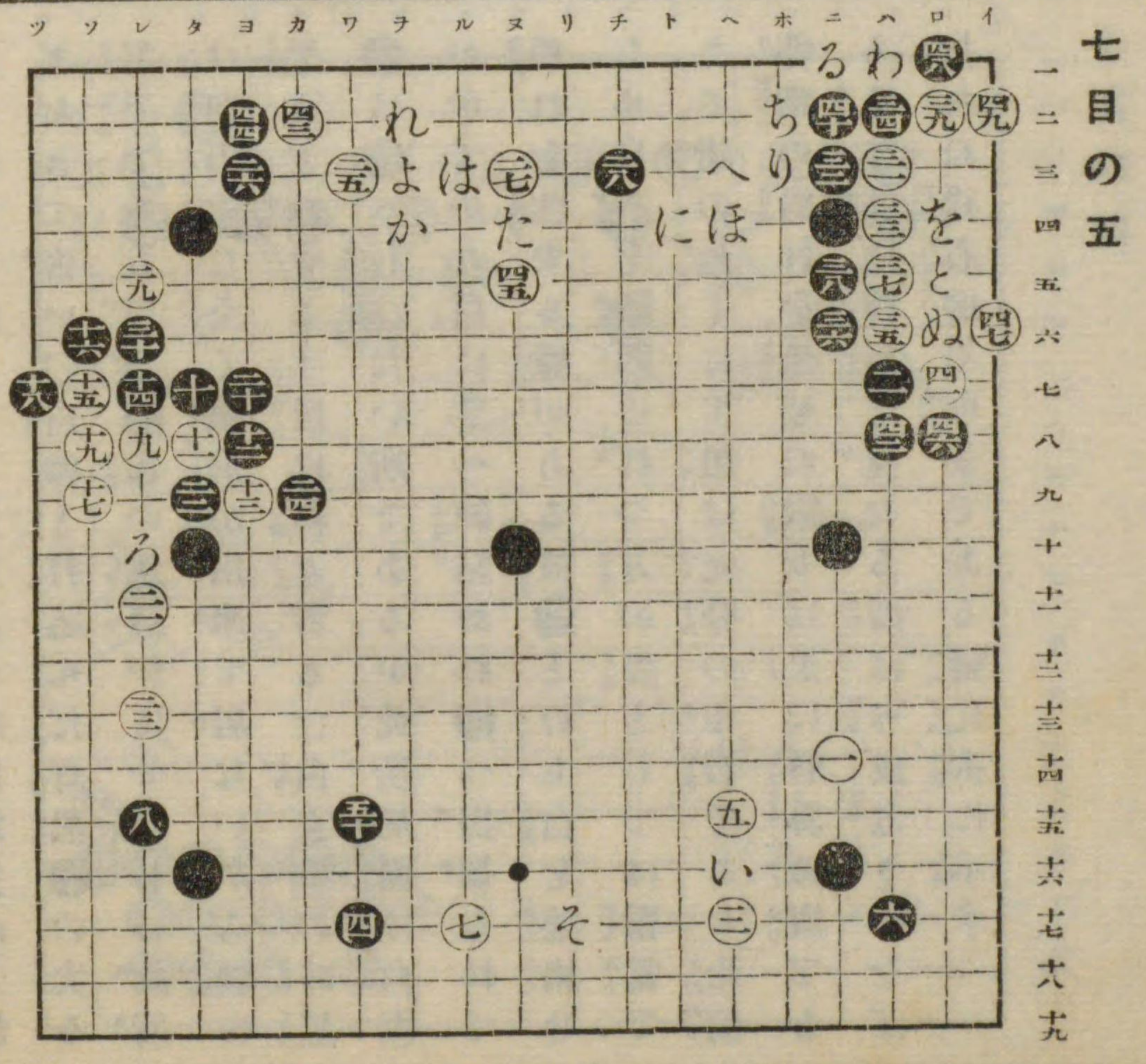


黒(わ)白(か)の時黒他に好點があれば夫へ着手す又夫程好き處なきと見ば(よ)へ縛白(た)黒(れ)と粘ぎおきて善い○白①と打込んだ時黒②の尖み好手である以下③迄の運穩かにて宜しい此所は白石未だ全く眼形が出来て居ないから後に黒より攻立る手段は種々ある○白④⑤の時黒⑥は⑦へ行びたい所であるが此局面は白⑧がかかるから白⑨へ縛粘がれ⑩へ出切られて紛れを生ずる嫌がある故⑪と打ち白を連絡せしめ白石を堅固に打つ方が黒としては穩當である譜の如くにて黒は充分の布石である此後非常の紛れを生ぜぬ限りは黒に勝算確實である凡て碁は勝局と見たる時は可成危き手をば打たぬ様心掛く可きである變化次に示す

七目の部實戰 第五局

○白一と高掛りに對し黒手拔の受手●黒四は
 (い)へ項行の定石に出ても善いが黒最初一と手
 を抜きたる時より此隅は白に數子を打せて後
 六へ打活る手段故其意を實行して又四と打て
 此方面の手を抜きたのである●黒八は此場合
 には數多の好點がある故好しと思ふ所へ着手
 して善い○白九と大々斜走に掛つた來た時黒
 十と角を衝く手は八子井目の部にも示してあ
 る通り斯く白石を壓迫して上邊を地型になす
 手段且白に(三)の所へうたせて黒(ろ)と下る手筋
 を打つ趣向である故に白は(三)と惡姿勢を避け
 て打たのである併し黒に(三)と打たれては此
 處は餘り好ましくないが只先手を持ち上邊へ
 着手し黒地を消す丈白の働きある譯である●

黒(三)は(は)より詰めても宜しい○白(毛)若し(は)は
 (へ)との邊に打ち來りなば黒は直ちに(毛)又は(は)
 へ打白石を隔て、打べきである左側の黒が堅
 固なる丈斯く隔てられては白の局勢急迫して
 惡き故狭くとも(毛)と打て置いて後の手段を謀る
 ののである○白(三)は捨石である○白(三)と打て
 來た時黒(四)は(三)へ約へるのが普通であるが左
 すれば白(と)黒(三)白(四)黒(ち)白(三)となり其跡にて
 黒は(り)へ切られる憂があるから(へ)へ掛粘がね
 ばならぬ斯くして黒は堅固なることは堅固で
 あるけれ共少しく凝型となり尤も黒(三)を(ぬ)へ
 二段に約へ白(三)黒(三)白(四)黒(ち)白(三)黒(三)黒
 (へ)白(を)となる型もあるなれ共白(三)の粘(を)わへ
 約へ劫争にする手段ある故此劫争の結果黒紛
 れを生ずることが往々ある故斯く(三)と綽穩や
 かに上邊を塗る方堅固にて宜しい○白若し(三)



○(三)を他へ着手なさば黒(か)白(よ)黒(た)と打中央を
 塗る手段をするか又は(れ)と打上邊の白の眼形
 を取り白を攻立る杯も一策である●黒(辛)は自
 から守り後(そ)の打込を狙ふのである變化次に
 示す

不得貪勝。入界宜緩。
 攻彼顧我。棄子爭先。
 捨小就大。

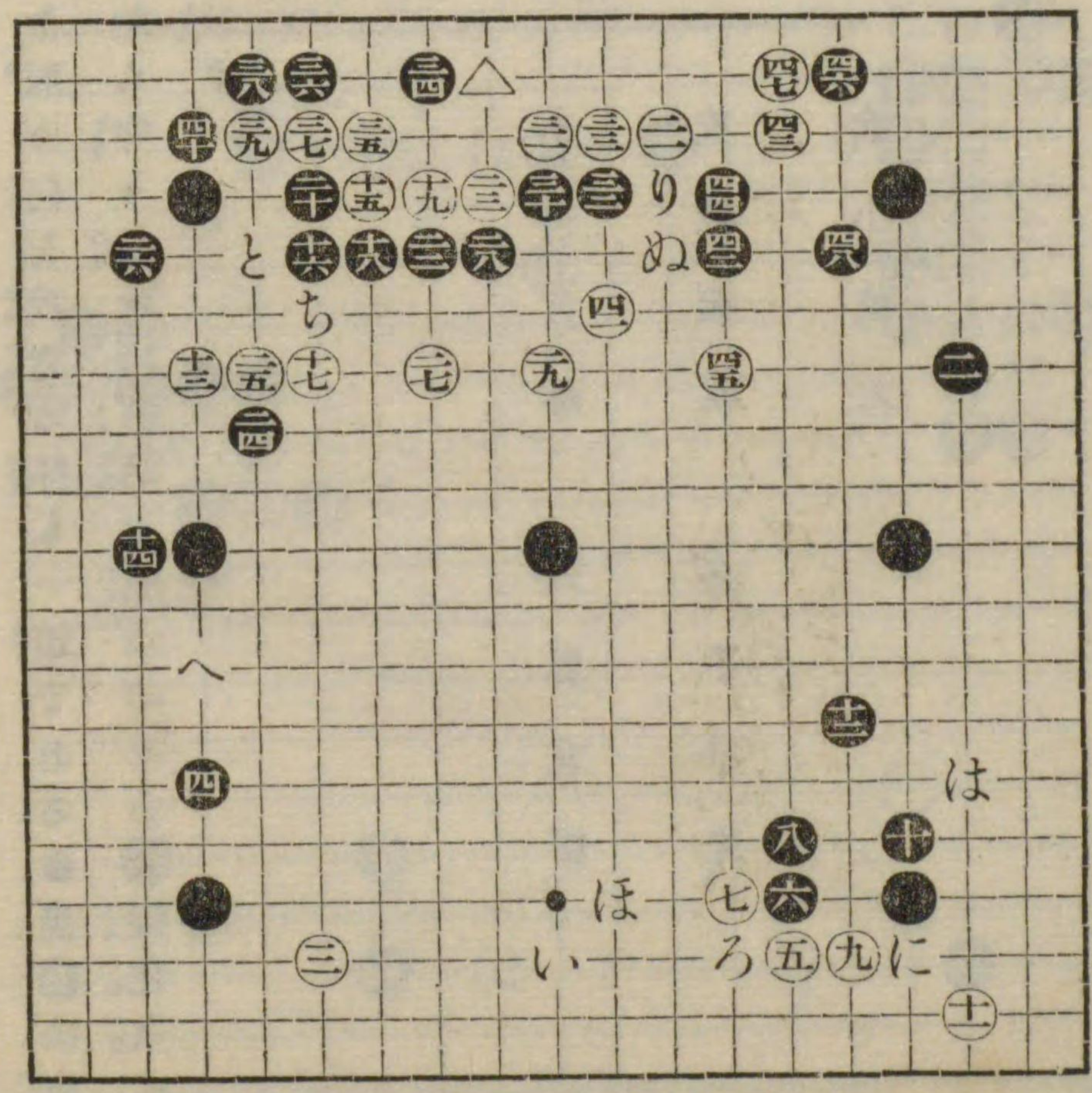
七目の部實戰 第六局

○白①と高掛りに對し黒手拔の受手○白③と掛りたる時黒④は⑤又は⑥へ打ても宜い●黒⑥は手を抜いても宜いが白が③と掛つてある故白に⑦と打たれては下邊の白大模様になり自然黒は打悪き状態になる恐れがある故⑥と項行の手順に出る方が穩當である○白⑧若し(は)へ下りなば黒は(に)へ約へて置て後に(ほ)へ打つ意味を狙ふ可きである○白⑨の時黒⑩の守り堅固にて宜しい是にて白より(へ)へ打たる、手筋を消し上邊の守りともなるのである○白⑪は⑫へ打つこともある其時黒は(と)へ尖み出て白石を隔て、打つのが宜しい又白⑬を普通の如く⑭へ掛ることもある其時も黒は⑮と項行の定石に出て白石を隔て、打つて矢張黒が

宜しい○白⑯を⑰へ押したならば黒は(ち)へ行びて宜しいのである●黒⑱は堅固に過る様なれ共此手は自己を堅固にし敵を攻る手段となり大に味のよき手である○白⑲の時黒⑳と打次で㉑と白石の眼形を奪ひて攻立る趣向尤も宜しい○白㉒自己の用心である●黒㉓と打ち次で㉔は尤も佳き手節である此所白㉕へ粘ぐは筋違ひで實は△印へ打所であるがしかするると㉖の二子だめがすぐ故黒に(り)へ押され上邊が益々堅固になりて面白からぬ故止を得ず㉗と粘ぎたるなり然るに黒に隙さず㉘の手筋へ打たれしは白は大に窮した譯である○白㉙より㉚迄如何にも辛き手なれ共斯く打たなければ此所の凌ぎ様なき故據なくかく打たのである●黒㉛は㉜へ約へても宜い○白㉝は(ぬ)へ尖項を狙ふ手故黒は㉞と並ひて受ける

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ

七目の六



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五

のが宜しい譜の如くなりては黒は益々堅固なるに反し白は中央の石未だ眼形なく何共策の施し様なき形勢なり是より黒は徐々に白石を攻立て局を終らば恐らく敗を取る憂はあるまじ變化次に示す

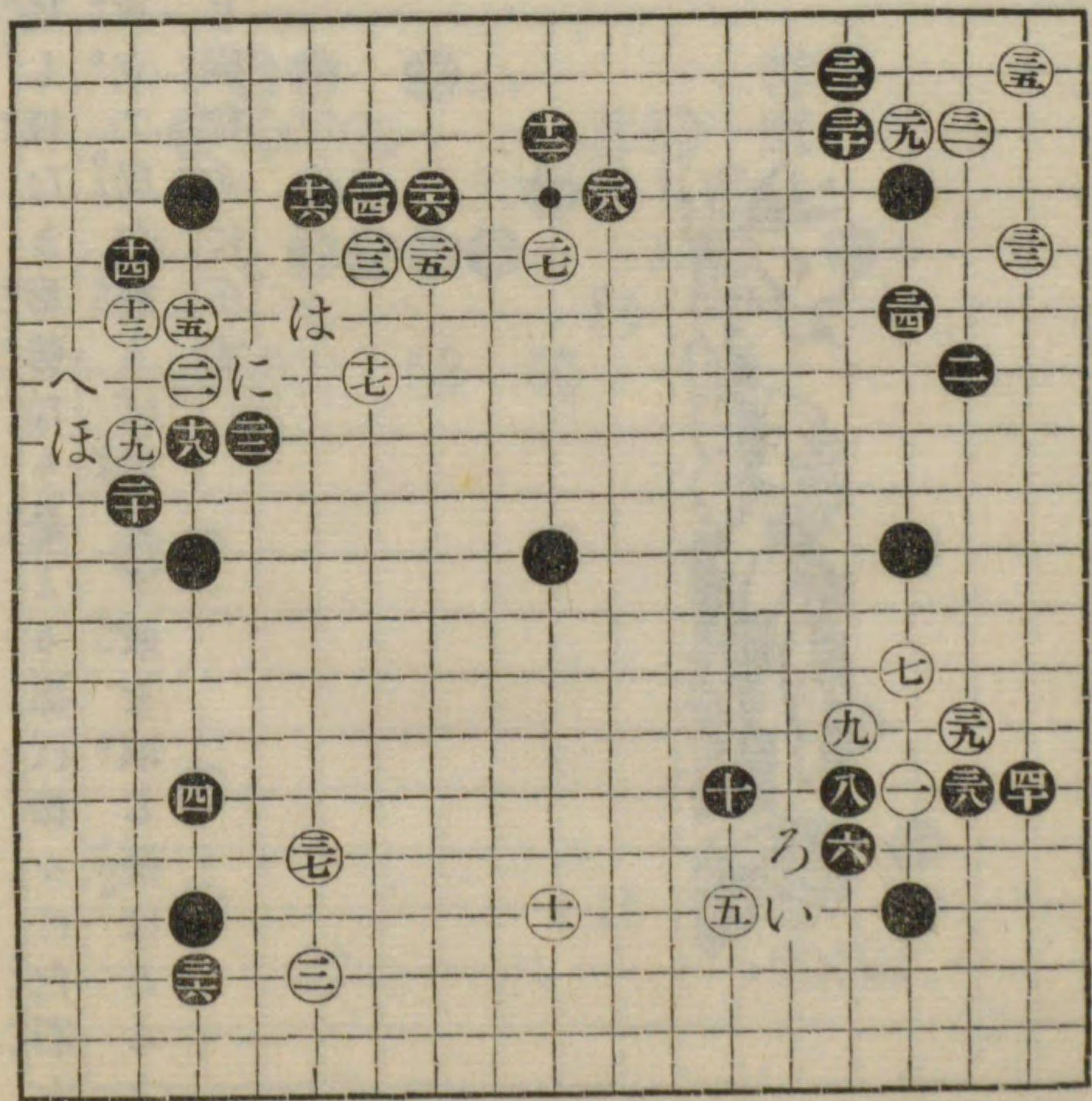


七目の部實戰 第七局

○白①と高掛りに對し黒手拔の受手○白⑤と二間に掛つて來た時黒⑥は④へ項けても善いのである白若し⑦を⑧へ押さば黒は⑨へ行て宜しい此白⑧と押す手は重き手にて上手の打たぬ手である●黒⑩は前に示してある通り大場といふて好點である白左右孰れより打て來ても一方は地型となるのである○白⑪のとき黒⑫と尖項白に薄り⑬と守りたるは良手である○白⑭は只手筋として打ち黒の答手を試みるたのである●黒⑮は白石を攻る手段である此時白は又は⑯へ打てば無事であるが夫では單に白石の連絡を謀る丈けで何の働きもなき故⑰と附⑱と打ち幾分の眼形を保たのである黒此時普通の如く⑲に縛ると白に⑳へ却に受ら

れて面白くないから斯く⑳と行び⑰へ打ち白石を兩斷する趣向に出たのである白に於て而かされては困る故に㉑と飛んで之を凌いだのであるが此㉒は白に取りては如何にも打ちたくない辛い手である斯様になりては上邊の黒確實の地型となつたのである併し白は此外に手はないのである之畢竟黒㉓が好き手筋故白止むなく悪手を打せられたのである○白㉔と附たる時黒㉕は㉖より約へ白を外で活し黒が隅を守りても善いが斯く打ち先手を持ちて㉗と守り㉘と打つ手となれば充分の布石で白何共乗する所がない此後黒多少の失着ありとしても勝算は確かである尙ほ變化は次に示す

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



七目の七

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

世をわたる道のをしへと
いにしへの
かしこき人や碁を作りけむ

白浪の打ちや返すとまつ程に
濱のまさごのかずぞ積れる

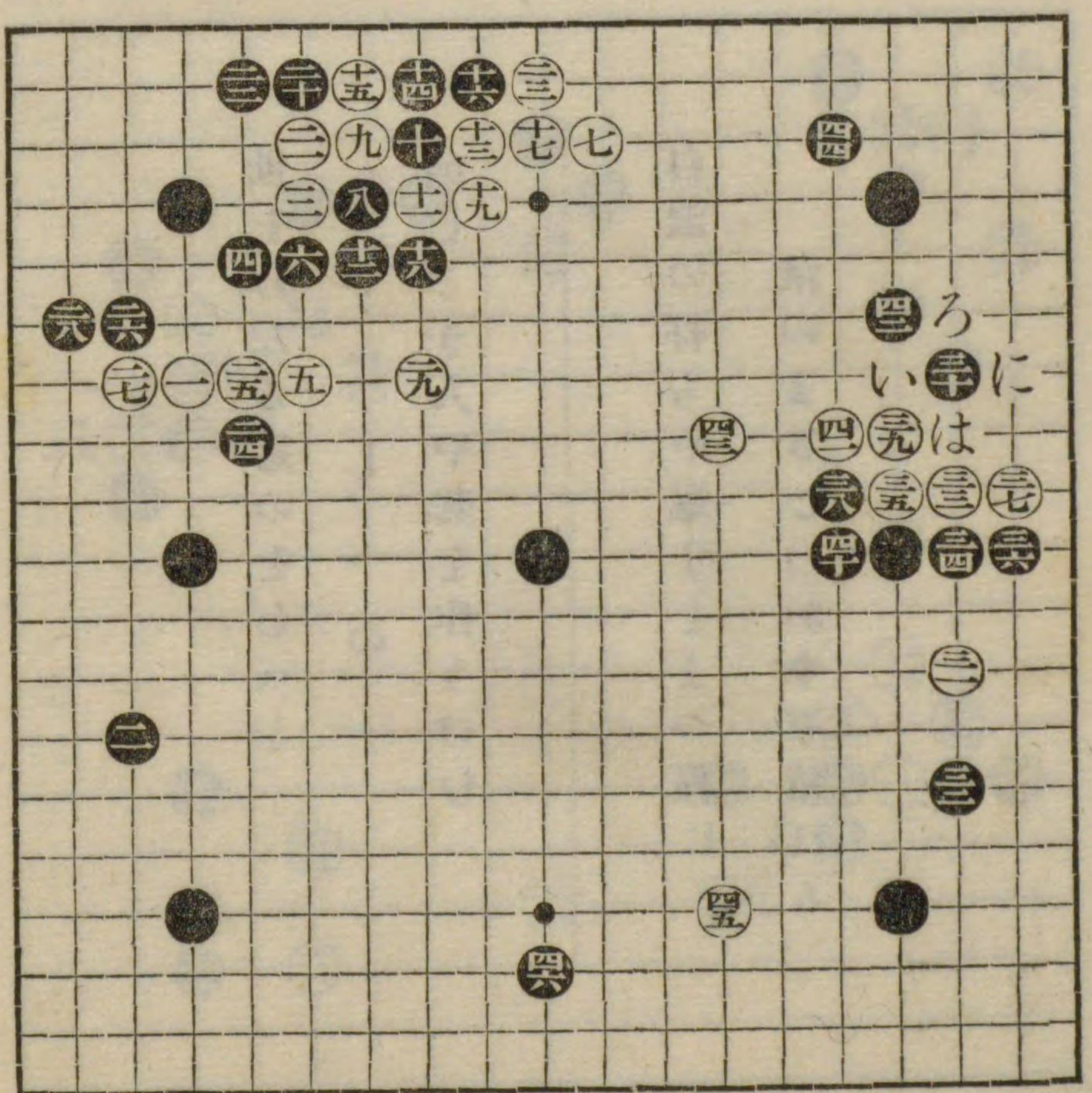
七目の部實戰 第八局

○白①と二間掛りに對し黒手拔の受手○白③
 黒④は前譜七目の七に示してある○白⑦は⑧
 又は⑤が普通なれども黒に⑥と打たれて白石
 か重くなる嫌ある故斯く⑦と外し黒の打方に
 依り趣向する考である黒⑧と綽ね白⑨の時黒
 又⑩と二段綽したのは良着である白⑨と綽る
 手は元より③の一子は捨る積りである黒が④
 と覗き⑥と守り白石の眼形を奪ふ手段頗る
 機に適して居る若し此時白⑥を打たないで黒
 より⑥と攻られれば恐らくは白の活路はな
 らん●黒⑥の時は數多の好點がある其内孰れ
 を擇んで打つても善い○白⑥は無理の手なれ共
 數子を置かせた碁には往々斯く打つこともあ
 る白の意中は③の一子を捨て上隅へ何んとか

關係を及ぼす手段である故に④と押した此時
 黒⑥の下りは忘れてはならぬ手である普通の
 場合は④へ行るのであるがそうすると白は⑤
 へ綽粘の意味を残し隅へ手段をするのである
 然るに斯く⑤と下られ白⑥黒⑥以下の手順と
 なりては白如何共手段の施し様がない白若し
 ⑥を⑦に頂けられれば黒⑧次に白⑧なれば黒は
 ④に行びて宜しい白又⑦を打たずに⑥に行び
 れば黒は⑥へ連絡して充分なるに反し白石は
 薄弱にして面白くない白又⑧の時⑧へ突當る
 手がある其ときも黒は矢張⑥へ下るのである
 而して白⑦なれば黒⑦へ行び白上へ出ること
 になりて黒か堅固になるのである元來白の③
 が無理である故黒か應手を誤らなければ白が
 悪くなるのは當然の結果である尙此無理手段
 は數子置せた碁にては白として止むを得な

七目の八

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七

いのであるが黒は又其無理を咎めて打つ様に
 せねばならぬ局の如くなりては黒に縛れを生
 ずる場所がないから勝算充分である尙ほ變化
 は次號に示す

短が夜の
 鶏か
 させけり
 碁の和解

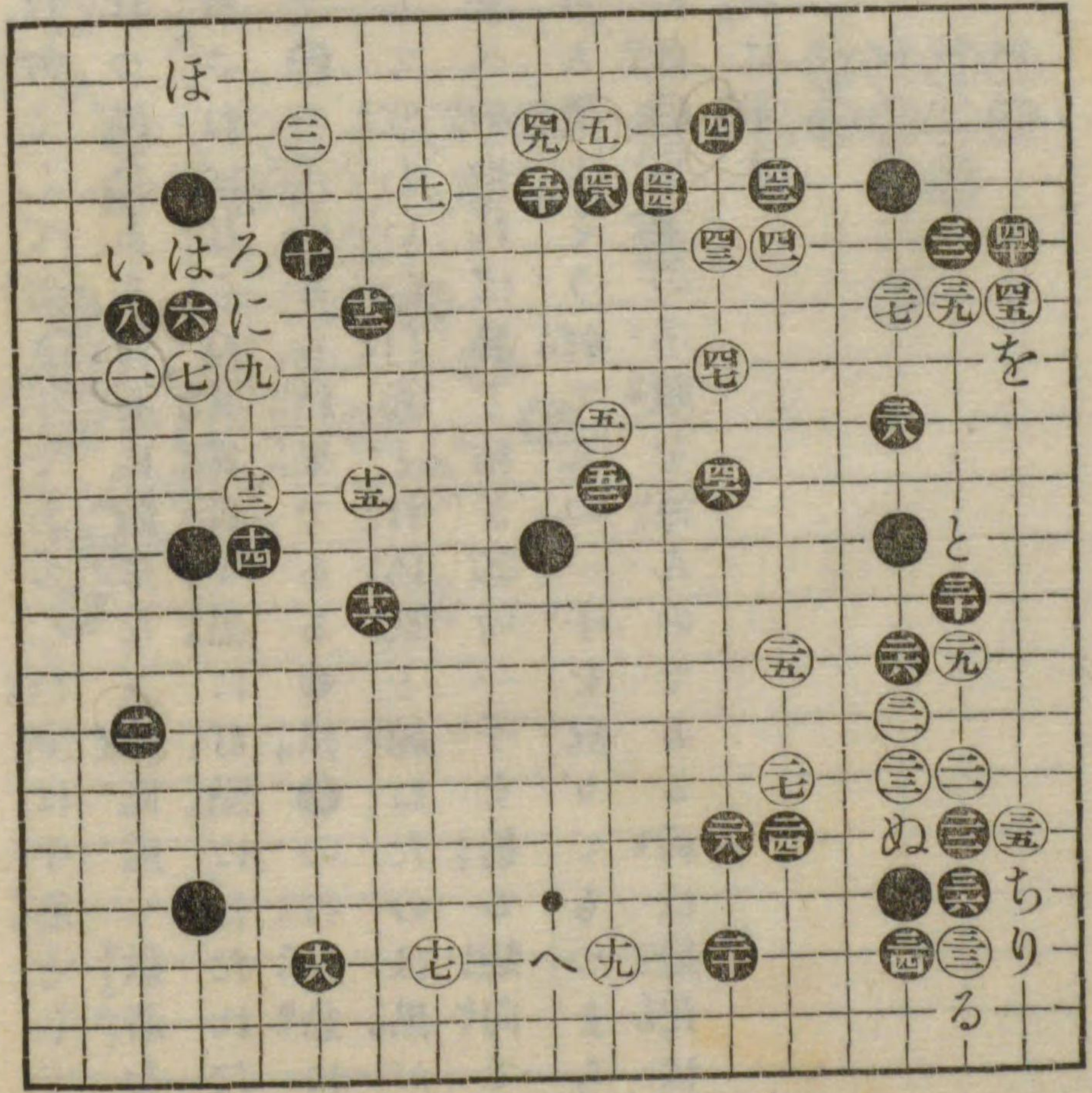
温泉場に
 來て碁に
 親しみぬ
 夏百日

七目の部實戰 第十局

○白①と大斜走掛りに對し黒手拔の受手○白②と掛りたる時黒④は(ほ)へ尖めば普通であるが手を抜いても白より別に打つ手もなき故斯く打ても宜しい此時白⑤を(ろ)へ掛れば黒は白⑥(ほ)と打て善い又黒は(い)へ尖みても差支ない然れば白⑤と打ちし故黒⑦以下⑧と上へ出たのが適當である●黒⑨は(へ)との二點を擇んで打つもよろし●黒⑩(へ)より詰ても宜し○白⑪のとき黒⑬と尖隅⑭と斜走するのは白石を守り且つ敵を攻むる手段である○白⑮は手筋である黒⑯は夫を咎めたのである○白⑰以下⑱迄手筋であつて且つ眼形を保つ手段頗る面白し○白⑲と打込たる時黒⑳穩かにして宜い●黒㉑は(ち)へ繰出し白㉒黒㉓(り)白㉔(ぬ)黒㉕(る)と打つ

ても差支ない○白㉖は黒が㉗なれば㉘へ飛び黒の位を低くする考へである黒は夫を看破して㉙と打ち白若し㉚を打ざれば黒は優に㉛へ守るのである○白㉜へ對し黒㉝は緩き手の様なれども(を)へ打ち中央と隅と連絡し且つ白石の眼形を取る手段宜しいのである○白㉞と隔てたる時黒㉟と連絡するだらふが黒も左側へ連絡しさへすれば局勢無事にして黒が優勢である故に黒は強いて白を取らふとしないで除々に打てば宜しい

ッソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



七目の十
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一

下女殿を

ないしよで

起す碁の歸り

(碁 雪)

碁にまけて陽氣を

立てけり禿頭

けふは一入

寒き夜なるに

(山人)

大正五年四月七日印刷
大正五年四月十日發行

(圖基上手泣かせ奥附)

正價金六拾五錢

著者

關源吉

發行者

前田慶次

印刷者

渡邊八太郎

印刷所

日清印刷株式會社

不	許
複	製

發行所

東京市京橋區本材木町三丁目五番地
振替貯金口座東京一四四七番

星文館

□子爵 秋元興朝序
 □六段 雁金準一 共著
 □五段 關源吉 共著

評好
置碁布石要訣
 必勝

和裝全一冊
 用紙極上等和紙
 菊版二百四十頁
 正價金壹圓廿錢
 送料八錢

本書は圍碁界の重鎮雁金六段、關五段の兩先生が、古來圍碁の書汗牛充棟當ならざるに、未だ曾て置碁に關し世に良書なきを遺憾とし、多年の研究卓見に依り、新しき石立の要訣を萬人未到の域に立ち入り、一手ノ懇切に詳解したもので、何人も本書の妙趣を味つて對戰せば、其強敵手をして啞然たらしめ、連戰連勝如何なる名人上手と雖も、忽ち降伏して兜を脱がざるべからず、愛碁家の見逃すべからざる名著である。

□木堂犬養 毅題
 □子爵 秋元興朝序
 □七段 中川龜二郎 閱
 □五段 關源吉 著

新刊
圍碁侵分と劫
 秘訣

和裝全一冊
 用紙極上等和紙
 百八十五頁
 正價金七拾五錢
 送料八錢

圍碁の勝敗は、其最初の石立如何に關係するは勿論なれども、所謂終局の勝利と否とは、侵分並に劫立の巧拙に依りて決せることが多いのである。同等の碁に於て「侵分の爲めに敗れたり」とか上手下手對局の場合に於て「上手には侵分せらるゝから」などの嘆聲を聞くことも屢々で、「上手から劫を仕掛けられては必らず敗るゝを以て相手になるな」なども一部初心の人の語草となつて居て、閉口らずに擲てる劫を擲たずして大損を招きて敗るゝこともあり、最後半石の劫争が勝敗の決の分るゝ處となつて居る場合に劫立の拙な爲め、劫數不足して遂に敗となること等もあり。侵分と劫立とは實に輕々しく考へてはならぬ。

然るに古來の圍碁の書汗牛充棟當ならずであるが、大抵は定石とか布石とか、上手の打碁、さては死活の作物などで、此大切な侵分や劫立のことを書いた者が殆んどない。偶々天保十五年出版の第十一世井上因碩師著の終解録と近年都谷森三段著の侵分の勘定とがある位である。然るに終解録には型を作りて打手を示し其打手は何目の得に相當すると云ふことを示すのみで、詳細説明してないから初學者の者には了解し難い、又後者は流石近年の著故に能く説明しあれども、また充分ならざるは遺憾とする、夫故自分は敢て不敏を省みず茲に「侵分と劫附劫の振替」の書を公にしやうと決心したのである。(著者述)

□木堂犬養毅題
□五段野澤竹朝著

三版出版來

圍碁實戰解剖篇

本書は圍碁界の驍將野澤先生が、碁界名士の實戰圖を捉へ、著者獨得の見地より、圍碁の理論と、要訣に渉る所を一手／＼解剖的に嚴しく論評して、萬人未到の域に立ち入り遺憾なく公開したもので、未だ師匠の手に掛からざる人は勿論、普通の碁經を金科玉條と心得て居る人なども、此書を繙かば恰も夢の醒めた様、秋から春が一足飛びに來たやうに、一讀啞然再讀豁然として、悟る處があらうと信ず。殊に附録は圍碁速進の秘訣にして、愛碁家の見逃すべからざるものである。

和裝全一冊
用紙極上和紙
菊版二百三十頁
正價金壹圓廿錢
送料八錢

202
424

202
424

